

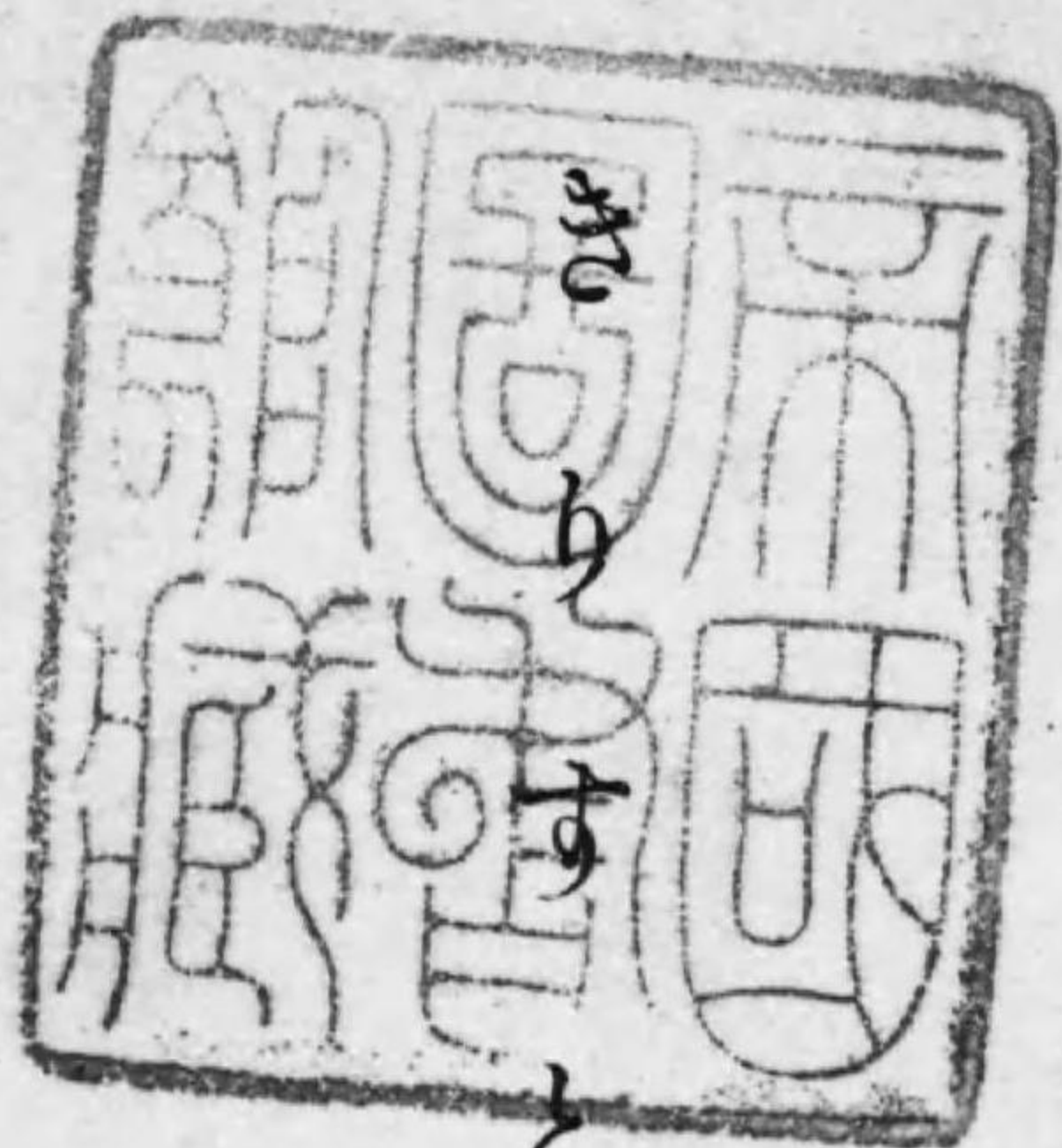
504
244



始



504-244



傳

柴田勝衛 譯
パピニー 著

大正
13. 2. 15
内交

第一版

一九二四年一月廿五日印刷
一九二四年二月三日發行

はしがき

現代のもろもろの社會運動、乃至文化運動にたづさはる人々は、たとへば各派の社會主義者らにせよ、またプロレット・カルトやガンデイイズムやムーヴマン・ドウ・クラルテやロランデイスムに参加する思想家たちにせよ、其のおのおの、思想感情に對しては皆な、宛かも一種の宗教的信仰に似た力強い信念を懷いてゐる。それが一方

に於て既成宗教を否定しつゝある現代人にこの事のあるのは何のためか。畢意するにこれ天國を地上に顯現せんがための現代人の意欲に外ならぬではないか。彼等は天國を地殻の外に求めず我等の現實に、神を彼岸に求めず我等の魂の中に求めつゝあるのである。人間から人間味を抜き取つて神に祀り上げる代りに、神を人間にまで引下ろして來て地上に天國を創建しようとして企てゝあるのである。それが時代の欲求でもありまた時代の新しい幻影でもあるのだ。

この社會科學、社會思想の脊後にすらも潜むところの時代の欲求、時代の新しい幻影を、それらの科學思想によらず端的にキリストの四福音書によつて披瀝したところの藝術が文學的所産が、即ちこのバビニーの「キリスト」傳である。それは時代の思想を以て外側から上塗りしたものでなく、生を現代に享けた著者の魂のどん底から自然に湧出した熔岩とも見做さるべきものである。その熾烈な情熱の力は敢へて著者の雄辯を埃つまでもなく、己に人間社會のあらゆる邪念邪思を灼き盡さず置き置かぬだ

らう。バビニーはもと無神論者であつたのをヨーロッパ大戦を體驗したのち俄然、心機一轉してキリスト教の信仰に入り、その入信の経路を書くつもりで一氣呵成にこの大著を脱稿したとのことであるが、かのファスシヌチの統治下からこのやうなプロレタリアート思想家の生れ出たことも興味のある對照なれば、また新聞紙に投影するところのもろもろの生活事情に最も暗黒面の多いイタリーから斯うした熱烈な求道者の生れ出たこともまた興味の多い對照である。

古來、聖書を藝術的に解題したもの、中で最も有名なのはかのルナンの「ヤツ傳」に止めを刺して來たが、そのルナンが生れて丁度百年目に今またこのバビニーの「キリスト傳」が現はれ、その藝術的價值に於て己に「世界の古典文學に加へらるべき」とものとされてゐるのは、偶然の事ながら何たる奇縁であらう。しかも私のこの譯に用ひた英譯者ドロシイ・カンフィールド・フイツシャヤもまた米國における相當の女流文學者である。さうして此等の諸條件が私のこの譯を成す上に於てどれだけ私を刺戟

したことが知れない。私はこの譯を公けにしたのち更に「續キリスト傳」を公けにするでらう。委はしい感想はそれに譲るとして今はたゞ、附録に本書の懇切な解題を寄せられた岡田哲藏先生の勞を謝して、はしがきの筆を擱く。

一九二三年十二月廿五日

柴田勝衛

四

目次

馬小屋	一
牡牛と驢馬	三
羊飼ひ	五
博士たち	七
アウグスト	一〇
ヘロデ王	一二
罪なき者	一五
エジプトに逃る	一七
褒失者、見出さる	二一
木工として	二五
父の本分	二九

田舎……………	三三
古い契約……………	三五
預言者たち……………	四四
來らんとする者……………	四九
火の預言者……………	五七
最初の宣言……………	五九
參籠……………	六三
禮洗……………	六八
荒野……………	六九
サタン……………	七三
歸還……………	八二
神の統治……………	八六
カペナウム……………	九二

貧しき人々……………	九七
初めの四人……………	一〇三
山……………	一〇九
幸福なるかな、貧しき者……………	一一二
幸福なるかな、柔和なる者……………	一一五
幸福なるかな、悲しむ者……………	一一六
幸福なるかな、義に飢え渴く者……………	一一七
幸福なるかな、憐憫ある者……………	一一八
幸福なるかな、心の清き者……………	一一九
幸福なるかな、平和ならしむる者……………	一二一
幸福なるかな、義のために責められたる者……………	一二一
我がために人、汝らを罵り……………	一二一
靈妙な逆説……………	一二四

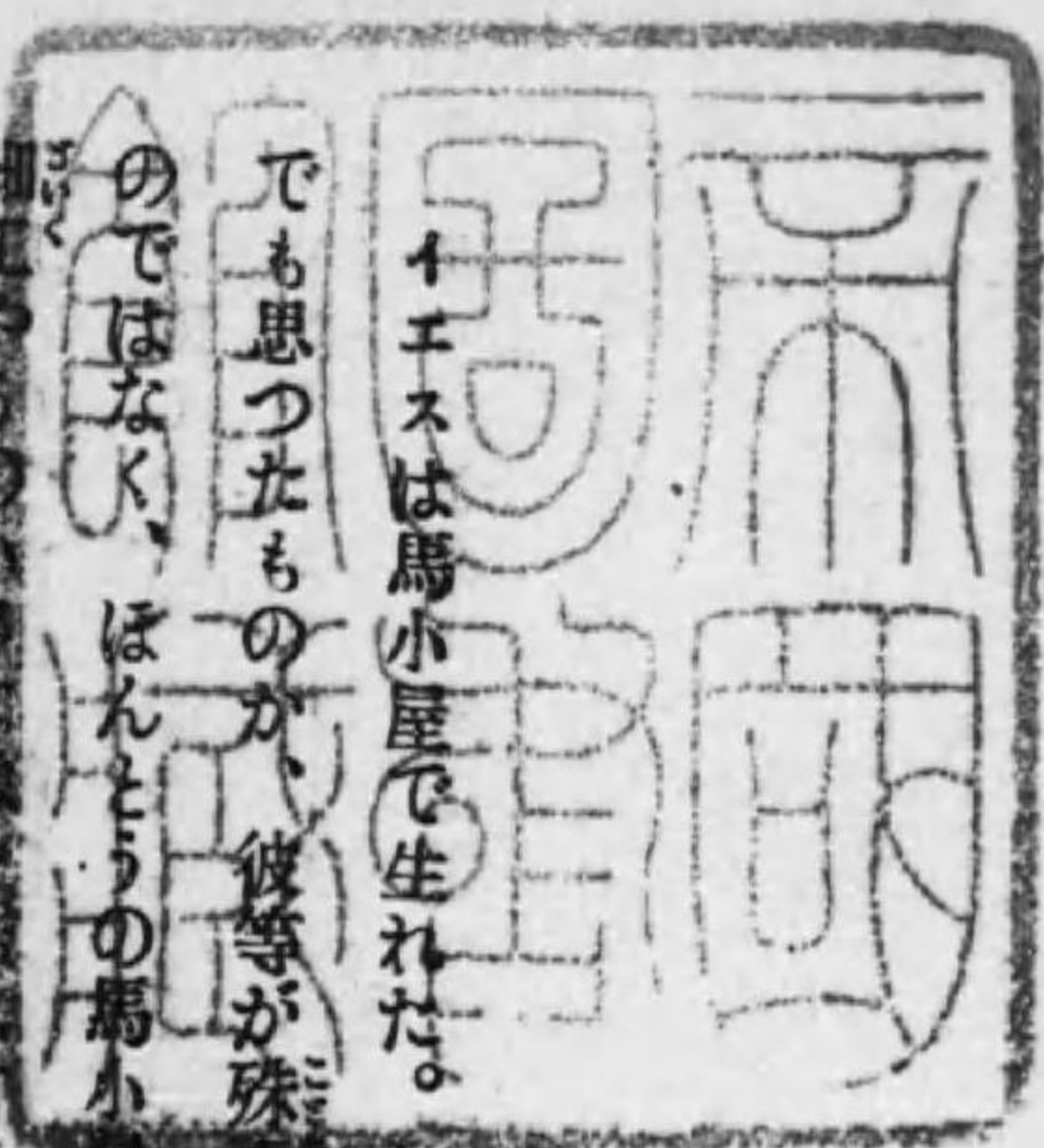
汝ら嘲けり……………	一三二
されど我は汝らに告ぐ……………	一三六
無抵抗……………	一四三
本然に反抗して……………	一四九
愛以前……………	一五五
アキレスとプリヤム……………	一六五
愛すべし……………	一七一
最後の實驗……………	一七七
我らの父……………	一八二
力ある行ひ……………	一八六
盲人、見る……………	一九二
ヨハネへの答へ……………	一九六
タリ・タクミ……………	二〇〇

醒まされしラザロ……………	二〇二
カナの婚禮……………	二〇五
詛はれし無花果の樹……………	二一〇
パンと魚……………	二一三
隠し立てなき、證人……………	二一七

附 録

その作意に關する作者の言……………	二二五
-------------------	-----

キリスト傳



イエスは馬小屋で生れた。かの宗教畫家の手合ひが、神を貧乏と塵埃との中に置くことを恥ぢても思つたものが、彼等が殊更ダビデの子のために創り出した、明るい、氣持のいい柱廊で生れたのではなく、ほんとうの馬小屋で生れたのだ。それはまた今日、クリスマスの飾り付けに出る、細工やうの小さな像を据ゑ付けた、石膏出來の「聖なる厩」でもないのだ。さつぱりと整つた秣槽の神の魂の入つた驢馬、悔い改めた牡牛、屋根の上に花環をかざす天使などを配して、綺麗に美しく描かれた「聖なる厩」——そんなものは、イエスの生れた馬小屋ではない。

ほんとうの馬小屋といふのは、人間のために働く動物の家である。牢獄である。キリストが生れ

た此の古い貧しい田舎の、貧しい古ぼけた馬小屋といふのは、四方が荒壁でもつて、それに汚い床板を取付け棟梁が架けてあり、石磔の屋根が葺いてあるだけのものに過ぎない。屋内は眞暗で、臭氣、鼻を撲つ。其中で唯一つ綺麗なのは小屋の持主が乾草や秣を積むところの秣槽だけなのだ。澄み直つた朝、勢ひよく伸びて風に靡き、十分に日光を受けて、水々しく匂ひ立つ春の牧場が、刈り取られる。蒼々とした草の細長い葉が、大きな鎌で薙ぎ倒される。草と一緒に、白や、赤や、黄いろや、青や、——美しい盛りの花も刈り込まれる。さうして其等が皆な萎んで、枯れて、一樣に乾草のどす黒い色に變つてしまふ。牡牛はこの五月、六月の死骸を分捕つて、納屋に牽いて行く。其處で草は乾草となり、花はまだ匂ひを保ちながら、これまた秣槽に入れられて、人間の奴隷の糧にあてがはれる。斯くて動物がそれを大きな黒い唇で靜かに嚙み下せば、終ひには、折角の花の野も混つほい糞尿と化し、苗床に利く肥料に變つてしまふ。

これが即ちイエスの生れた本當の馬小屋なのだ。この世界中で最も不潔なる場所が、これまで女から生れた唯一人の純潔な人にとつて、最も上等の部屋であつた。人間と稱する野獸に啖ひ盡さるべき運命の人の子は、動物が靈妙な春の花を反芻する秣槽を最初の搖籃として生れたのであつた。

キリストが馬小屋に生れたのは偶然事でなかつた。要するに此の世界は、人間が汚穢を作つて其

の中に轉がり込んでゐるところの、一棟の大きな馬小屋ではないか。彼等は毎日、最も美しい、最も清らかな、最も神聖なものを、常に糞尿に變へつつあるではないか。而して此の堆高い肥料の上に伸び伸びと香伸びをして、彼等は云ふ、「生活を享樂してゐるのだ」と。此の扮飾も香料も汚穢の臭氣を蔽ふことの出来ない豚小屋に、或る晩、イエスが、天性の無邪氣さしか持ち合はせない、純潔な處女から生れ出たのである。

牡牛と驢馬

初めてイエスを崇拜したものは動物で、人間ではなかつた。イエスは人間の中から無邪氣な者を選んだ。無邪氣な者の中では、特に子供を選んだ。しかも其の子供よりも猶ほ一層、無邪氣でおとなしい、重荷を負ふ獸が、先づ彼を歓迎した。

性質がきはめて温良で、或る場合は自分等よりも弱い、また或る場合は自分等より獐惡な人類に仕へながら、驢馬と牡牛とは猶ほ能く大勢の人間を彼等の前に拜跪せしめて來た。キリストに即いた民、エホバの民、即ちエホバがエジプトへの隸屬から解放した選民が、永遠の生命をもつ者の所

へ行つて話せとて、荒野の真中で彼等の指導者に置き去りにされた時、彼等はアロンを強要して金色の轡を拜んだではないか。ギリシヤでは驢馬が、アレスにも、デオヌシオにも、北方常春の國のアボロにも、神聖なものとされた。バラムの驢馬は預言者よりも賢く、人間の言葉を使つて彼を助けた。ペルシヤ王オクススは、驢馬をプタの寺院に納めて禮拜した。また世俗的にキリストの君主だつたアウグストは、寺院に驢馬の銅像を安置して、彼がアクティウムの夕、「勝利」と名づくる驢馬に邂逅した吉兆を記念する標とした。

その頃までの地上の王並びに一般民衆は、何か物質的の欲求のある場合、必らず牡牛や驢馬の前に拜跪して来たものである。然しながらイエスは、地上を治める爲めに此の世界に來たのでもなければ、また物質的の事物を愛するために來たのでもなかつた。アロンの弱味であり、アウグストの迷信であつたところの、動物崇拜に刺めを止すためであつた。エルサレムの歌は彼を殺すかも知れないが、同時にベツレヘムの歌はその息で彼の體を温めてくれるだらう。晩年イエスが過越の祭に死の都へ上つた際、彼は驢馬に乗つて行つた。けれども彼はバラムより一層、偉大な預言者であつた。何故なら彼はユダヤ人だけを救ひに來たのではなく、全人類を救ひに來たものだからである。さうして彼は決して踵を翻さなかつた。たとへエルサレムの驢馬が總がかりで彼に吼え付いても。

羊 飼 ひ

動物の次ぎに、動物をやしなふ者が來た。たとへ天使が此の大降誕を告げ知らせなかつたにもせよ、彼等は見知らぬ女の生んだ子を見に馬小屋へ行つたであらう。羊飼ひは大抵の場合、人里離れた遠い所に寂しく暮してゐる。彼等は遠隔の地に起つた事や、地上の祝祭に就いては何事も知らない。けれども其の代り、彼等の手近に起つた事なら、たとひどんな小さな事にでも動かされる。

然しながら彼等は、冬の長夜に羊の番をしてゐる所を、光りと天使の言葉によつて振り起されたのであつた。「恐るな、見よ、大なる喜びの音づれを我なんちらに告ぐ。……いと高き處には榮光、神にあれ。地には平和、主の悦びたまふ人にあれ。」馬小屋の薄暗い光りの下に、彼等は一人の美しい若い女が、黙つて子供をじつと見詰めてゐるのを見た。そして眼はまだ開いたばかり、肉附の紅い軟かな、口に物を嚙んだことのない赤ン坊を見た時、彼等の心は和いだ。新人の誕生、宛かも他の魂と惱みを預つべく、人間の形を取つて現れた一つの魂。それはたとへ、それに就いて何ら理解のない無心の者にも、必らず深い憐愍の情を起さずには置かないところの奇蹟である。従つ

て。さうした豫感を懐かされた羊飼ひたちにとつては、この新たに生れた子供が單なる赤ン坊ではなくて、實に彼等の惱める民族が千年間も期待してゐたところの救世主その人であつたのだ。

羊飼ひ等は彼等の持てる僅かなもの、愛を以て捧げられる時は非常に大きなものとなる、其の僅かなものを捧げた。彼等は各々の手内職とか、またはミルク、チーズ、羊毛、小羊とか云つたやうな、飾り氣のない捧げ物を持ち寄つた。親切と友情とが殆んど絶え絶えの今日ですら、山の中などで女が子供を産み落すやうの場合には、羊飼ひの女房や娘たちの女共が取るものも取り敢えず驅けつけて来る。さうして其の一人もが空手では來ない。或る者は巢から取り立ての未だ温かい玉子を三つ四つ携へて來れば、また或る者は絞り立てのミルクを一杯、次ぎなるはチーズを僅かばかり、更に次ぎなるは若い牝鶏を携へ來て、産婦のために雞水をこしらへてやる。それと同様に、新たに生れたものは、既にその惱みを惱み出しているのである。この際、近隣の者がその母を慰めるためであらう、手んでに捧げ物をもつて驅け付けるのは、怪しむに足りない。

自分たちが貧乏でも、昔の羊飼ひ等は貧乏人を輕蔑しなかつた。子供のやうに無邪氣な氣持で子供たちを可愛がつた。彼等は、マデイアンの牧夫に救はれた、ウルの牧者から生まれた種族の流れを汲んでゐる。その最初の主——即ちサウロ、ダビデの二人も——また牧夫であつた。種族を統御

する前は、やはり獸を扱つてゐたのである。然しながら、これらベツレヘムの羊飼ひ等は、「未だ荒い世間を知らなかつた」ので、高慢ではなかつた。今や一人の貧しい人間が彼等の間に生れたのである。而かも彼等は愛情を以て彼を敬ひ、欣んで貧しい寶を彼の許に運んで來たのである。さうして彼等は、貧困最中の貧乏人から生れた、凡人の中のまた凡人から生れた此の男の兒が、謙讓な人間たちや心の善良な人たちの贖ひ者であるべきこと、さうして其の上には既に天使が平和をもたらしめてゐた事を知つたのである。

博士たち

この事あつて以來數日を経て、三人の博士たちがカルデヤからイエスを拜しに來た。大方エクトパタナから來たものであらう。或ひはまたカスピヤ海の沿岸から來たものかも知れぬ。ぎつしり詰め込まれた鞍囊を積んだ駱駝に乗つて、彼等はチグリス、ユフラテの二河を陟り、遊牧民の部落なる大きな沙漠を横切り、死海に添うてやつて來たのだ。それには、彗星に似た一つの新しい星が、彼等をユダヤまで導いで來たのであるが、その星は預言者の誕生もしくは帝王の死を知らせる時に

限つて、屢々空中に現れる星なのである。彼等は王に敬意を表さうとて来たのであつたが、王は居らずして其の代りに、馬小屋の中に蔽されて、檻穽に包まれた乳呑み兒を見出した。凡そこれより千年前のこと、東方の一女王がユダヤの國に、やはり贈り物や黄金、匂ひの高い香料、貴重な寶石などを携へて、巡禮にやつて来たが、彼女はこれらの博士たちと違つて、王座にそれまでエルサレムを治めた諸王の中でも最も偉大な王を見出し、その王から他の誰もが教はるることの出来なかつた知識を學んだ。

博士たちは王などといふものを見出さなかつた。彼等の見出したのは、問ひにも答へにも口の利けない生れたばかりの赤ん坊、小さな男の子、成人の曉には物質的の財寶や、物質的の事物に基いた教養を擯斥するやうになるところの男の兒であつた。

これらの博士たちは王ではなかつたけれども、メデヤ及びベルシヤに於ては、彼等は王の師範であつた。王は人民を治め、博士たちは其の王を指導した。善き神アルマ・マズダと交通し得るものは彼等のみであつた。未來と運命を知るものは彼等のみであつた。彼等は手づから人間や收穫の敵なる蛇、害虫、猛禽等を殺した。人間の魂を淨めると共に耕作の圃をも淨めた。彼等の手からでなければ、神はどんな供へ物をも受けなかつた。どんな王でも彼等と相談なしには戦端を開かなかつ

た。科學と宗教との名に於て、彼等は國家の第一位を占めてゐた。物質的の事に沈湎した民衆の中に在つて、彼等は精神を代表してゐた。その彼等がイエスを拜しに来るやうになつたのは適はしい事であつた。最初は自然を代表する動物、その次ぎが民衆を代表する羊飼ひで、第三番目に此の知力がベツレヘムの秣槽の傍らに跪いたのである。東洋の古い僧侶階級が、他日その福音を西洋に送るべき、新らしい主の前に、歸順の意を表した。博士たちは、愛の新らしい智慧を言葉や數の教養の上に置く彼の前に、跪いたのである。

最後の默示の前に頷づく古い神學を象徴して、ベツレヘムに於ける博士たちは、「罪なき者」の前に跪いた。「富み」が「貧乏」の足許にひれ伏したのだ。

彼等はイエスに黄金を捧げた。その黄金は後に至つて、彼の足の下に踏みにじらるべきものであつた。それは貧乏してゐるマリヤが、旅に必要であらうとて捧けられたものではなく、「汝の持てるものを悉く賣りて貧しき者に施せ」といふ命令を豫感して爲されたのである。乳香を捧げたのは、馬小屋の臭氣を止める爲めではなく、儀式的の濟んだ印としてであつた。祭壇に香爐も香も最早や必要がなくなつたからであつた。没薬を捧げたのは、この男の子が若死にをすることを知つての事であつた。今は笑つてゐるけれども、その母が他日、その死骸を保存するために香料の必要であらうこ

とを感つての事であつた。

法服のまま薬床の上に跪いて、かれら偉大なる博士、預言者たちは、全世界の服従を誓ふ印に彼等自身を捧げたのである。

今やイエスは、彼の正當の任命を悉く諾受した。博士たちが去つて間もなく、イエスを死ぬ日まで憎む者たちの迫害が始まつた。

アウグスト

キリストが地上に現れた時、罪人たちが此の世界を思ふままに支配してゐた。彼は二人の主権者の臣下として生れた。強い方の主権者は遠くローマに居り、弱くて性質の悪い方は手近かのユダヤに居つた。

一人の幸運な冒険者が、大規模の虐殺を試みて帝國を占領する。と、他の一人がそれを邪魔して其の人間のダビデ、ソロモンのやうに王位に即かうとする道を遮断する。かやうに互ひに詭計を用ひ、内亂や裏切りや殘虐や殺戮によつて、高い地位を占めようとする彼等は、生れながらにして互

ひに諒解を持つてゐた。併しそれは事實に於て、單に惡黨の仔分と親分との間にのみ見られる友人關係、共犯者關係に過ぎなかつた。

ヴェレトリの金貸しの息子アウグストは、戦ひには卑怯だし、勝利には執念深し、友達には嘘付きだし、報復には残酷に振舞つた。埋葬だけお願ひすると云ふ死刑囚に向ひ、彼は「どうせ貪慾者の仕事だ」と答へた。虐殺の最中に命を請ふベルギヤ人に向つて、彼は「死をくらはせよ！」と叫んだ。一寸とした疑念から、彼は執政官キント・ガルリオの咽を切らす前に、その眼球をくり抜かうとした。帝國を占領し、敵軍を壊滅、遁竄せしめ、凡ゆる權力を掌握した彼は、表面、温好の假面を冠りながら、青年時代の惡習であつた色慾だけは止めなかつた。彼は青年時代に二度その體を賣つたと傳へられてゐる。即ち一度はカイザルに、次ぎは三十萬セステルシウスでスペインのヒルテオに。而かも今では一見、堅儀に返つた如く見せかけて、その實、殆んど大つびらに友人の妻を犯して、楽しんでゐる身の上なのだ。

この穢はしい病的な人間が、イエスの生れた時に西の世界の主権者であつた。併し彼は彼が建設した凡てのものを滅ぼすやうな、そんな怖ろしい人間が生れ出てゐるやうとは、夢にも知らなかつたのである。彼はただ、肥つた小柄な剽竊者ホラセの安價な哲理、「酒と女とを享樂するなら今日だ。

絶望的の死が我々を待つてゐる。一日と雖も空費さるべきでない。」に満足してゐた。部落の住民で森や、溫和しい家畜や、黄金色の蜜蜂の友達であるヴィルギル、エニヤと共にアヴェルヌへ苦しみ悩む者を見舞ひに行き、その不安な愛鬱感を詩の音楽に瀧いだ彼、その彼の努力も無駄であつた。新しい時代、新しい制度、新しい種族を預言したヴィルギル、イエスの告げた預言に較べれば靈性が少く光輝も少いけれども、當時まさに成らんとしてゐた地獄の王國よりは確かに高尚で純潔な新しい天國を預言した、愛すべき敬虔の念に富んだヴィルギル、その彼の努力も徒勞に歸した。何が故の徒勞かと云へば、アウグストは此等の言葉に單なる牧歌的幻想をしか見ず、而かも墮落者の中でも最も腐敗し切つた彼は、恐らく彼自身が定められた救世主であり、且つまた惡魔の統治を再興すべき人間だと心得てゐたであらうから。

然しながら、ユダヤの彼の臣下、偉大なる東洋の平民は、この惡の王國に取つて代るべき眞の王の來りつつある事、即ちイエスの誕生を豫感してゐた事であつたらう。

ヘロデ王

ヘロデは怪物であつた。東洋の焦け付く沙漠の中から躍り出た多くの怪物の中でも最も背徳的な人物の一人であつた。彼はユダヤ人でもなければギリシヤ人でもなく、またローマ人でもない。彼はイドマヤ人だ。彼自身はローマに屈服しながら、ユダヤ人の上に支配權を確保するために、巧みにギリシヤ人の風を眞似たところの野蠻人だ。叛逆者の息子でゐる彼は、最後の不幸なハスモネヤ人から、その統治下に在つた王國を篡奪してしまつた。さうしてその欺瞞を法律上正當なものとするため、彼等の姪に當るマリヤムネと結婚したが、後ち理由のない疑ひをかけて殺してしまつた。而かもこれが彼の最初の罪惡ではない。彼は義兄弟に當るアリストブルを欺いて瀕死せしめ、他の義兄弟ヨセフ、ヒルカヌ二世（征服された王朝の最後の即位者）の二人を罪に陥し入れた。またマリヤムネを殺しただけでは満足が出来ず、その母アレキサンドラをも同じく亡き者にし、最後にババの子供等を、それが單にハスモネヤ人の遠戚に當るといふ理由から、虐殺したのである。その間彼はサラフ木のユダ及びマルゴロットのマトイを、生き乍ら他のバリサイ人の諸頭目と一緒に火焙りに掛けて樂しみ、後ち更に彼のマリヤムネに生ませた子供たちが、その母の仇を報いに起つてあらう事を恐れて、彼等を絞め殺してしまつた。その爲には彼自身、息を引取る間際にさへ、第三兒アルケロを殺せと命じた程である。放縱で疑ひ深く、神に信仰がなくて、金と名譽にばかり

慾の深い彼は、家に在つてもユダヤに於ても、又は彼自身の心中にも、絶つて平和といふものを知らなかつた。虐殺の記憶を消滅させるために、ローマ人に祭典用として三百ターレントを贈つた。彼はまたアウグストを破廉恥罪の共犯者たらしむべく、彼の前に屈伏して、死ぬとき彼のために一萬ドラクマの銀貨を遣し、猶ほリヴィアのためは金の船一隻と銀の船一隻とを遣した。

この半開のアラビヤ人は、ギリシヤ人及びユダヤ人を懐柔すべく試みた。彼はソクラテスの墮落した子孫に贈賄して、アテネに彼の彫像を建てさせることに成功したが、然しユダヤ人は彼の死ぬ最後まで彼を憎んだ。サマリヤを建設する事も、エルサレムの寺院を修復する事も、彼等の目に映じた處では、毫も彼の利益にはならなかつた。何故なら彼等に取つては、彼が何時までも異教徒であり篡奪者であつたからだ。

老境に入る猥漢ばらの如く、または新參の王子たちの如く戦々競々たる彼は、かさく〜と鳴る木の葉のささやきにも、ちらと射す物影の搖ぎにも顫ひ上つて驚いた。彼はあらゆる東洋人のやうに迷信深く、豫覺や預言者を容易に信じる性質だつたので、三人の博士たちが星に導かれて、カルデヤの内地から、彼の詐つて竊んだ國の方へやつて来たといふことを聞いた時にも、立ち所にそれを信じた。王位に據せられる者があればそれが誰であらうと、またそんな事を想像してみるだけでも

彼は驚くのに、ましてや其の博士たちからユダヤの王の生れたことを知つた時、兇漢の心は大きな恐怖の念に襲はれた。さうして占星家がダビデの新しい甥の現れた箇所を知らせに彼の許へ戻つて来ないのを見て、彼は命を發してベツレヘムのあらゆる男の生兒を殺さすことにした。

罪なき者

どれだけ多くの子供等が、ヘロデが恐怖の犠牲に供されたか、それは誰も知らない。小さな乳呑み兒までが刃に掛けられたことは、ユダヤでこれが最初の事ではなかつた。この同じヘブライ人はむかし敵の都を罰する時、老人、人妻、若者から男の兒まで虐殺したことがある。處女だけは奴隷にしたり妾にしたりするために助けた。神自身、即ち嫉妬深いエホバも亦、屢々殺戮を命じて來てゐる。さうして今度はイドマヤ人が、彼を享け容れた人民に向つて、眼にて眼を償ひ、齒にて齒を償ふモーセの律を適用したのである。

どれだけ多くの罪なき者が殺された分らない。けれどもマルコピオの言ふ所を信するならば、それらの中にヘロデの一人の小さな子供も亦、ベツレヘムの乳呑み兒として加はつてゐたことを知る

ことが出来る。妻殺し、子殺しの老王にとつて、これが因果の報いでないとは誰が知らうぞ。また此の過失の知らせが傳へられた時、彼がそのために苦しまなかつたとは誰が知らうぞ。この事あつて以來程なく彼もまた、忌まはしい病氣に罹つて苦しみながら死ななければならなかつた。虫は彼の器官を啖ひつくした。熱に爛れた彼は斷末魔に、その腐つた息さへ引取ることが出来なかつた。彼は遂ひにその身を持って餘して、テーブルの近所に在つたナイフで自殺を圖つたが、それも果さずただサロメに命じて、多くの若い囚人たちを殺したまま、自分も命を果してしまつた。

罪なき者の虐殺は、この血煙りの立つ血みどろな老人の最後の行爲であつた。この一人の罪なき者の搖籃の周圍に多くの罪なき者を犠牲として屠る事、この一人の新たに生れた子供、罪の許しを得んがために其の血を捧ぐべく運命づけられた子供のために血を燻らす事、この長じて人々の代りに犠牲になつてくれる筈の或る一人のために人間が犠牲になる事、これには預言的の意味がある。彼の死んだ後、單にその復活を信じただけの罪によつて、何千何萬といふ人間が死なねばならなかつた。彼は他人のために死ぬべく生れて來たのである。而かも彼の誕生を贖ふものの如く、見よ、此處に彼のために死ぬべく生れて來る何千といふ人間が居る。

この罪なき者の血祀り、彼と同時代の人間が斯くも多く死んだ事には、恐ろしい神祕が潜んでる

る。彼等は彼を裏切つて十字架に掛くべき時代に生れ合はせたのであるが、當時ヘロデの兵卒に殺された人々は彼を見なかつた、彼等の主の殺されるのを見るほど成人してゐなかつた。彼等はその死を以て彼を救ひ、彼等自身を永久に救つたのである。彼等は罪を知らなかつた、そして永遠に罪を知らずに終つた。その父親たちや生き残つた兄弟たちは後ちに仇を報いたけれども、彼等は「彼等その爲す所を知らざる者」なるが故に許されるであらう。

おー 悔しむる者よ、
来よ せむしき者よ、
罪なき者よ、
エジプトに逃る
田園詩人 聖花詩人 汝ら神々の心よ

或るイタリヤの宗教詩人は、新たに生れたイエスに向つてこんな子守歌をうたつた。

眠れ、幼兒、泣かずに眠れ、

眠れ、天つみ國の幼兒よ。

なが頭の上には、大あらしとても

得て吹き荒むまじ。

然しながら、マリヤの子は眠つて暮らすために成人したのではなかつた。さうして大あらしが吹き荒んだけれども、彼は恐れなかつた。

シッドダルタ以上に「醒めたる者」の名は彼に相當する。驢馬の嘶く馬小屋で、その驢馬は後ち彼に逆つて鼻を鳴らす有らゆる驢馬の先觸れなのだが、また牡牛が他の同類の彼の前に出て話しかけるのを催促顔にモーモーと鳴く、猶ほ羊飼ひ等が彼に物を問ふ、博士たちが彼に祝福を與へる、さういつた馬小屋の中で、何で彼が眠れやう。ヘロデの刺客が忍び足で近寄つて来る時、何で彼が眠れやう。十一人の弟子たちの眠つた體に取圍まれて、オリブの樹の下に苦惱する其の最後の夜まで、彼はどうして眠ることが出来たであらう。

マリヤとても眠ることは出来ない。夜に入つて、ベツレヘムの家々が闇に没し、ランプに灯が付くや否や、この母は亡命者のやうにこつそり家を脱け出す。彼女は國王から一つの生命を攫み取つて来たのである。彼女の希望でもあり、また哀しみでもある其の男の子を胸に押し付ける時、彼女は人々のために一つの希望を救ひつつあつたのだ。

彼女は西の方に向つて行く。カナンの古い土地を横切る。さうして日が短いから近道をしてナイル河の畔に出る。其處は十四世紀前、彼女の祖先に多くの涙を絞らしめたミズライムの國である。

モーセの仕事を遂行すると同時に、モーセの仕事を破壊したイエスは、最初の贖ひ者の通つて来た道を逆に再び戻つて行く。ユダヤ人がエジプトの奴隷の鞭の下に壓迫され、虐待され、酷使されてゐた時、メリダンの羊飼ひが、イスラエルの羊飼ひとなり、沙漠を横切つてヨルダン河と不思議な葡萄園の見える處まで、その頑冥な人間たちを引率して来た。イエスに就く人々は、アブラハムと共にカルデヤを去り、ヨセフと共にエジプトに來た。モーセは彼等をエジプトからカナンに導いた。今はその解放者の中でも最も偉大なる解放者が、生命の危険を冒して、昔し最初の救ひ主が水難から助かり、同時に兄弟等をも救つた其の河岸に立ち戻つた。

初期即ちアフリカ・インド時代のエジプトは、あらゆる醜行、あらゆる壯嚴の豊かな産卵地であつた。其處では歴史の波が碎け亡んだ。ボンベイとアントニイとが帝國の夢、人生の夢を完成する僅か數年前、其處は、水から生れて來て、太陽の熱に灼き焦がされ、幾多の人間の血に染められ、多くの獸神の棲んだ、彬大な國土であつた。この謎のやうな超自然的の國が、一面に於てはかの逃難者のために、豫定された避難所であつたのだ。

エジプトの富みは、泥の中に在つた。ナイル河が年々沙漠の上に押し流す、さうして蛇のよく育つ泥の中に在つた。死はエジプト人を最も惱ますところの悪靈であつた。エジプトの溫和しい有富な人間たちは、死を享け容れずに、それを否定した。彼等は偶像に由り、木乃伊に由り、また肉と血の人體を彫刻で現はす事に由つて、死に打克つことが出来ると信じた。泥から生れて、聖牛や犬頭神を崇拜する、金持ちで、風采の堂々たるエジプト人たちは、死に甘從することが出来なかつたであらう。來世のために、繡帶を施して香料を塗つた木乃伊や、木材や大理石材の偶像の一杯入つた、素敵もなく大きな墓地を作り、その亡骸の上にピラミットを押し建てた。恰かも石とセメントが其等を腐敗から救ふかのやうに。

イエス一度口を開く時、彼はエジプトに不利の判決を下すのであつた。それは雷にナイル河畔のエジプトに向つてだけでなく、その王、その鶴、その蛇と共に、まだ此の地面から消滅しきらないエジプトに向けてであつた。キリストはエジプト人の驚愕をも構はず、決定的のさうして永久の答へを與へるのであつた。彼は、泥から生じて泥に還る富みと、ナイル河の布袋腹をした水上生活者等の崇めら有らゆる物神とを、非難するのであつた。彼はまた彫刻を施した墓石に頼らず、葬られる國を選ばず、花崗岩や玄武岩の彫像を用ひずに、死を征服するのであつた。彼の死に對する勝利

は、罪が虫よりも強慾なもので、腐敗を妨ぐ唯一の香料が精神的の純潔に在るといふ教訓によつて贏ち得られる。

泥や動物の崇拜者たち、富みや「獸」の奴隸等は、己れを救ふことが出来なかつたであらう。彼等の墓は縦しんば山の如く高く、女王の宮殿の如く飾られ、バリサイ人のそれらの如くに眞白で、見る目に美しからうとも、結局それは埃の再び埃に歸る、若しくは動物の死體も同様の、遺骸を護るに過ぎない。死は生命を木石に型取ることによつて打克たるべきものではない。石は崩れて埃に歸り、木は朽ちて埃に歸る。さうして兩つながら泥——永久の泥である。

喪失者、見出さる

然しながらエジプトに於ける流浪期は短かつた。イエスは母の腕に抱かれて、長い旅の間、辛抱強く脚を運ぶ驢馬の背に揺られながら、ナザレの父の家、槌の響きや鐘の音が日の沈むまで聞こゆる、貧しい仕事場を持つた家に、連れ戻られた。

教會で普通用ゐる福音書には、これらの時代の事が何も書かれてないが、舊約聖書の中の舊約聖書の中に

は、信は指きがいけれども色々な事柄が澤山擧げられてゐる。賢明な醫師のルカは、その男の子が健康に成長したと書いて、満足してゐる。それはつまり彼が病身や過勞でなかつた事である。彼は尋常に發育した少年であつた。健康のすぐれた、謂ふならば、一寸その手を觸れただけで、他人の健康を取戻すことの出来る人に適はしい、健康の保持者であつた。

イエスの両親は毎年、エジプトからの遁走を記念する爲にエルサレムの除酵祭に行つたと、ルカが云つてゐる。彼等は近所の人々や友達や知り合ひなどの大勢の道連と團體を組んで出かけた。嚴肅な危機を記念するためといふよりは、寧ろ祭りに出かける人々のやうに賑やかだつた。何故なら過越しの祭りは、エルサレムでは大祭日になつてゐて、其の日は國中に散らばつてゐる總てのユダヤ人が一緒に集つて来る日だからである。

イエスが生れて第十二回目の過越しの祭りに、ナザレの人々が聖き都から歸りかけてゐる時、マリヤはその子の連れの中に居ない事を發見した。彼女は終日、あらゆる知る邊を尋ねながら、探し廻つたけれども無駄たつた。翌朝、母は再びエルサレムに戻つて来て、一度歩いた途をもう一度踏み返し、街や廣場を上から下まで残る隈なく探し廻つた。行交ふ少年には一々その黒い眼を注ぎ、戸の表でに起つ母に尋ねたり、或ひは未だ出發してない村の知合ひに、喪失した子の搜索を頼んだ。

りして。子供を見失つた母は、其子を見出すまで休むものでない。最早や自分の事など考へてはゐない。疲れを骨折りも空腹も忘れてゐる。着物の塵も拂はなければ、また髪なども構つては居られない。その物狂はしけな眼には、最早や傍らに居らぬ其の子の像以外に、何ものも映らないのだ。終ひに三日目に至り、彼女は宮に來て庭の中を探し廻つたが、やうやく柱廊の蔭に老人の一團が話をしてゐるのを見た。彼女はこわごわ近付いた。何故なら此等の長い上衣を纏つた髯の長い老人たちは皆んな立派な人たちで、やぐさでもないガリラヤの女などには到底、注意を振り向けてくれさうにも思はれなかつたからである。而かもその集りの真中に、彼女はイエスの房々した髪の毛、輝きのある眼、陽に焦けた顔と、さうして生き生きした唇とを見付けたのであつた。此處の老人たちは、イエスと律や預言者の事を語り合つてゐたのだ。彼等は彼に質問を呈し、彼はそれに答へるのであつた。今度は彼の番で彼の口から質問が發せられると、彼等は彼が少年の癖によく主の言葉を知つてゐるのに驚き、不審の眼を以て相手を眺めた。けれども彼は曾てナザレの小さな會堂で讀み上げられるのを聞いて、よく其の書物を覺わてゐたのである。さうして彼の記憶は一言一句も遁がしてゐなかつた。

マリヤは己が眼を疑ひながら、數分時間彼を見つめて立停まつた。つひ一瞬間前までは心配で動

棒を打つてゐた其の心が、今度は驚きから動悸を打ち始めた。けれども最早や我慢が出来なくなつたので、彼女は突然大きな聲で彼の名を呼んだ。老人たちは體を移して道を開いた。と其の間に母は子供を胸に捉り上げて、無言のまま固く抱き占めた。今まで堪へに堪へて來た涙が、雨のやうにその頬を傳つて流れた。

彼女を彼をしかと捉へて連れ去つた。さうして今は慥かに彼と共に在り、彼を失つて居らぬことを知つた幸福な母親は、「子よ、何故かかる事を我等になせしぞ。見よ、汝の父と我と愛ひて尋ねたり」と驚き哀しむ母親を想ひ出した。

「何故われを尋ねたるか。我はわが父の事を務むべきを知らぬか。」

殊に十二歳の少年の口から、三日も彼を探し廻つた母に向つて云はれる時、これらの言葉は何といふ重味のある言葉であらう。

さうしてその後四福音書の著者は「両親はその語りたまふ事を悟らず」と續けて書いてゐる。然しながら、その後幾世紀かに亘るキリスト教徒の經驗によつて、我等はこの一寸見には棘々とした高慢ちきの言葉も、猶ほよく十分に理解することが出来る。

何故われを尋ねしか。われ決して失はるべきものにあらず。たとへ我を地下に埋めんとする者あ

るとも、決して我の失はるる氣づかひなき事を知らずや。縦し人その眼にて我を見ずとも、我は常に我を信する者と俱に居るなり。人その心に我を保たば、われ何人よりもまた何人によつても失はれず。たとへ沙漠の中なりと、湖水の上なりと、オリブの園なりと、また墓の中なればとて、我ただ獨り失はるること無かるべし。

「汝の告ぐる此の父とは誰が事ぞ。そは律の定めたる父、人間の父に過ぎざれど、わが眞の父は天に在すなり。そは先祖たちと面を合せて語り、また預言者たちの口に言葉を下したまへる父なり。我はその我に就いて宣へる事、父の永遠までの望み、人々に向つて定められし律、また凡ての人々と結ばれし契約を知る。われ若し父の命に従はんとなせば、眞に父の事を努むべきなり。律の定めし荷且の縁と、不思議なる靈性の永遠に亘る繋がりとを比較するとき、その差果して幾許ぞ。」

木工として

けれども、本當にその家を去るべき時が、未だイエスの爲めには來なかつた。ヨハネの聲が未だ聞かれなかつた。そのために彼はその父母と共にもう一度ナザレの途に引返し、父の職業を助ける

ためにヨセフの仕事場に歸つた。

イエスは學校にも行かず又學者にもギリシヤ人にも就かなかつた。けれど教師には不自由しなかつた。彼には有らゆる學者よりも偉大な三人の教師があつた。仕事と自然と書物とがそれである。

イエスが労働者であつたこと、また労働者の養ひ子であつたことを忘れてはならない。彼は手職で働く貧乏人の間に生れ、福音を宣言するまでは、手の働きによつて毎日のパンを獲てゐたものである。無邪氣な子、無病やみを癒やし、死者を起たしめ、盲目に光りを與へた此等の手、十字架に釘付けにされた此等の手は、労働で汗みどろになつた手、仕事で痺れをきらした手、皮の硬ばつた手、道具を持つた手、木に釘を打込んだ手、即ち労働者の手であつた。

精神労働者になる前に、イエスは手足の労働者であつた。彼は貧乏人をその食卓に、神の國の宴に招ぐまで、彼れ自身が貧乏人であつた。彼は有富な家族の中に、貧澤な家の中の紫地や絹地で蔽はれた床の上に生れたのではない。王の子孫ではあるけれども、木工の仕事場に育つたのである。神の子であるながら、馬小屋に生れたのだ。彼は特權者の階級にも、戰士の貴族社會にも、富豪の仲間にも、祭司の最高評議員にも屬してゐなかつた。世界一般の下層社會の中に生れたので、その階級の一段下には浮浪人、乞食、避難民、奴隸、囚人、賣笑婦などがあるだけなのだ。彼は一旦手内

職を切り上げてからも、餘裕のある人たちの眼から見れば、猶ほずつと低い處まで墮ちて行き、さうして世間から並み以下にさへ數へられる貧乏人の群れの中に友達を求めた。だが然しイエスが、死の地獄に行く前に生きた人間の地獄に墮ちた其の日まで、人間を永久に區別するところの社會の階級組織に於ける彼の地位といふものは、單に貧乏な一労働者のそれであつて、それ以外の何ものでもなかつたのである。

イエスの仕事は、人間の職業の中で最も古い、最も神聖な四つの中の一つであつた。手職の中では、百姓、石屋、鍛冶屋、大工——と、この四つの仕事は、人間の生活には最も必要な、最も純潔な、さうして最も宗教的な職業である。戰士は山賊に、海員は海賊に、商人は山師に、墮落するけれども、百姓、石屋、鍛冶屋、大工などは惑はされない。されたくも出来ない。墮落のしやうがないのだ。彼等は人間に最も親しみのある材料を取扱ふ。さうして彼等の仕事は、其等を總ての人間に有用な、目に見える、堅牢な、形のあるものに創り變へる事にあるのだ。百姓は土塊を壊して、洞窟に棲む聖者も、獄舎に繋かれた殺人犯も、均しなみに食ふところのパンを、それから獲るのである。石屋は石を切つて、貧乏人の家でも、王の家でも、神の家でも、何でも建てる。鍛冶屋は鐵を熱して、兵士の劍や、百姓の犁や、大工の鐵鏈や、何なりをつくる。大工は樹を鋸いて、泥棒除

けの要心に扉を指したり、または盗人も普通の善人も、同じく其の上で息を引取るところの寢臺をこしらへる。

これらの單純な仕事、これらの普通、ありふれた、必要な仕事は、それが餘りに必要すぎ、また餘りに平凡で、ありふれ過ぎてゐるために、人生のもつと複雑した驚嘆に慣れきつた我々の眼からは、ともすれば看過されやすい。けれども實際に於て此等は、人間の最も單純な創造ではあるが、後世の諸發明よりヨリ以上に不思議な、さうして本質的のものであらねばならぬ。

大工のイエスはその青年期をかうした仕事の中に費し、その手を働かせて初めて、神の作つた此等の材料によつて、人間の毎日の生活、最も親密で神聖な生活、謂はば家庭生活といふものを體驗した。彼は、たとへ其の一人が裏切者であるにもせよ、夜分友達とかこむのに快いテーブルを作つた。また人間がその最初の息を引取る寢臺をも、村の女房がボロ布や前掛や、祭りに使ふハンケチや、或ひは祝ひ日に用意の糊の付いた白いシャツなどを納つて置く箆筒をも作つた。彼はまた粉を盛つて其の中にパン種を入れると、それが膨れ上つて焼くばかりになるところの捏ね鉢を作り、老人が返らぬ音がたりを物語るために、宵の火を圍んで座を占めるところの臂かけ椅子をも作つた。鉦の鋼から薄く軽い鉦殼がめくれ上り、鏗屑の地に降り墜ちる度毎に、イエスは父なる神との約

束を、古い時代の預言を、また彼のつくるべきものが、掟や則めを以てするものでなくて、精神と眞理とを以てすべきである事を、思ひ出したに違ひない。

その仕事は彼に次ぎのやうな事を教へた。即ち生きるといふ事は、死んだ無用なものを生きた有益のものに變へること、たとへどんな詰まらない材料でも、それに手を加へて變へると、人間にとつては貴重な、親しみのある、有用の品となる。例へば、子供の手摺りづきの小さな寢臺や、家婦の寢臺やが、瘤だらけの節くれ立つた粗末なオリブの丸太からでも作られるやうなもので、それと同じやうに、強慾な兩替屋や淺間しい賣笑婦をも、天國のまことの市民に變へることが出来るといふ事であつた。

父の本分

太陽は善きも悪しきをも一樣に照らし、麥が實つて黄金色に熟せば、ユダヤ人のパンともなり、また異教徒のパンともなる。星は羊飼ひの小屋にも、また殺人犯の獄舎にも輝き、葡萄の房が成熟して紫色に色づけば、婚禮の祝ひの酒にもなり、また刺客等の狂宴の酒にもなる。空の鳥は自由に

歌ひながら勞せずして食物をあさり、狐が物を盗んで逃げ込めば、野の百合は王よりも立派な姿に咲きさかつてゐる。さうした自然にイエスは、神の永遠に變ることなき道の證しを現實的に證明し得たのである。即ち神は一日の享樂を千年の咎めで罰する主人でもなければ、またエホバの如く、敵を皆殺しにしなければ、措かぬやうな劇しい好戦家でもなく、また更に身分の高い知事たちに辱從されることを好み、その召使ひ等がクーリヤ院、謂はば會堂の厳格な儀式を十分に守るやうに、嚴重に看守しなければ承知せぬ大サルタンの類でもないことを。

神の子たるキリストは、神の父であること、單にアブラハムから生れた人間の父であるばかりでなく、全人類の父であることを知つた。良人の愛は強いけれども、性慾的で嫉妬多か。兄弟の愛はともすれば猜みを以て毒されがちだし、息子の愛は叛逆を以て色づけられ、友達の愛は詐を以て汚され、主人の愛は人に恩を着せて腹の中で威張りくさつてゐる。ただ父の子に對する愛のみが、完全な愛、純潔無慾の愛である。父は他の人にしてやらない事でも息子のためにはしてやる、息子は彼がその肉と骨と頤け與へ、毎日傍に置いて育て上げて來た創造物で、彼自身の存在の完成でもありまた補足でもある。老人は青年の中に生きかへり、過去は未來の中に現はれる。これまで生きて來た人間は、これから生きようとする人間の犠牲になるのだ。父はその息子の中に生きる事によ

つて、自己の向上を感じる。この子供は、父が他の總ての女の中から選んで、その女を抱擁した熱情の瞬間に生れたもの、そしてその父の涙と汗とに看護されながら、この女の神聖な陣痛から生れ出たものである、父はその子の足の立つのを見、冷たい小さな手を自分の手で暖めてやり、初めて口の利くの聞いた。これぞ慥かに新しい永遠の奇蹟であらねばならぬ。彼はまた其の子が初めて家の中をよちよち歩くのを見る。だんだん一つの魂が、値打以上に較べ物のない寶である、一つの新しい人間の魂が、彼によつて創られた肉體の中に輝き出して來るのを見る。だんだん其の顔の上には彼れ自身の顔つきと、彼と一緒に協力してそれを儲けたといふことのはつきり分る女、即ちその子の母の顔つきとが、現はれて來るのを見る。愛情を通して一體にならうと欲する人間の夫婦は、一人の子供の中にのみこの結合を爲し遂げることが出来るのだ。この新しい存在物、即ち彼の創造の前に、彼は情ぶかく、カブよい、幸福な創造者であるといふ自覺をもつ。何故ならその息子は、何事につけても父を顧み、幼少の間はその父だけに信頼して、その傍らに居さへすれば、總てが安全だと思ひ、父はまた彼のために生き、彼のために苦しむ、彼のために働かねばならぬことを知つてゐるからだ。父は息子にとつて地上の神であり、息子は父にとつて神にも等しい。父の愛には、兄弟の申し譯的な義務の跡方もなければ、友達の利欲や敵對心、戀人の強い情慾、

私は先んび行く、永遠の生命にゆつて、
 神へと進んで行く、神の御心、
 神へと進んで行く、神の御心、
 神へと進んで行く、神の御心、
 神へと進んで行く、神の御心、

父の愛は純粹の愛、唯一つの本當の愛、當然、愛と呼べるべき唯一つの愛情である。その本質に反く色々な要素を洗ひ淨めて其後に残つた、他人の幸福のために己れを犠牲にする幸福感である。この父なる神の觀念、キリストが福音の大いなる新らしい觀念の一つであるそれを、神は父にして其の子供らを、王が奴隸を愛するやうでなく父として愛し、總ての子供らに毎日のパンを與へると共に、たとへ罪を犯す者ありといへども、若し彼等に父の胸に頭を寄りかけて來さへすれば、同じく愛を以て彼等を迎へようといふ、この深奥な革新的の觀念を、この古い契約の時代を閉ぢ、新しい契約の紀元を劃すべき觀念を、イエスは自然の中に見出したのだ。神の子として、また父なる神と俱に居る者として、彼はこれまで、最も光輝ある預言者すら氣付かなかつた此の父權を、恒に意識してをつた。然しながら、あらゆる人間の經驗を嘗めた彼は今、その宇宙に反映し啓示されるが如き跡を見て、自然界の最も美しい像を壁へに用ひながら、彼の欣ばしい福音の第一信を人間に傳へるのであつた。

田舎

Retreat place

イエスは總ての偉大なる人間と同じやうに田舎を愛した。潔清をのぞむ罪人、祈りに動かされた聖者、作を欲する詩人、すべて此等の人々は、山の蒼い蔭や水の落ちる邊りや、天を匂はす草原の真中や、日に照り付けられる峻しい沙漠の丘に、逃避所を求め。イエスは田舎人の言葉を以て彼の言葉とした。抽象的で乾燥無味な、概念的の學者の言葉などは、絶対に使はなかつた。彼の話は色ある花と咲き出で、草原や果樹園の匂ひにむせび、ありふれた家畜の像で一杯だ。彼はガリラヤで無花果が大きな蒼黒い葉の下に膨れて熟つてゐるのを見た。葡萄の乾いた卷鬚が青葉を冠つて、その棚からは白や紫の房が、收穫期の歡びを待ちながら垂れてゐるのを見た。彼はまた、芥種が小さな粒から大きな軽い枝に育つて行くのを見た。夜は濠端の荳が風に吹かれて悲しく戦ぐ音を聞いた。地に蒔かれた穀物の種が萌え出で、立派に穂を出しかけてゐるのを見た。彼はまた、天氣が温かになり始める頃になると、赤や黄色や紫の美しい百合が、軟かな青々とした麥圃の中に咲くのも見た。今日のところは威勢よく生え茂つてゐるけれども、明日になれば乾かされて道の中に投げ込

まれる雑草の繁みをも見た。彼はまた、溫和しい動物と有害の動物、例へば其の艶々した頭を稍や誇り顔に、屋根の上で愛を叫んでゐる鳩や、翼をひろげて舞ひ下りながら、餌の上に飛び付かうとしてゐる鷲を見た。彼はまた、神の意に適はなければ、王といへども墜すことの出来ない、空飛ぶ燕や、鴉がその嘴で腐つた肉を啄んでゐる所や、情ある母鶏が夕立の空合に驚いて、雛鳥を羽の下に呼び寄せる所や、狡猾な狐が他の生き物を殺して置いて、自分の暗い窟に引込んで行く所や、主人のテールの下から犬が、パン屑を地面に墜してくれと頼む所やを見た。彼はまた、草原の中を跳き廻る蛇や、墓石の崩れた間に身をかくす眞黒な蝮をも見た。

羊飼ひの中に生れて、人間の羊飼ひとなる筈の彼は、羊の群を知りまたそれを愛した。見もなくなつた小羊を探し廻る牝羊、力なげに啼きながら、毛ぶかい母の體に蔽れるばかりに寄り添うて、乳を舐ぶる小羊、丘の上の草の薄い暑い牧場に、暑さに當てられて苦しんでゐる羊の群などを。彼はまた同じ愛を以て、手の掌の上に載せても見えさうもない小さな種や、貧乏人の家を駈らす古い無花果の樹や、蒔きもせずまた刈りも取らざる空の鳥や、信する者に食べさせようとて手繰り上げた網の目から銀のやうに躍り上る魚を愛した。さうして彼はまた、嵐の襲ひ来る蒸し暑い晩に、其の眼を舉げて稻妻の東から閃き、夜の闇をつんざいて、西にまで渡り行くのを見た。

然しながら、イエスは此の眼の前に開かれた、色んな色澤山の、世界の書物だけを讀んだだけではなかつた。彼は神が天使や長老や預言者たちを通して人間に語つた事を知つてゐた。神の言葉、神の律、神の勝利は、「書物」の中に書かれてある。イエスは死んだ人間が、まだ生れて來ない人間に渡す、不思議な黒い記號によつて、古代の思想や追憶を知つた。イエスはその祖先が神の民や、主の意や、預言者たちの目撃に就いて記した本を讀んだに過ぎない。けれども彼の知識は、その文字を解し精神を掴むことに於て、學者や醫者たちよりも遙かにしつかりしてゐた。さうして其の知識が、彼に學者になることを罷めて、教師になる權利を與へたのである。

古い契約

總ての人民の中で、ユダヤ人は最も幸福で、また最も不幸だつた。その物語りはエデンの園の田園詩に始まり、ゴルゴタの丘の悲劇に終るところの、一篇の神秘劇である。その最初の夫婦は、神の輝く手を以て形作られ、樂園の主人にされたが、其處は河流の眞中に建てられた土地の豊かな常夏の國で、立派な東洋の果物が、新らしい若葉の蔭に重い果をつけて、抱き取られるばかりにぶら

下つてゐる處であつた。創り立ての空は、未だ雲にも翳らされず、まだ稻妻にも裂かれず、或ひは風にも亂されず、有らゆる其の星と共に、最初の兩人の上を看守つた。

最初の夫婦は、彼等の義務として神を愛し、また互ひに愛し合はなければならなかつた。これが第一の契約であつた。疲れも知らず、哀しみも知らず、死とその怖れをも知らなかつたのである。最初の違反は最初の追放をもたらしした。男は勞役を課せられ、女は子を生む苦しみを負はされた。勞役は辛いけれども、それには牧獲の報いがある。出産は苦しいけれども、それには子供の慰めがある。而かも此等の低級な不完全な幸福すら、虫に食ひ盡された葉のやうに滅んでしまつた。初めて兄弟が兄弟を殺した。地上に滴つた人間の血は、腐敗して、罪を蒸發せしめた。人間の娘は悪魔と結び付いて、彼等から怪物や、残忍な獵人や、人間を斬殺する者などが生れ出で、それらがこの世界を血みどろの地獄に化した。

その時、神は第二の刑罰を送り、剝奪の洗禮によつて世界を淨化すべく、神は洪水を起して總ての人間と其罪を流し去つた。ただ一人、正しい人間が救はれて、神は其人と第二の契約を結んだ。ノアと共に、古代の幸福な日が始まつた。それはカルデヤとエジプトの間を、牧地や井戸や平和を探して歩き廻つた、先祖たちや遊牧民や長壽者たちの時代であつた。彼等には一定の國なく、家

もなければ都市もなかつた。彼等は軍隊のやうに大勢、隊商を組んで、多産な女房たちや、愛する子供たちや、懐き易い養女等や、無数の子孫や、従順な僕婢どもや、鋭い角の大聲に唸る牝牛や、乳房を垂れ下げた牝牛や、悪戯すきの犢や牡羊などを伴れて廻つた。それからまた、臭ひの激しい牡山羊や、毛の厚い溫和しい羊や、大きな土色の駱駝や、尻の丸い牝馬や、頭を高くもたけて、もどかしげに足を踏み鳴らす、牝山羊をも伴れた。さうして鞍囊の中には、金や銀の花瓶、石や金屬で作つた家の偶像などを蔽して持ち歩いた。

目的地に着くと、彼等は池の畔りに天幕を張る。さうして家長が一人、櫛の木や無花果の木蔭に居残つて、大野營の事を考へ込んでゐる間に、其處からは早や火の煙りが立ち登つて、女どもや番人たちの忙しさうに騒げづり廻る足音や、獸の鳴く聲、吼える聲、唸る聲などが聞えて来る。家長の心はこの時、總て彼の種から生れた此の子孫、總て人も獸も年々繁殖して行く此等の群がりを見て満足の感に充たされる。

夜になれば彼を眼を擧げて、丘の頂きに白い火の如く輝く宵の明星に挨拶する。さうして時には彼の縮れた白い鬚が、夜の空に彼の一世紀以上も見慣れて來た月の眞白な光りに輝くともある。

時には主の使ひが彼を訪れて來て、その托された使命を與へる前に、彼のテーブルに就いて食事

をした事もあつた。または日盛り、主自身が旅人の姿で現れ、天幕の蔭に老人と對座して、宛かも二人の親友が用談を話しに落ち合つたやうに、顔と顔を突き合はせて語り合つた。種族の長、從僕の主人が、今度は從僕となつて、神なる主人の命令、忠告、約束、預言に耳を傾けた。斯くしてエホバとアブラハムとの間には、他の二つよりも更に嚴重な第三の契約が結ばれた。斯くしかうした一先祖の子で、兄弟のために奴隷に賣られた者が、エジプトで勢力を占め、その種族を手許に呼び寄せる。ユダヤ人はそれによつて祖國を見出し、大いに富強になつたものだと思へる。然しながら、彼等はエジプトの神々に誘惑されてしまふので、エホバは第三の刑罰に取り掛かる。妬み深いエジプト人は彼等を賤しい奴隷に墜とす。刑罰の期間の永びくやうに、エホバはバロの心を剛くなにする。けれども竟ひに第二の救ひ主を擧げて、彼等をその苦しみと、エジプトの泥土とから誘ひ出さす。

彼等の試みはまだ終らぬ。彼等は四十年のあひだ沙漠にさまよふ。晝は雲の柱に、夜は火の柱に導かれて、神は彼等に立派な牧場のある、水の豊富な、葡萄の樹やオリブの生え繁つた土地を約束したのである。が其の間彼等は水も飲めず、パンも食へなかつたので、エジプト時代の贅澤にあこがれる。神は岩から水を迸らせ、天からマナや鶉を降らす。けれども、既に疲れて不安に陥つてゐる

たユダマ人は神を裏切り、金の犢を作つてそれを拜む。すべての預言者の如く哀しみに鎖され、すべての救世主の如く誤られ、すべての新陸發見者の如く厭や厭や人に従いて來られたモーセは、その御しがたい叛逆的の群衆から退いて、神に自分を永久に殺してくれと頼む。然しエホバは兎に角それらの人々と第四の契約を結ばうと云ふ。モーセは烟りに蔽はれた、雷鳴りのする山から、その上に、神の手づから十誡を書き記した、二枚の石をもつて降りて行く。

モーセは古い樂園の代りに再び征服さるべき新しい樂園の約束された土地を見ずに終る。然しながら神の契約が履行されて、ヨシア甫め其の他の英雄はヨルダン河を渡り、カナンの土地に入つて人々を征服する。都市は喇叭の響きに陥ち、デボラは勝利の歌をうたふ事が出來たのである。人は牡牛に車を曳かせて其の上に戦神を安置し、それを天幕の蔭に蔽して運んで行く。ユダヤ人は羊飼ひや匪徒となつて、此處彼處をさまよひ歩く。律の契約を守る時は勝ち、それらを忘れる時は戦ひ利あらずして。

蓬髮の巨漢が單身、何千といふペリシテ人やアマレキ人を殺す。けれども一婦人の裏切りに遭つて、彼は敵に眼を潰され、磨臼同様、身動きのならぬ身體にされてしまふ。英雄だけではまだ足りなくて、王が必要とされる。ベンジャミン族の一青年で背の高い屈強な男が、父の驢馬の逃げたの

を探しに出て預言者に逢ふと、預言者は彼に油を塗つて總ての人々の王となす。サウルは強い戦士となり、アンモニ人やアマレキ人を平らけ、一軍國を建設して、隣接種族の脅威の的になる。然しながら、一旦彼を王にした其の預言者が、今度は彼に叛いて一競争者を起たしめる。少年羊飼ひのダビデは、王の強敵を屠り、立琴を以て王の激怒を和らけ、王の長子に可愛がられ、王の娘と結婚し、王の帷幄の中に居る。けれども猜疑に心の亂れたサウルは、彼を殺さうと謀る。ダビデは群山の洞窟に蔽れて山賊の魁になる。彼はベリシテ人の味方となり、その戦ひの勝利に歸する時、ギルボアの丘にサウルを刺し、代つて全イスラエル人の王となる。詩人としてまた王としては偉いけれども、同時に残忍道慾な此の大膽極まる羊飼ひは、エルサレムにその居を定め、護衛兵即ちギツボリムの扶けを藉りて、周冊の國々を征服する。此處に於てかユダヤ人は初めて怖ろしい者と見做される。何故なら、以來數百年の間ユダヤ人は、彼等を屈辱的の降服から救ひ出すために、ダビデの再臨を期待し、ダビデの子孫の現はれることを、待ち望まなければならなかつたからである。

ダビデは劍と歌との王であり、ソロモンは黄金と智慧との王である。黄金は貢物として彼に贈られる。彼はそれを以てエルサレム第一の豪華な邸を飾る。黄金を探しに舟を遠くオフルに遣せば、シバの女王が彼の足許に黄金の囊を横へる。けれど凡て黄金の輝きも、ソロモンの智慧も、王を不

倫から、王國を滅びから、救ふには足りない。彼は怪しげなる女を娶り、奇怪な神を崇める。主は彼の青年時代の功績に愛でて、老年時代の罪を許し給ふ。然し彼の死するに及んで、國は分離し、暗黒、羞恥の頽廢時代が始まる。宮廷の權謀、國王の虐殺、酋長の叛逆、悲惨な内亂など、偶像崇拜の時代には、色々な革新が相繼いで行はれ、やがてはそれが分離の時代となる。預言者が現はれて戒告すれども、國王は聞き容れないばかりか、果ては彼等を放逐してしまふ。イスラエルの敵國は次第に強くなる。フェニキヤ人、エジプト人、アッシリヤ人、バビロン人等が、相次いでこの二つの王國に攻め入り、貢物を徵發し、遂ひにイエスの生れる約六百年前、エルサレムは破壊され、エホバの寺院は粉碎され、さうしてユダヤ人は奴隸としてバビロンの河畔に逐はれる。彼等の不信と彼等の罪とが盃から溢れて、彼等をエジプト人への隸屬から解放したその同じ神が、彼等を奴隸としてバビロンヤ人に渡す。これ即ち、第四回目の刑罰で、すべての中で最も怖ろしい刑罰である。何故なら、それには終局がないからだ。それ以來ユダヤ人は、今に至るまでずつと、他國人の間に分散し、外人に仕へなければならなくなつて來てゐる。彼等の中の或る者は歸つて、エルサレムとその殿堂とを再建しようとしたけれども、國家は己にスクテヤ人に侵入され、ペルシヤ人に従へられ、ローマ人に征服されて、最後はマカビヤ人に襲撃され、終ひにはローマ人に隸屬するアラブ蠻

族朝の手に渡されてしまつた。

多年、沙漠に豊かで自由な生活を送り、曾ては國家の主人となり、また神の保護の下に、自らを地上第一の國民と信じた此の民族も、今は數に於ては滅退し、外國人には嘲られたり、酷き使はれたりして、國際間の笑ひ者、國民間のヨブとされた。イエスの死後も、その運命は猶ほ前より更に險惡であらねばならなかつた。エルサレムは二度目の破壊に遭ひ、その破壊された區域は、單にギリシヤ人とローマ人とが占領してゐるだけで、イスラエルの最後の碎片までが、沙漠の風に吹きまぐられた路頭の埃のやうに、地球の上に飛び散つた。

これ程までに神に愛され、而かもこれほど怖ろしい神の懲罰を受けた國民は、他にあるまい。第一の民たるべく選ばれて、而かも彼等は劣等人に仕へる身となつた。彼等自身、戰勝國を獲ようと熱望しながら、反つて彼等は外の人間の土地に亡命して、奴隸たるの身となつたのである。

戦ひを好むといふよりは、寧ろ牧人の生活に近い方であつたけれども、彼等は彼等自身ともまた他人とも決して平和ではなく、隣人と戦ひ、客とも指導者とも戦つた。また預言者とも戦ひ、神それ自身とも戦つた。

墮落の産卵地が、殺人、欺瞞、姦淫、破倫、竊盜、贖職、拜像等の罪ある人間に治められ乍ら、

而かも彼等の女達が、東洋の最も完全な聖者、即ち正しい、警世家の、孤獨な預言者たちを生み、最後にこの種族から、新しい聖者の父、凡ての預言者の待ち侘びてゐた其人が、生れたのである。

この人民は形而上學も、科學も、音樂も、彫刻も、美術も、乃至は彼等自身の建築も、何一つ創造してをらぬにも繋はらず、「詩篇」や預言書の中に壯嚴を以て輝く、ヨセフとルツの話のやうな儂ひなく優しい、また「雅歌」の中に熱情を以て燃え立つ古代の、雄大な詩を書いた。

田舎の方神を祀る中に育ちながら、彼等はただ一人の世界的の父なる神の愛を意識してゐた。黄金と土地とに富みながら、彼等は貧乏人の最初の擁護者であつたところの預言者たちを輩出したことを誇りとし、また富を否定する事に考へ付けてゐた。人類の犠牲者の頭を祭壇の上で断ち切り、全市に亘つて無辜の人民を鑿殺したその同じ人間が、我等の敵を愛せよと教へた彼に向つて弟子達を贈つた。またこの人民は、彼等の猜み深い神を嫉み、いつも彼を裏切つて、他の神々に走り去つた。三度建てられて三度も毀されたその殿堂に至つては、一片の壁以外に何物も残つてをらず、辛うじて一列の服喪者がそれに頭をもたれて、涙を蔽ふことの出来る位しか残つてゐない。

然しながら、この超人と兇漢と、凡ての者の初めと終りと、凡ての者の最幸福と不幸との混亂、矛盾した人民は、他の國民に仕へながらも、その金とその「聖書」を以て、未だに他の國民を支配

してゐる。幾世紀の久しきに亘つて、自國をもたずに来たけれども、彼等は猶ほ凡ての國々の所有者の中に數へられて居る。その最も偉大なる子を十字架にかけて、血を流さしめたけれども、彼等はそれによつて世界の歴史を二つの部分に別けた。さうしてこれら殺神犯の子孫は、あらゆる人民の中で最も賤しい、けれども最も聖い者になつたのである。

預言者たち

どんな人民でもユダヤ人ほど屢々警告を與へられたものは何處にもあるまい。假王國の初めからその崩壊に至るまで、戦ひに勝つた國王たちの盛んな時代に於ても、亡命の悲しい日に於ても、奴隸の厄日に於ても、また分散の悲劇的な場合に於ても。

インドには、荒野に身を蔽して、肉慾に打克ち、靈を永遠に沈湎さす、苦行者が居る。支那には勞働者や天子にまで儒教を説いた、親しみ深い聖人、溫和な賢子が居た。ギリシヤには、暗い柱廊の中で、系統の調節や論理の辯證を案出した、哲人が居た。ローマには、その國民と時代とのために、支配權及び所有權をもつ者の到達すべき最高の正義を條文に作り、それを銅版の上に録した、

法律家が居た。中世紀には、騒りかけて來たキリスト教を叩き起して、感激と地獄の怖ろしさを想ひ起すために、身を磨り耗らして盡力した、説教者が居た。ユダヤ人には、預言者があつた。その預言者たちは、洞窟の中で、三脚台から唾と言葉とを一緒に吐き出すやうな、預言の仕方はしなかつた。彼等は未來に就いて語つた。けれども單に未來の事だけに盡きてはるなかつた。彼等は未發の事物に就いて預言した。けれど過去の事も思念せしめた。彼等は三相の時をもつてゐた。過去を判じ、現在を照らし、さうして未來を警しめることに於て。

ユダヤの預言者は物言ふ聲か、然もなくば物書く手だ。王の宮殿、若しくは山の洞窟で、寺院の階段で、また會堂の廣場で、物言ふ聲なのだ。彼はまた祈りの聲でもある。祈りは警しめを含み、警しめは神の希望として叫ばれる。彼は心で悩み、口は辛澗を極め、腕を差し上げて、來るべき刑罰を指す。彼は人々のために悩み苦しむ。人々を愛するが故に、彼等を罵る。彼等の潔められんことを希ふが故に、罰しもある。さうして虐殺と火焰の後に、彼は甦生と生命、勝利と祝福、新しいダビデの統治と破毀される事のない契約を教へる。

預言者は偶像崇拜者を眞の神に還らしめ、僞誓者に誓ひを反省させ、虐けられた者には慈愛を、墮落した者には純潔を、残忍な者には憐れみを、國王には正義を、叛逆者には服従を、罪人には刑

罰を、高慢な者には謙遜を想ひ出させる。彼は王の前に進み出て叱咤し、人間の屑の中に降下して譴責し、祭司に逢うては面罵し、富める者の前に出て、彼等を狼狽さす。彼はまた、貧しき者には慰めを、惱める者には憤ひを、病める者には健康を、縛られた人民には解放を、虐けられた國には王者の將來を告げる。

彼は國王でもなければ王子でもなく、また祭司でもなければ學者でもない。唯一箇の人間、位もなければ従者も持たぬ貧しい空拳の人間に過ぎないのだ。彼は親しい聲、哀しみに満された憐れな聲であるが、又、高く怒號して恥を墜しめる勇敢な聲、悔い改めを求めて永遠を誓ふ聲でもある。預言者は哲學者ではない。世界が水と火とから成立つて居やうが居まいが、その水と火とが人間の魂を潔めることが出来なくても、彼に取つては何等關はる所がないのだ。

彼は詩人である。然しながら別に取立ててさうした意志や意識を持つて居る者ではない。ただその怒りの絶頂に達する時、その幻しの光彩を發する時、如何なる文章家といへども未だ會て作つた事のない力強い意象を創り出すのだ。彼は祭司ではない。何故ならこれまで唯の一度だつて會堂に於て強慾な長老から油を塗られた例がないからである。彼は國王でもない。何故なら武裝した人間を指揮しないからだ。然し彼は劍の代りに天から來るところの言葉を使ふ。彼は兵士でない。けれ

ども神と人々との爲めには何時も死ぬ用意が出来てゐる。

預言者は神の名に於て物云ふ聲だ。神の口授を筆記する手だ。契約を忘れて、正道を踏み迷ふ者を警しめるために、神から送られた使ひだ。彼は神の秘書であり、通譯であり、また代表である。さうして此の故に、神に従はぬ國王に優り、神を理解せぬ祭司に優り、神を見棄てて、木と石の偶像に走つた人々に優るところのものだ。

預言者は惱ましい心を以て物を見る。けれども其の眼は恒に燦々として、能く今日、世を支配する惡、明日、來らんとする罰、また刑罰と悔い改めとに續いて來るべき天國を見通す。

彼は物云へぬ者のために語り、書く手を持たぬ者のために代筆する。彼はまた追ひ散らされ抑壓された者を庇ひ、貧乏人を保護し、權力者の踵の下に泣き叫ぶ見込めな者のために復讐する。彼は暴壓者に味方しないで、その代り踏みにじられた者の側に起つ。飽滿、強慾な者を探さないで、その代り餓え惱む者を探し出して扶ける。

力ある者には憎まれ、群衆には見離され、時には弟子達にさへ誤られる、季節外れの切願の聲。遠くから腐肉の臭ひを嗅ぎあてる鬘狗のやうに、始終同じ啼き聲ばかり繰返してゐる渡り鴉のやうに、山の頂に吼ゆる狼のやうに、預言者は疑ひと呪ひとに附き纏はれながら、イスラエルの街通り

を往來する。彼を祝福する者は、貧乏人と虐けられた者だけだ。然し貧乏人は氣力が無いし、虐けられた者は黙つて聞くだけの事だ。すべて眞理を告ぐる者が大聲で、眠れる大多數者を驚かすと同じく、また貪慾な事物の平和を掻き亂すと同じく、預言者は癩病患みのやうに除け者にされ、敵國人のやうに迫害された。國王は辛うじて彼を許るすとしても、祭司が彼を敵視し、富者が彼を嫌ふのであつた。

エリヤは預言者殺しのイゼベルの怒りに觸れて逃亡を餘儀なくされた。アモスはベテルの祭司アマジヤによつてイスラエルの國外に追放された。イザヤはマネセの命によつて殺され、ウリヤはエホヤキム王のために刎られ、ザカリヤは會堂と祭壇との間で石を投げられ、ヨナは海に投げ込まれた。ヨハネの頭には劍が擬せられ、後にイエスの懸かる十字架さへも支度された。預言者は告訴人である、けれども人々は、自分等の罪のある事を承認しようとしなない。彼は調訂者である、けれども眼くらは、眼あきに導かれる事を欲しない。彼は布告人である、けれども聾者は彼の約束を聽かない。彼は救助者である、けれども宿痾に腐爛した人間は、反つて患ひの中に在る事を喜んで、淨められる事を拒む。然しながら預言者たちの言葉は、彼等を根絶しにしたけれども、また彼等を蘇生せしめる事の出來た此の民族のために、永遠の確證となるであらう。さうして總ての預言者に

優る一預言者の死は、地上の塵埃の中に齷齪く總ての他の人々の罪を贖ふに餘りあるであらう。

來らんとする者

ナザレの家に在つて、イエスは律の誠命を冥想し、預言者たちの激しい哀しみの中に、彼の運命を認める。その約束は宛かも頑張つて閉ざされた扉を叩く音のやうに切破つまつたものだ。繰返し繰返し述べられてあつて、一度も否定された例なく、何時も確證が與へられてゐる。反駁を要しない綿密な證據を擧げて、精確に物語りが預言されてゐる。イエスは三十歳の甫めに「人の子」として其の體を人々に委せるが、その時彼は己にそれから先き彼の身に起つて來る事を、最後の一事まで詳しく知つてゐる。彼の來らんとする生涯は、己に彼の地上に生れ出づる前から、日毎にページに書き記されてあるのだ。

彼は神がモーセに新しい預言者を約束した事を知つてゐる。「我かれら兄弟の中より汝の如き一箇の預言者を彼等のために興し、わが言葉をその口に授けん。わが彼に命ずる言葉を、彼れ悉く彼等に告ぐべし。」神はその民と新しい契約を結ぶであらう。「この契約は我が彼等の先祖と立てし所

の如きに非ず……我わが律法を彼等の衷におき、その心の上に録さん……我かれらの不義を赦し、その罪をまた思はざるべし。契約は心の上に録され、石の上には録されなかつた。赦しの契約で、刑罰のそれではなかつたのだ。

メシヤは彼を告げ知らすために先驅者を送るであらう。「視よ、我わが使者を遣はさん。彼わが面の前に道を備へん。」

「一人の嬰兒われらの爲めに生れたり。我等は一人の子を與へられたり。政事はその肩にあり。その名は奇妙、また識士、また大能の神、永遠の父、平和の君と稱へられん。」けれど人々は彼を認めず、また彼に耳を假さぬだらう。「汝この民の心を鈍くし、その耳を懶くし、その眼を蔽へ。恐らくは彼等、その眼にて見、その耳にて聞き、その心にて悟り、翻へりて醫さるる事あらん。」

「然れど、イスラエルの兩つの家には、頑く石となり、妨ぐる磐とならん。エルサレムの民には、網罟となり、機檻とならん。」

彼は驕り街ふ事をしないだらう、また勝ち誇る如き態度では來ないだらう。「シオンの女よ、大いに喜べ。エルサレムの女よ、呼はれ。視よ、汝の王なんぢらに來る。彼は正しくして救ひを賜り、柔和にして驢馬に乗る。即ち牝驢馬の子なる駒に乗るなり。」

彼は正義をもたらし、不幸な者を救ひ出すだらう。「……こはエホバ我に膏をそそぎて、貧しき者に福音をのべ傳ふることを委ね、我を遣はして心の傷める者をいやし、囚はれ人に赦しを告げ、縛められたる者に解き放ちを告げ……またすべて哀しむ者を慰め。」へりくだる者はエホバによりてその歡びを増し、人の中の貧しき者はイスラエルの聖者によりて樂しみを得べし。荒ぶる者は絶え、侮る者は失せ、邪曲の機を窺ふ者は悉く斷ち滅ぼさるべければなり。」

「そのとき瞽者の眼は開き、聾者の耳はあくことを得べし。そのとき跛者は鹿の如くに跳び走り、啞者の舌は歌うたはん。」

「われエホバ、公義を以て汝を召したり……而して瞽者の眼を開き、囚はれ人を獄より出し、暗きに住める者を檻の中より出さしめん。」

然しながら彼は、彼の救ひ出さうとするその人間に、譏られたり苦しめられたりするだらう。「彼には我等が見るべき美はしき容なく、美しき貌なく、我等が慕ふべき艶色なし。彼は侮られて人に棄てられ、悲しみの人にして患みを知れり。また面を蔽ひて避くることをせらるる者の如く侮られたり。我等も彼を尊まざりき。」

「まことに彼は我等の患むを負ひ、我等の悲しみを擔へり。然るに我等思へらく、彼は責められ、

神に打たれ、苦しめらるるなりと。

「彼は我等の愆のために傷けられ、我等の不義のために碎かれ、みづから懲罰をうけて我等に平安を與ふ。その打たれし痕によりて我等は癒やされたり。我等は皆な羊の如く迷ひて、おのおの己が道に向ひ行けり。然るにエホバは我等すべての者の不義を彼の上に置きたまへり。」

「彼は苦しめらるれども、自からへりくだりて口を開かず、屠り場に曳かるる子羊の如く、毛を剪る者の前に黙す羊の如くして、その口を開かざりき……彼は活ける者の地より絶たれしなり。わが民の愆のために打たれしなり。」

「然れどエホバは、彼を碎くことを悦びて、これを惱ましたまへり。かくて彼の魂、咎の献へものをなすに至らば、彼その末を見るを得、その日は永からん。且つエホバの悦びたまふことは、彼の手によりて榮ゆべし。彼は己が魂の煩勞を見て、心たらはん。わが正しき僕は、その知識によりて多くの人を義とし、また彼等の不義をおはん。この故にわれ彼をして、大いなる者と共に物を分ち取らしめん。彼は強き者と共に掠物を分ち取るべし。彼はおのが魂を傾けて死に到らしめ、愆ある者と共に數へられたればなり。彼は多くの人の罪を負ひ、愆ある者のために取做しをなせり。」

彼は最も卑劣な侮辱をも辭さぬであらう。「我を撻つ者にわが脊を委せ、わが鬚を抜く者にわが頬を委せ、恥と唾とを避くるために面を蔽ふことをせざりき。」

を委せ、恥と唾とを避くるために面を蔽ふことをせざりき。」

總てのものが、最も大切な場合に、彼に背くだらう。「彼等は偽りの舌をもて我に語り、憾みの言葉をもて我をかこみ、故なく我を責めて鬪ふ。われ愛するに、彼等かへりて吾が敵となる。」

子は父に向つて叫ぶ。

「汝はわが受くる謗りと恥ちと侮りとを知りたまへり。わが敵は皆な汝のみ前にあり。」

「謗り吾心を碎きぬれば、我いたく煩へり。われ憐れみを與ふる者を俟ちたれど、一人だになく、慰むる者を俟ちたれど、一人をも見ざりき。」

「彼等は苦き草をわが食ひ物に與へ、わが渴ける時に醋を飲ませたり。」

彼等は釘を以て彼を刺し貫き、各々その衣類を頽つ。

「そは犬われを繞り、悪しき者の群われを圍みて、わが手及びわが足を刺し貫けり。」

「彼等眼を留めて我を看る。互ひにわが衣を頽ち、わが下着を籤にす。」

彼等はその爲せる事を悟り、悔い改めるであらうけれども、時すでに遅い。

「……彼等はその刺したりし我を仰ぎみ、獨り子のために哭くが如く、これがために哭き、初子のために悲しむが如く、これがために悲しまん。」

「諸々の王はその前にひれ伏し、諸々の國は彼に仕へん。」

「彼は乏しき者をその叫ぶ時に救ひ、助なくして苦しむ者を扶け、弱き者と乏しき者とを憐れみ、乏しき者の魂を救ひたまふ。」

「汝を苦しめたる者の子等は屈みて汝に來り、汝を蔑めたる者は悉く汝の足下にひれ伏さん。」

「視よ、暗きは地を蔽ひ、闇は諸々の民を蔽はん。されど汝の上にはエホバ照り出でたまひて、その榮光なんぢの上に顯はるべし。」

「諸々の國は汝の光に行き、諸々の王は照り出づる汝が輝きに行かん。」

「汝の眼を擧げて見廻はせ。彼等はみな集ひて汝に來り、汝の子等は遠きより來り、汝の女等は抱かれて來らん。」

「視よ、われ彼を立てて諸々の民の證とし、また諸々の民の君となし、命令する者となせり。視よ、汝は知らざる國民を招かん。汝を知らざる國民は汝のもとに走り來らん。こは汝の神エホバの救ひによりてなり。」

此等及び其の他の言葉は、イエスが門出の前に參籠した折、己に彼の言つてゐたところである。彼はそれを總て見通してゐたが、それから嘔吐しようとはしなかつた。此の時以來、彼は己にその

運命を、心の亡恩を、友人等の聞かぬ振を、權力者の憎みを、折檻を、略奪を、侮辱を、嘲罵を、讒謔を、手足の針付けを、苦惱を、さうしてまた死までを知つてゐた。心には邪思、邪念を一杯に懷き、屈辱によつて、それを一層激しくされた、淫蕩的な物質主義者のユダヤ人が、一人の貧しい温和な、輕蔑されたメシヤを期待してゐる道理のないことを、彼はよく知つてゐたのである。或るはつきりした預言者的幻覺を持つた少數者以外、彼等の總ては、現世的の救ひ主、武装した王、第二のダビデ、眞の血即ち敵の紅い血を流して、これまでのソロモンの王宮や會堂より、更に立派なものを再建するであらうところの戦士を、夢みてゐるのだ。諸國の王は彼に貢物をもたらすだらう。然しそれは愛と尊敬の貢物でなく、澤山の金銀の貨幣でなければならぬ。この地上の王は、イスラエル人を苦しめ、イスラエルの民を奴隷としてゐる、イスラエルの敵に向つて、復讐してくれらだらう。そのとき奴隷は主人となり、主人は奴隷となる、さうして世界中の國々は、エルサレムを首府とし、冠を戴いた王たちが、新らしいイスラエル王の玉座の前に跪くであらう。イスラエルの田野は總ての他の國のそれよりも豊饒になり、牧場も一層美事に、家畜の群は無限に繁殖し、小麦大麥は年に二回の收穫を行ひ、小麦の穂は舊年よりも重く垂れ、一房の葡萄をもぐのに、二人がかりの力を要する程になるであらう。葡萄酒の釀造期にはそれを容れる革囊の缺乏するまで、また

油の場合にはそれを受ける瓶のなくなるまで豊富にとれ、蜜は樹木の洞にも路傍の籬にも見付かるであらう。樹の枝は果實の重みに折れんばかりに、また果實はこれまでよりも一層軟かく、且つ甘味を増すであらうと。

これが即ちイエスを取巻いたユダヤ人の期待したメシヤである。けれどイエスは、彼等にその求める所のものを與へることが出来ず、彼自身凱旋の戦士にもなれなければ、また諸王を征服して以て其の間にそそり起つ高慢な暴君にもなれぬことを知つてゐる。彼の國は地上のそれだけでなく、彼の與へ得るものは、單に僅かばかりのパンと、彼の總ての血と總ての愛と、ただそれだけにしか過ぎない事も知つてゐる。彼等は彼を信ぜず、彼を苦しめ、偽善者として彼を殺すであらう。彼は其等の事さへも總て承知してゐる。宛かもそれを自分で眼の當りに見て來、また自分の肉體と精神とによつて耐へ忍んで來たかのやうに、詳しく知つてゐる。然しながら彼はまた、地上の藪や茨の間に投げ棄てられ、暗刺者の臚に踏みじられた彼の言葉が、またの春に會つて生命の芽を吹くこともも知つてゐる。最初は風に吹き倒されても、それはやがて段々生長して、遂にはその枝を空にまで伸ばし、それを以て地を蔽ふところの大樹となるであらう。さうあつてこそ、凡ての人々がその樹を取巻いて座ることが出来るのだ、それを植ゑたイエスの死を懐ひ出しながら。

火の預言者

イエスがナザレの貧しい小さな仕事場に在つて、斧や差金を扱つてゐる間に、ヨルダン河と死海の方に當る荒野に於て、一つの聲が揚げられた。最後の預言者である洗禮者のヨハネが現れて、ユダヤ人に悔い改めを勧め、天國の近づいた事を告げ、メシヤの將來を預言し、彼の許に來る罪人を諭し、河の水の中に彼等を投じた。それは此の外面的の洗條を以て、内面的淨化の始りにしようが爲めであつた。

ヘロデ家の暗黒時代に於ける古代のユダヤは、イドマヤの篡奪者に犯され、ギリシヤ人の侵入に巧まれ、ローマの軍兵に卑しめられ、國王もなく、結合もなく、榮譽もなく、その民の大半は世界中に分散し、彼等自身の祭司たちには裏切られ、恒に千年も前の彼等が地上の王國の豪華を憶ひ出し乍ら、恒に頑冥に大きな復讐を、奇蹟的の復活を、神の勝利に終るべき戦勝の克復を、救世主、解放者、膏を塗られた者の到來を望んでゐた。而かもその救ひ主は、ソロモンのそれよりも更に強く、更に美しくいとところの新しいエルサレムを治め、エルサレムから有らゆる民を統べ、他の總て

の帝王を平らけ、總ての帝國を征服して、その國家と總ての人間とに幸福をもたらす人であらねばならなかつた。——斯くの如くその主人を憎み、税吏には公金を竊まれ、御用學者とバリサイ人とに惱まされた古代のユダヤ人、崩壞、屈從、掠奪に遭つて有らゆる恥辱を受け乍ら、猶且つ未來に十分の信念を繼いだ古代のユダヤ人は、欣んで荒野の聲に耳を假し、ヨルダン河の岸へと急いだ。ヨハネの人物は想像を征服するそれであつた。子としては大時代の兩親から奇蹟的に飛び出した彼は、「ナジル」——即ち淨き者たらしめんが爲め、生れ乍らにして別に置かれた。彼は未だ嘗て髪を刈つたこともなければ、葡萄酒やサイダーを味はつたこともない。未だ嘗て女に觸れたこともなければ、神に對する愛以外に、何の愛をも知らなかつた。己に青年の頃から兩親の家を離れて、彼は荒野の中に身を蔽した。其處に多年、唯一人、家もなく、天幕もなく、從者もなく、ただ脊中に運んで來た、自分の手廻りの品物だけで、暮らしてゐた。駱駝の毛皮に身をつつみ、腰には革帶を締め、脊が高く、骨張つて、日に焼け、毛むくじやらの胸をして、頭髮は長く肩にかかり、長い髭は殆んど顔を埋め、鋭い眼は忙がしい眉の下から電の如く閃めく。そのとき髭に蔽れた彼の口から、怖ろしい呪ひの言葉が爆發するのであつた。

瑜伽論者のやうに孤獨を慕ひ、禁慾者のやうに快樂を嫌ふ、この催眠状態にある野人こそ、彼れ

が洗禮を施した人々には、失意の人民にとつての最後の希望だと思はれた。

イエスは人々が此等の「洗ひ淨められた人々」の事を話すのを聞いた。彼等はヨルダン河から歸つて宛かも前晚、救はれたるために脱ぎ棄てた着物を、翌朝、再び身に纏ふのと同じやうに、それぞれ前の生活に従事した。これを見てイエスは、彼の日の愈々近づいて來たことを覺つた。彼は今や三十歳になつてゐた。それは彼の爲めに正しく豫定された年齢である。三十歳前の人間は、總て普通の感情、普通の愛に支配される一箇の寫生、一箇の要約に過ぎない。彼は人間といふものを能く知つてゐない。従つて人間が當然愛されねばならぬ、憐れみに富んだ愛情を以て、彼等を愛すことが出來ない。また人間が知らず、人間の愛し方を知らなければ、彼は權威を以て語ることが出來ず、彼自身を人に聞かすことが出來ず、また人間を救ふ力をも持たぬ。

最初の宣言

荒理の陽はヨハネの體を灼き、天國に對する彼の熱烈な欲望は魂の中で焔のやうに燃えてゐた。彼は火の預言者であつた。近く現はれんとするメシヤに、彼は焔の使ひ手を見た。新らしい王は嚴

しい農夫であらう。すべて善い果實を生まぬ樹木は、悉く切り倒されて火中に投ぜられる。彼は十分に床を洗ひ淨めて、然る後、穀倉に小麦を斂めるだらう、けれども穀は、消えざる火を以て灼き盡すだらう。其の人は火を以て洗禮を施す洗禮者であらう。

嚴格で、濫つ面で、粗野で、毛むくじやらで、毒づきやで、短氣で、粗々つかしいヨハネは、彼の許に来る人々にも温和しくなかつた。彼は其等の人々を悔い改めの第一歩に導いたことだけで、満足はしなかつた。パリサイ人やサドカイ人で聖書に通じ、會堂の權威として群衆から敬意を拂はれてゐる知名の人々が、洗禮を受けるに來た時、彼は其等の人々を他の人たちよりも一層猛烈に辱かした。「蝮の裔よ、誰が汝等に、來らんとする御怒りを避くべきことを示したるぞ。然らば悔い改めに適はしき果を結べ。汝等、われらの父にアブラハムあり、と心の裡に言はんと思ふな。われ汝等に告ぐ、神はこれらの石よりアブラハムの子等起しえ給ふなり。」

汝等、蝮の岩蔭に隠れる如く、みづからを石室に閉ぢこめる者よ、汝等パリサイ人及びサドカイ人は、石よりも剛愎である。汝等の心は學問と儀禮とに硬化し、汝等の利己的な心は石のやうに冷たい。人もし飢えて汝等にパンを乞ひば、汝等はそれに石を與へ、汝等よりも罪の少い者にさへ、汝等は石を抛つ。汝等パリサイ人及びサドカイ人よ、汝等は奢れる石像にも等しい。何故ならそれ

は火のみが征服し得べく、たとひ汝等の上に水に灌ぐとも、その水が直ちに乾くであらうから。然し乍ら、一握の土からアダムを創つた神は、沖の石から崖の岩から、彼のために他の人間を、他の生物を、他の子孫を創り得た。彼は汝等が靈魂と肉體とを花崗岩に化しつつある間に、花崗岩を靈魂と肉體とに化す事が出來た。それ故、ヨルダン河で水を浴びるだけでは十分でない。體を洗ひ淨めるのは、聖く健やかになることである。汝等もし火を以て洗禮を施す者に、灼き盡されざらんと欲せば、汝等の生活を變へよ、而して汝等のこれまで爲し來れる所と反對の事をなせ。「群衆ヨハネに問ひて言ふ、さらば我ら何を爲すべきか。答へて言ふ、二つの下衣を持つ者は、持たぬ者に分け與へよ。食物を持つ者もまた然かせよ。」

「取税人もバプテスマを受けんとて來りて言ふ、師よ、我ら何を爲すべきか。答へて云ふ、定まりたるものの外、何をも促るな。」

「兵卒もまた問ひて言ふ、我ら何を爲すべきか。答へて言ふ、人を劫やかし、また誣ひ訴ふるな。己が給料をもて足れりとせよ。」

善を惡から峻別して言ふ場合、ヨハネは強制的で而かも殆んど超人的だが、降つて特殊な事物に就いて言ふ場合、彼の説は頗る凡化して全くパリサイ人の傳統に墮してゐる、とも云へば言へる。

彼の唯一の忠告は施しを與へよ、餘分を捨てよといふ事である。税吏からは厳しい正しさを求めてゐるに過ぎない。定められたものだけを取り立てて、それ以上取るなと云ふのである。残忍な、掠奪を事とする、兵卒組に對しては、單に警告を與へてゐるだけのことだ！「汝等の給料をもて足れりとし、竊むなかれ」と。これならモーセの律と一向大差がない。己にアモスとイザヤとは、彼よりも遙かに進んだ所まで行つてゐた。

今は死海の告發者がテベリヤ海の解放者に道を譲るべき時である。先驅者の運命は嶮難だ。彼等は知つては居るけれども、見ることを許されない。ヨルダン河の岸には着くが、約束された土地に入るまでに行かない。後から來る者のために道を直くはするが、直してゐる間に其の人に追ひ越されてしまふ。王座は支度しても、自分でそれに座るわけではない。彼等は主人に仕へる身ではあるけれども、その主人と滅多に顔を合はせる機会がない。恐らくヨハネの熱狂も、この使節としての意識に裏付けられてゐるので、それ以外の何物でもあるまい。それは決して妬み嫉みのない意識だが、謙遜の中にも猶ほ一脈の寂しさを漂はしてゐるそれだ。人々がエルサレムから尋ね來て、彼の誰であるかを問うた。「さらば何、エリヤなるか。」

「然らず。」

「かの預言者なるか。」

「答ふ、否な。」

「キリストなるか。」

「否な……答へて言ふ、我は荒野に呼ばはる者の聲なり。……わが後に來る者われに勝れり、と云ひしは此の人にて、我はその鞋の紐を解くにも足らざるなり。」

ナザレでは、それと同時に、この雷のやうに三度「否な」と答へた聲に應じて、荒野に出かけるべく、知られざる一個の勞働者が、己が手で鞋の紐を繋りつつあつた。

參籠

ヨハネは罪人を招ぎ、悔い改める前に先づ、河で身を淨めさせた。イエスはヨハネの洗禮を受けに出かけた。然らば彼は自分を罪人と認めて居たのか。

聖書に明細に記されてゐる。預言者は罪の赦しを得させんが爲めに、悔い改めの洗禮を説いた。彼が許に行つた者は己れを罪人と認めた。洗ひに行く者は己れを汚れた者と知るからだ。

イエスの生涯に就いて、十二歳から三十歳までの間の事、即ち誰しも全く過ちの多い青春期、血の燃ゆる青年時代を、我々が些度も知らぬと云ふ事は、彼また其の時代に於て他の人間のやうに罪人であつたか、或ひは少くとも罪人らしく振舞つたかどうかといふ疑問を起させぬでもない。けれども彼が生涯の残りの三年は、四福音書の言葉によつて最も明瞭に照らし出されてゐる。何故なら故人を憶ふ時、我々の最も明瞭に思ひ出すのは、その人の晩年の言葉と行爲とであるからだ。而かも此等の三年間に就いて我々の知るところのものは、その始まりの純潔さから終りの榮光に至るまで、キリストの生涯にこれぞと想はれる罪の存在を示す何物をも與へてゐない。

キリストの生涯には改心の現れさへもない。最初の言葉は最後のそれと同じ抑揚を持つてゐる。其等の送り出る泉は、最初の日から澄み切つてゐて、泥深い悪のをどみなど毫もない。彼は正直な絶対的の確實を以て、權威と認められる純眞を以て語り出す。聞く者は彼の後に何ら混沌たる物の残されてないことを感じる。その聲は清く透き通つて、卑猥な歡樂の酸っぱい渣滓や悔恨のしやべれ聲やに粗されぬ、調子のいい唄を聞くやうだ。その容貌、その微笑、その思考に現れる透き通るやうな朗かさは、あらしの雲の後に來る静けさでもなければ、または毒々しい夜の影を徐ろに征服して行く曉の混沌たる白さでもない。それは唯一度生れ乍らの少年時代を成熟期まで持ち越した

彼の清さである。暗れやかさ、明るさ、静けさである。夜に終る筈だがまだ黄昏までには晦くされてない、晝下りの穢やかさである。永遠の晝、死ぬまで害はれない潔白な小兒の心だ。

彼は不潔な人々の間を、貧乏人の自然な單純さを以て、罪人の間は健全な人間の自然な力をもつて、病人の間は健康者の自然な大膽さを以て歩き廻る。一方改心した人間はその心の背後に、いつも多少の惱みを持つてゐる。わづか一滴の苦味でも、一寸とした不潔の影でも、隱微的な誘惑の萌しでも、彼を苦惱に牽き戻すのに十分である。彼は自分が未だ全く昔のアダムから脱却し切つてゐないのではあるまいか、彼の體內に住む他の自己を單に氣絶さしたただけで、全く滅し盡してないのではあるまいかといふ疑ひを始終感じてゐる。彼はその救ひのために高い價ひを拂つて來たので、それは彼にとつて貴いものには相違ないが、また破れ易くも思はれる。従つて彼はそれを危険な場所に置いたり、失つたりすることを始終虞れてゐる。彼は罪人を回避することはしないが、無意識の懼れを以て彼等に近寄る。口に出してこそ言はぬが、それは新らたな感染を懼れる心であり、また曾ては其處で彼もまた樂しんだその忌はしい光景を見て、彼の醜行に對する追憶が堪えがたいほど新らたにされ、そのために彼を驅つて究極の救ひに失望さすやうな羽目に陥としてはせぬかといふ虞れである。召使ひが主人になると、彼は必ず召使ひと仲が悪い。貧乏人が金持になると、彼は必

貧乏人に酷くあたる。改心した罪人が何時も罪人に親切であるとは限らない。彼の憐れみには、聖者の心にさへ堅くこびり付いてゐる、その矜りの痕が混つてゐる。罪人とても何でそれと同断でない道理があらうか。道は總ての者に開かれてあるのだ。最もやくざな者にも、また最も剛愎な者にまでも。獲物は大きいのだ。彼等とても何で、眞闇な地獄に投げ込まれたまま、其處にじつとして踏み止まつてゐるものか。

また改心した罪人がその友に告げて改心を勧める場合、彼は彼自身の経験、失敗、釋放等を基礎に論ずることを免かれぬ。それは彼自身を矜ることよりも寧ろ、相手に有益であらうことを望むだけに過ぎないのかも知れぬ。けれども、如何なる場合に於ても彼は、いつも自分を甘味のある救ひの生きた現在の標本として指摘することに熱心だ。

過去は中絶することが出来るけれども、滅ぼすわけには行かぬ。悔い改めの生れ變りによつて生活を始める其の人々の中に、それは殆んど無意識的に現れて来る。然るにイエスの場合に在つては改心前、格別異つた生活法を執つてゐた徴候が見えない。どの譬への中にもまたどんな言葉にも、さうした意味の包含されてゐるさうな跡がない。どんなに些細な彼の行爲の中にも、また最も曖昧な彼の言葉の中にさへ、それが見當らない。彼の罪人に對する愛は、新たに轉信した改悔者の熱狂

的な頑迷さを、毫も持ち合はさない。それは自然の愛で、義務的の愛ではない。なんら非難の意味を含まぬ兄弟の愛情なのだ。嫌厭の情に打克つ努力を要しない、自發的の親しい友情なのだ。それは自ら汚される懼れなく、また神の淨めを信じる純潔な人間が、不潔な者に對して向ける注意——私のない愛情——神聖の絶頂に達した時に聖者たちの感じる愛——この愛を措いては、他の如何なる愛も卑しく見え——イエスの現れる前に、誰も斯かる愛を見たことになかつた、その愛なのだ！滅多に二度とは現れて來ない愛——イエスの愛を想ひ、それを模倣する者だけが知る愛——いつもキリスト的と呼ばれて、その以外の名では決して呼ばれない愛。神聖なる愛——キリストの愛。その愛なのだ！

イエスは罪人の間に來た、けれども彼は罪人ではなかつた。ヨハネの前を流れる水の中へ沐浴に來た、けれども彼は内に何の穢れも持つてゐなかつた。イエスの魂は子供のそれであつた。叡智に於ては學者に勝り、聖さに於ては聖徒に優る小兒の魂であつた。

彼は嚴格な清教徒でもなかつた。彼は未だ會て、破滅から辛うじて救はれて道徳的に難破した人間の懼れを、感じた事がなかつた。彼はまた要心の深すぎるパリサイ人でもなかつた。彼はまた罪の何であるか、また何が正しいかを知つてゐた、さうして文字の迷路にその精神を見失ふやうな事

をしなかつた。彼は生活を知つてゐた。それ自身善事ではなくとも、總て善いものの必要條件とあれば、さうした生活をも回避しなかつた。食つたり飲んだりする事も悪い事ではなく、また人々と顔を合はせることも悪くない。物影に隠れる盗人に向つて親切な眼差しを送り、無理にされた接吻の痕を隠すために口紅を施した女を見ることも、決して悪い事ではない。

洗 禮

ところで、イエスはヨルダン河で洗禮を受けるために、罪人の群集の中にまでやつて來た。ヨハネによつて復活されたこの儀式に、普通の意義より以上の何物かを認める人にとつては、この問題は別に不思議でも何でもない。イエスの場合は獨特である。イエスの洗禮は、他の一般の洗禮と同じく外面的だけれども、その解釋は別に立つ。洗禮は靈魂を淨めるために意志の象徴として肉體を洗ふこと。即ち物質的の汚れを洗ひ去つた水が、精神的の汚れをも洗ひ去り得るといふ、原始的な比喩の殘痕だけではない。この有形的な隱喩は、群衆に示す象徴として有用なのだ。非物質的のものも信ぜざるがために、物質的の封助を要する多數者の、世俗的な眼のために必要な儀式なのだ。け

れどもイエスの場合は、それとは違ふ。

彼は先驅者の預言が満たされるやうにと念つて、ヨハネの所へ行つたのだ。彼が火の預言者の前に跪つたのは、正しい告知者としてのヨハネの資格を認めたからだ。すでにその義務を成し遂げて、今や我が事終れりと言ひ得る、忠義な使節としての彼の値打を認めたからだ。イエスは此の象徴的な任命に服する事によつて、實は先驅者としての正式な稱號をヨハネに授けてゐるのだ。

今將に彼の生涯の新紀元、彼の本統の生活を始めようとしつつあるイエスは、彼の體を水に浸すことによつて、彼の欣んで死に就くべきことを證すと同時に、また彼の確かに再生すべきことを證した。彼は體を淨めるためにヨルダン河へ降りて行つたのではなく、彼の次ぎの生活が始まつてゐることを示すために、一時は死ぬやうに見えても其の實死なぬことを示すために行つたのだ。それは丁度彼がヨルダン河の水で體を洗ひ淨める場合と同じやうに。

荒 野

水から上るや否や、イエスは荒野に這入つた。群集から孤獨へ！ それまで彼は、ガリラヤの河

原や野原の間に、ヨルダン河に沿うた蒼々した牧場に暮して来たが、今度は泉も湧かなければ種も芽生えず、生物としては蛇より外にない、巖山に上つて行つた。それまで彼は、ナザレの勞働者の間に、ヨハネの懺悔者の間に暮して来たが、今度は人の顔も見えず、人聲さへも聞えぬ、寂しい群山に上つて行く。「新人」は己れと人類との間に荒野を置く。

「禍ひなる哉、孤獨なる者よ」といふ人は、自分で自分の卑怯の度合ひを表白してゐるに過ぎない。社會は或る一つの犠牲が、困難の度合ひに準じてその價値を認められる處である。魂の豊かな人々にとつては、孤獨は賞與であつて贖罪ではない。實際的に價値のある期間、内なる美の創造される時機、不在者と和解の生じる時なのだ。我々が我々の仲間と共存の出来るのは孤獨の場合以外にない。そのとき博大な心を以て思想する孤獨的な魂が、他の慰めに代つて我々を慰めてくれる。孤獨を忍び得ない人々は、凡庸な人間で卑劣な人間だ。彼等は他人に與へる何物をも持たず、自分自身を懼れ、己れの空虚を恐れてゐるものだ。彼等の運命づけられるところのものは、彼等自身の心の永遠の孤獨であり、また佻しい内なる荒野である。さうして其處には、荒蕪地の毒草以外に何物も生えぬのだ。彼等は不安で落付きがない。他人におせつかいの出来ない時は氣をふさぎ、その癖他人に何か言はれると聞えぬ振りをする。彼等は他人の徒黨的生活に迷ふ。勿論、その迷はし

た連中とても逆にそれに迷はれてゐるのだが。彼等は都會の下水から毎朝送り出る流れの中に在つて混和しなければ生きて行けない、不活發な細微物みたいなものだ。

イエスは人間の仲間に生活した。さうして彼は人間を愛したが故に、當然彼等の仲間に戻るべきであつた。けれども来るべき數年間に於て彼は、獨りになるために屢々、その弟子たちからさへ遠去かつて身を隠した。人間を愛するためには、隨時、彼等から離れる必要がある。人間から遠去かるだけそれだけ、我々は彼等に近付いて行くのだ。小さな魂は彼の受けた悪だけを憶ひ出す。夜は不安と苦悶とで眠りがたく、口は怒りをもつて毒づく。大きな魂は恩恵だけを憶ひ出す。或る僅かな善行に對しては常に感謝し、彼のこれまで耐え忍んで来た大きな悪は忘れてしまふ。その瞬間には許すべからざるものをも、猶ほ能く彼の心から拭ひ去り、もとの兄弟愛を復活せしめて、彼は人間の方へ戻つて行く。

イエスに取つて此の孤獨の四十日間は、彼が準備の最後である。ユダヤ人（キリストの預言的象徴である）は、神に約束された國に入る前に、四十年間、荒野に彷徨ふた。モーセはその律法を聽くために、四十日間、神の傍らから離れなかつた。エリヤは悪い女王の復讐を免れるために、四十日間、荒野を彷徨ひ歩いた。

それと同じく、この新しい解放者にも亦、その約束された國の宣言を行ふ前に、神と親密な交渉を結んで、最高の靈感を受くべく、四十日の時間が宛てがはれた。然しながら、その荒野に於てさへ、彼は全くの孤獨では有り得なかつた。何故なら彼の周圍には參籠中始終、動物や天使が附き従つて居るであらうから。それは謂はば人間に劣る存在物と、人間に優る存在物とを指す。一方は人間を惹き下ろすもので、一方は人間を釣り上げるものだ。一は物質一方の存在物で、他は靈魂一方の存在物だ。

人間は動物に生れて、天使にならう努力する。彼は物質から徐々に變質して靈魂に變つて行く。もし動物が上になれば、人間は獸の標準以下に墮落する。何故なら彼は知識の端くれを獸心の用に供するからだ。もし天使が勝てば、人間は天使と同等の者になる。さうして神軍の一兵卒となる代りに、神性そのものを賦與される。けれども墮落した咎で獸の形を裝はせられた天使は、その墮された高所によち登らうとする人間にとつては狡黠で而も粘り強い敵だ。また物質的世界、衆人の獸的生活からみれば、イエスが彼等の敵だ。イエスは獸を人間にし、人間を天使にするために、此の世の中に生れて來たのだ。世界を革めて、それに打克つために、神と人間との敵なる世界王、惡漢、教唆者、籠絡者等と戰ふために、生れて來たものである。天の父がサタンを天國から逐ひ出した如く、彼も亦それを地上から逐ひ拂ふために生れて來たのだ。

其處で四十日目の終りに、サタンがその敵を誘惑すべく荒野にやつて來た。

サ タ ン

我々の物質に對する隷屬は、吾人の肉體が毎日食物を必要とする事によつて、我々の生活に烙印が押されてゐる。而かもイエスはこの物質に對する隷屬に打克たうとした。彼は人間の生活を頷つ場合、いつも飲食を諾つた。何故ならそれは彼の友達にする事であるから、また肉に屬する物を肉に與へることは正しい事だから、さうして最後にそれがまたパリサイ人の偽善的な斷食に對して、一つの見せしめにもなつたからだ。彼が地上に於ける使命の最後の行爲は晚餐だつた。然かも洗濯を受けた後の最初のそれは斷食であつた。彼の節制が友人の純な氣持を辱しめるに及ばず、またそれが虛飾的の敬虔と間違へられる氣遣ひのない場所に唯だ一人居る時、彼は全くおのが食事を忘れてゐた。

然しながら四十日して彼は餓じくなつた。粘り強く姿の見えないサタンは、この物質的必要の

起る瞬間を待ち構へてゐて、それを捉へた。サタンは云ふ。「なんぢ若し神の子ならば、命じて此等の石をパンと爲らしめよ。」

非難が即座に出た。「人の生くるはパンのみに由るにあらず、神の口より出づる凡ての言葉に由る、と録されたり。」

サタンも負けてはゐなかつた。山の頂きから天下の諸々の國を示して云ふ。「この凡ての權威と國の榮華とを汝に與へん。我これを委ねられたれば、わが欲する者に與ふるなり。この故にもし我が前に拜せば、悉く汝の有となるべし。」

イエスはこれに答へた。「サタンよ、退け。主なる汝の神を拜し、ただ之にのみ事へまつるべし、と録されたるなり。」

其處でサタンは彼をエルサレムに連れ行き、宮の頂上に立たせて云ふ。「なんぢ若し神の子ならば、此處より己が身を手に投げよ。」

然しながらイエスは速やかに答へた。「主なる汝の神を試むべからず、と云ひてあり。」

「悪魔あらゆる試みを盡くしてのち、暫くイエスを離れたり。」と、ルカは續けて書いてゐる。其處で我々はイエスの歸還とその最後の努力とを見ることになる。

この對話は一寸見ると聖句の投げ合ひだけのやうにも見える。サタンもイエスも自分の言葉を使はないで、聖書の引照によつて張り合つてゐる。神學上の論争を聽いてゐるやうなものだ。然かし事實は、言葉でなしに行爲で現はされた、福音の最初の譬へなのである。

サタンがイエスを降服させようなどと無謀な望みを立ててやつて来たにしても、それは決して驚くに當らない。イエスも人間の事であるから、それが誘惑に遭つたところで、これまた驚くには當らない。サタンはただ偉大なさうして純潔な人を誘惑するだけの事だ。他の人間に對しては、何等誘ひの言葉を吐くことすらも必要としない、彼等は子供の時分から今に至るまで已に彼のものなのだ。サタンは彼等の歸順を獲んがために、格別その身を煩はす必要がない、彼等は彼の召集に遭ふ前に、已にその腕中に捕へられてゐるのだ。而かも彼等の多くはサタンの存在してゐることを知らない、人間は幾ら遠方からでも彼の自由になるので、彼は決してその眼の前に姿を現はすやうな事をしなかつた。かやうに彼を知らずに来たからこそ、彼等はいつもサタンを否定してかかるのだ。悪魔の軍兵は悪を信じてはゐないのだ。悪魔の最も悪賢い計略は、彼が死んだといふ噂を弘めることだと、昔から云ひ傳へられてゐる。彼は有らゆる形をとつて現れるが、時にはその姿が餘り美しく、誰の眼にも見分けが付かない。例へば、かの驚くべきほど知識と趣味の發達したギリシヤ人

たちでさへが、その神話にサタンを取り容れてない。その代り彼等の總ての神々は、よく観ると、月桂樹や葡萄の葉の王冠の下から悪魔の角を生やしてゐる。暴君的で好色家のヨブ、多淫なヴェヌス、掠奪者のアポロ、殺人犯のマルス、泥酔漢のデオヌシオ等の如き、凡てが悪魔的である。ギリシヤの神々は、この世界を滅す悪の臭氣を嗅がせまいため、人間に惚れ薬と強い香水とを與へた、それほど彼等は狡黠だつたのである。

然し多くの人々がそれを悪魔と知らず、改悔者のために作られた會堂の化物でも見るやうに嘲り笑ふ場合でも、一方にはそれと悟り乍ら悪魔に従はぬ人々のために警告を與へる者が少しは居る。悪魔は創めて造られた兩人の純性を籠絡し、強者ダビデを教唆し賢者ソロモンを墮落せしめ、神の主權の前に正義者とされたヨブを審いた。サタンは誘惑する、さうして荒野に匿れる總ての聖者たちを、神を愛する總ての人々を、恒に誘惑するだらう。我々が彼から遠去かれれば遠去かるほど彼は近付いて来る。我々が高く登れば登るほど、彼は怒つて我々を引下ろさうとする。彼は清潔なものだけを汚すことが出来るのだ、さうして獸性の熱い息にかかつて、自然に醜態する汚物には眼も呉れない。サタンに誘惑されることは、純潔の證據だ、偉大の標しだ、さうして其の人が向上の途に在ることを示すものだ。サタンを知り彼に面接した事のある人は、自分自身に善い希望を掛けたで

あらう。就中誰よりもイエスは此の聖別の主動者であつた。サタンは二度彼に挑戦し、一度は彼を誘惑した。彼はイエスに、死物を變へて生命を與へる物となさんことを求め、また若し眞に神の子ならば、神が救つてくれるだらうから、高所からその身を投げてみよと云つた。彼はイエスに、神に仕へる代りに、悪魔に仕へることを約束するならば、地上の王國の所有權と榮光とを與へようと提言した。彼はイエスから物質的のパンと物質的の奇蹟とを求め、イエスに物質的の力を約束してゐる。イエスは挑戦を取上げず、提供されたものを斷る。

イエスは多くのユダヤ人が望むところの肉體上の一時限りのメシヤ、誘惑者が卑劣な考へで想像してゐるやうな物質的のメシヤではないのだ。彼は肉體に食物を與へるために來たのでなく、魂に食物——眞理といふ生きた食物を與へるために來たのだ。故郷遠く離れた同胞がパンに不自由してその饑を満たし得ない時、彼はその弟子の持ち來る僅かばかりのパンを割き與へる。と彼等は總て満腹して而かもその肩が籃に盛り切れぬ程あまる。けれどもよくせき必要の場合以外、彼はかうした土から來て土に還るパンの頑ち手にならぬ。若し彼が路上の石をパンに變へるなら、あらゆる人間がその肉體上の愛慾から彼に従ひ、彼の云ふ所を悉く信じる振りをするだらう。たとへ犬でさへ彼の饗宴に來るかも知れない。然しこれは彼の望まぬ所である。凡そ彼に従ふ人々は、饑をや哀し

みや貧しさに堪へて、まづ彼の言葉を信じなければならぬ。それ故彼に従はうと欲する人々は、豊かな田野を棄てて顧みず、パンに替る錢を棄てて顧みざる人々でなければならぬ。彼等はイエスと共に、膏囊も持たず、給料も拂はれず、着のみ着たままで歩かなければならぬ。さうして空の鳥のやうに圃の穀物の穂を啄んだり、または人家の戸口に起つて物を乞ひしながら生きて行かなければならない。人間は地上のパンなしにも生きて行ける。樹の上の葉の間に残つた一箇の無花果、湖水からとれた一匹の魚だつて、パンの代りをつとめる事が出来る。然しどんな人でも天國のパンなしには生きて行けない、少くとも若し其の人が、それを味はつた事のない人々の運命である永遠の死を免かれようと念ふなら。人間はパンのみで生きるものではない、愛と熱と眞によつて生きるものだ。イエスは今將さに地上の國を天國に、狂暴な獸性を幸福な聖い生活に變へようとしてゐる。けれども石をパンに、物質を他の物質に變へようとはしてゐないのだ。

それと同じ理由でイエスはもう一つの挑戦をも斥けた。人間は不思議な事、不思議に見える事、奇怪な事、目前に可能とされた物理的不可能事を好む。彼等は異常の物に憧憬してゐる。それが不思議な事を行ふ人でさへあれば、たとへ悪人であらうと香具師であらうと、彼等は其前にひれ伏さうとしてゐる。イエスから彼等の總てが求めたところのものは、一つの微すなはち素晴らしい輕業

的の早業であつた。けれど彼はいつもそれを斥けた。彼は奇蹟的の力によつて説き伏せる事を好まなかつた。彼は病人——殊に精神の病める者並びに罪人等——を癒やす事を諾つたけれども、此等の奇蹟を行ふためにさへ屢々その機會を避け、また癒やされた人々に向つては癒やした者の名を告げるなど頼んだ。而かも彼はこの力を自分自身のために用ひたことが一度だつて無かつた。ゲッセマネに於てサタンが、死の盃を彼の唇から取り除かせようと誘惑した時にも、また彼が十字架にかけられ、サタンがユダヤ人の口を假りて「汝もし神の子ならば十字架より下りて己を救へ」と、その挑戦を繰返した時にも、彼は決してそれを用ひなかつた。參籠の夜にもまた死の眞晝にも、彼はただサタンを退けただけで、己れを救ふために奇蹟の扶けを求めなかつた。人々は有らゆる反證に繋りなく彼を信じなければならぬ。たとへ彼が平凡な人間に見える事に面接しても、彼の神性を信じないわけには行かぬ。徒らに宮の頂きから身を投げる事、單に人々を征服する目的で他人の痛みを止め、驚畏と恐怖とによつて彼等の意を捉へようとする事、神を試みにかける事、例へばサタンが厭や味と傲慢とを以て差し向けた恥ぢ知らずの賭に彼を勝たしめまいがため、神をして輕粗、皮相の奇蹟を遂げしめるやうな事は、イエスの行爲に適はしくないので。愛すればこそ彼は人間の心に向つて語らうとする。氣高い人格者であるが故に、彼は人間の生活に氣高さを持ち來さう

とする。純潔な精神の持主であればこそ、彼は他人の精神をも浄めようとする。憐れみ深いが故に他人の意にも愛の焰を點じ、偉大な精神があればこそ、小さな卑屈な忘れられた魂に偉大さを與へようとするのだ。下等な奇術師のやうに宮の下なる崖から身を投げる代りに、彼は天國の祝福を高所から宣べ傳へるために宮から山へ登つて行くだらう。

地上の國々を提提されたことは、イエスに取つては怖ろしい事だつたに違ひない。さうして其等はまた事實サタンの云ひ値よりもつと價値の多いものだつたに違ひない。サタンは自分の權利で自分のものを提提するのだ。地上の國々は暴力を以て築き上げられ、偽瞞を以て支へられてゐる。其等はサタン自身の國であり、再獲された彼の樂園である。サタンは毎晩、權力者の枕に着いて眠るのだ。國々は彼に物質的の貢物を支給し、その思考に行爲に日毎の捧げ物を献じてゐる。けれどもイエスは恐らく悪魔に膝を屈する事なしに、地上の諸王からその國々を奪ひ去ることが出来たであらう。それにはただ人々をして働かずにパンを獲させさへすれば好いのだ。若し彼が輕業興業の香具師のやうに人氣取りの奇蹟でも演つてみせたなら、大衆は歡呼して彼を迎へたことだらう。若し彼がユダヤ人の憐憫たる奴隸期間に待ち望んで來たメシヤに見せかけようとしたものなら、彼は驚くほど彼等を墮落させることが出来たであらう。あらゆる土地を優美と誘惑との國に

化し、彼は直ちにサタンの代理人としてどんな地位でも占める事が出来たであらう。

然しながらイエスは滅んだ國の再興者や敵國の征服者になることを望まない。權力は彼に取つて重要なものでない。榮華に至つては更に無用の長物である。彼の宣言し準備しつゝある國は、地上の國々と何の繋はりも持たぬ。それよりもむしろ彼の國は、地上の國々を滅ぼすべく運命づけられてゐるのだ。一つの魂が正義に即く時、天國は地上の國々から擲み取つた一人の新しい市民を加へて、いつもそれだけ擴張しつゝあるのだ。あらゆる人間が善良で正しいなら、總ての人々が父がその子を愛するやうにその兄弟を愛すなら、敵すらも互ひに愛し合ふ（假りにまだ敵の残つてゐるものとして）なら、誰ひとり蓄財を念頭に置かぬなら、また他人の物を奪る代りに、あらゆる人間が饑ゑたる者にパンを與へ、凍えた者に着物を與へるなら、その時地上の國々は何處かへ行つてしまふだらう。誰にも隣人の土地を竊んで自分の領土を殖やす意志がなければ、何處に兵士の必要があらう。あらゆる人間が自分の良心に律をもち、指揮する軍隊もなければ、選むべき裁判官もなかつたら、そのとき何のために國王の必要なぞあらう。あらゆる人間が生活を保護されてそれに満足し、兵士や召使ひに給料が要らなかつたら、金錢や貢物の必要が何處にあらう。あらゆる人間の魂が改造されるなら、社會、國家及び正義と名づけられる此等の謂はゆる人生の基礎は、長夜の幻覺

のやうに消滅するだらう。キリストの言葉は金も要らなければ軍隊も要らない。さうして若しもそれが一般人の良心を以て統一された生活になるなら、人間を束縛して盲目にする總てのものや、下正な力を必要とする事や、戦争の罪惡的な榮譽などは、太陽の光りと風との前に於ける朝霧のやうに消滅するだらう。天國の内部は一體である、さうしてそれが多數の地上の國々に取つて代るだらう。解放された精神は恐らく專制的な事物を憶ひ出さぬだらう。人間は最早や國王と臣民、主人と奴隸、富者と貧者、傲慢な徳人と謙遜な罪人、自由人と囚人といったやうに分たれないだらう。神の光りは總ての人々の上に輝き、王國の市民は父と兄弟との一家族となり、樂園の門は再び神の如きアダムの子等に開かれるだらう。

イエスは自分の中なるサタンを征服して、今や人間の中のサタンを征服するために荒野から外へ出た。

歸 還

イエスが再び人々の間に歸るや否や、彼は國守へロデヤが後添の良人(が、ヨハネをマケロスの

要塞に監禁したことを聞いた。荒野に呼はる聲は已に静まり、ヨルダン河に赴く行者たちは最早や、荒くれた洗禮者の長い影の水に映るのを見なかつた。

彼は已にその仕事を成し遂げ、今やより力強い聲に道を譲るところだつた。ヨハネはそれまで獄舎の暗闇の中に待つてゐたのであるが、彼の血みどろの首は終ひに金の盆に載せられて、聖安場に運ばれた。——それは恐らくあの人間を裏切つた悪い女の最後の響應になつたことであらう。

イエスは將さに自分の日の來たことを悟る、さうして直ちに天國の將來を告げるために、サマリヤを横切つてガリラヤに歸る。彼は大王の都である首府エルサレムに行くのではない。三つの丘を誇りとして、その心の石のやうに堅い、石と豪華の都エルサレムを壊しに行くのだ。戦ひを挑みにイエスの向つて行く人々は、正さしくその首府、世界のエルサレムに在つて、大きな都市に榮華を誇る人々なのだ。

エルサレムには世界中の権力者であるローマ人が住んでゐる。彼等は武装した兵士を率ゐて、世界とユダヤ人とを支配してゐる。エルサレムはカイザルたちの代表、偽善的な放埒者アウグストが不實の世嗣で酔拂ひの刺客であるテベリオや、淫蕩な浪費者ユリオなどによつて支配されてゐる。エルサレムには大祭司、古い宮守、バリサイ人、サドカイ人、學者たち、レビ人とその護衛、預言

者を捕へて殺した者の子孫、律を紊る者、文字に拘泥する者、味のない狂信を鼻にかける者などが住んでゐる。エルサレムには神の庫守、カイザルの財務官、賽銭の番人、守銭奴などが居る。公吏は取税人や佞諛者と共に、富者は僕婢や妾と共に居り、商人は雑多な店を持つてゐる。財布はシエケルの音をさせながら心臓の上の所に胸の温味でとつくり暖められてゐる。

イエスは總て此等のものと戦ひに行くのである。彼は凡での人々に屬する土地——その土地の所有者を征服するために、言葉は神の善しとしたまふ至る處で自由に話されなければならぬものだが——その言葉の支配者を打破るために、下等で壊滅を免れず命數的の要素である黄金の持ち主を罰するために出かけるのだ。彼は肉體を虐けるローマの軍兵の國を、魂を虐ける官の祭司の國を、貧民を虐ける蓄財者の國をくつがへすために出かけて行くのだ。彼は肉體や魂や貧民を助けに行くのだ。彼はローマに反抗して自由を教へ、宮の教へを粉碎して愛を説き、富者の一切の理想に背いて貧乏を訓へる。

彼はその使命を説くのにエルサレムから始めることを好まない。何故なら其處には彼の敵が集まつて最も強い勢ひを示してゐるからだ。彼はその都市を包圍して外部から攻め落さうとする。輒ち天國が己に其處を徐ろに包圍攻撃し始めた頃に、同勢を従へて乗り込もうといふのだ。エルサレム

を征服することは最後の試み、最高の試練であり、預言者たちと彼等を屠つたエルサレムとの戦ひより一層大きな戦争、一層怖ろしい激戦であらう。若し彼が今エルサレムに行くならば（今彼は主として其處に入り、それから罪人として葬られるであらうところの）彼は直ちに囚人として召し捕られ、彼の言葉をもう少し働き榮えのある、もう少し石地の少い土地に蒔くことが出来なかつたであらう。

エルサレムは總ての首府と同じく——やはり各國のあぶれ者や食ひ詰め者や屑の流れ込む大下水で——其處には下らない、氣取り屋の、怠け者で、疑ひ深い、鈍物の集りや、ただ儀式の傳統を墨守するだけで、徒らに世間の墮落を憤慨してゐる。禮儀一點張りの貴族社會や、金の番人に屬する地主や相場師の有産階級や、ただ寺院の迷信と外國人の劍の懼れとによつてのみ抑制される叛逆的な、落付きのない、無知な群集が住んでゐる。エルサレムはイエスが種を蒔くのに適當した土地ではなかつた。

田舎出の人間——それ故丈夫でもあり、がつしりもしてゐるのだが——である彼は、まづその田舎に歸る。彼はその福音を最初に彼を迎へる人々に傳へようと欲した。それは輒ち貧乏人と心の貧しい人々に向つてであるが、福音は特に彼等の爲めに告げられるものであり、また彼等は永らくそ

れを待ち設けてゐるばかりでなく、それを聞いて他の誰よりも欣ぶであらうから。イエスの此の世に來たのは貧乏人の爲めである。それ故エルサレムを去つて、彼はガリラヤに着き、會堂に入つて教へを説き出す。

神の統治

イエスの最初の言葉は、言葉數少く簡潔で、「時は満てり、神の國は近づけり、汝ら悔い改めて福音を信ぜよ」と言つたヨハネの言葉と甚だ似てゐる。

剥き出しな言葉は餘り謹直すぎて、現代人には反つて判りにくい。それらを理解するためには、またヨハネの使命とイエスの使命との相違を知るためには、それらを我々の言葉に翻譯して、永遠に生くる意味を再現する必要がある。

「時は満てり！」とは人々の待ち設けてゐる時、彼等の預言し宣告して來た時を指す。ヨハネは一人の王が來て直ちに新しい國即ち天國を建てたらうと言つた。今その王が來て國の扉が開かれたと宣言してゐる。彼は神の榮光に輝き居る王たる前に先づ案内人となり、途となり、手となる。

イエスが「時は満てり」と云ふ時、彼は精確な時日を、時まさにテベリオ朝第十五年だつたと云ふ事を指しては云つて居らぬ。イエスの時間は現在を指し又いつも永遠を意味する。彼が出現の間、死の刹那、歸還の時機、完全な勝利の機會などは、まだ到來してをらぬ。もつともつと先の話である。けれどそれにも係はらず、時間は刻一刻に満たされつつある。働き手に十分の支度が出てゐるので、どんな時間でも時間のありつたけ手一杯に使はれる。毎日が彼のものであり、彼の年代は數字を以て書留められてない。永遠には年代も何もないからだ。人がその國に入らうと努め、信仰によつてその國を確め、その國を富まし、すべての劣等國へそれは人間的で神性に戻り、地上のもので天國のものでないから劣るのだに對抗して、その恒久の神聖と恒久の權利とを固め、護り、宣べる度ごとに、時はいつも満たされつつあるのだ。この時間はイエスの紀元、キリスト教の時代、新しい契約と呼ばれてゐる。その時から現在までまだ二千年とも経つてゐない、否な、二日とも経つてゐないのだ。何故なら神に取り、聰明な人間に取つては、千年が一日にも等しいからだ。時は熟した、今日でも我々は十分の機會をもつ。イエスは未だに尙ほ我々を召してゐる。第二日はまだ終つてゐない。國の基礎工事は漸く始まつたばかりだ。今日、此の年、此の國に生くる我、へしかも我々は何時までも生きては居まい。ひよつとすると此年の終りまで續くかどうか分ら

ない。現世紀の最後まで生き残らないことは確かだが、敢へて云ふ此の生ける我々は、此の國に與り、それに入り、其處に生活し、それを樂しむことが出来るのだ。その國は今から殆んど廿世紀も前に氣の毒なユダヤ人の作り出した迷想でもなければ、また古代の摸擬でも、返へらぬ追憶でも、過去の錯覺でもない。その國は今日のもの、明日のもの、永久のものである。いつも我々のものとして實際に生き生きと實現される未來の現實である。一寸前に取り掛かればかりの、誰でもが自由に出して、取り運んで行くことの出来る仕事である。二千年間も繰返されて來てゐるので、その言葉は古臭く、使命にも徴が生れてゐるらしいが、その國は——事實、まことに成就したそれは——新しくつて、昨日生れたばかりの若さの、これから猶ほ伸びて、花を咲かせ、繁殖して行くところのそれである。イエスは地上に種を蒔いた。けれどその種は、あらしの多い冬のやうに過ぎ去つた二千年間に、また人間の定命六十年間に、一向その芽を吹いて來なかつた。然らば血の洪水を流した後の我々の時代に、果して神聖な、期待に添ふ時期としての可能性があるかどうか。

この國のどんな所であるかを我々は、各ページに記されたイエスの言葉によつて知るだらう。けれど我々はそれを新らしい歡喜の樂園、限りのない幸福に飽き果てたアルカデー、脚を雲の上に踏まへ首を星の間に現はして、ボザナをうたふ大合唱團と想像してはならない。

キリストは神の國を、サタンの國に反對なもの、地の國の對敵として描いてゐる。サタンの國は惡心、偽瞞、殘忍、矜持の國、卑劣の國である。故に神の國は善心、清廉、仁愛、謙遜の國、高潔の國を意味する。

地の國は物質と内慾の國、黄金、憎惡、貪婪、荒淫の國、總て悪人や狂人の氣に入るやうな事物の國である。天國はこれと反對に精神と靈魂の國、自制と廉潔の國、他の一切の事物と比較して、其等が總て無價値に評價されるやうな、價値のある事物に満たされた國であらねばならぬ。神は父であり善心である。天は地の上に位す、故にそれは精神だ、天は神の家庭だ、精神は善の領分だ。地に這ふもの、地を掘るものは總て、物質に快樂を求め——それは獸性である。眼を擧げて天を望みながら生くるもの、永遠に天に住はうと欲するもの——それらは悉く神聖である。大多數の人間は獸だ。それらの獸を聖者にしようといふのが、キリストの意志である。これは神の國即ち天國の單純なさうして永遠に生くる意義である。

神の國は人間のものであり、また人間のためのものである。天國は我々の裡に在る。直ちに始めよ、それは地上に人生の幸福を満たすがための仕事だからである。それは我々の意志ひとつ、厭や應の返事次第に依る。完全なものになれ、さうすれば王國は地上にまで延長されるだらう。神の國

が人間のあひだに建てられるだらう。

イエスが附け加へて「悔い改めよ」と云つたのは本統だ。然し乍らこの古語はその眞の高遠の意味を歪めて解釋されてゐる。マルコの詞——「メタノイエテ」——は、「悔い改めよ」と譯さるべきではない。「メタノイア」は寧ろ心の變化、靈の更改を意味する。「メタモルフオーシス」は形態上の變化を指すが、「メタノイア」は精神上の變化を云ふ。従つてそれは人間の内的生命を更改する意味から、寧ろ「改心」と譯さるべきだ。「悔い改め」の觀念はキリストが誠を解く唯一の鍵だ。王國の到來を規定する條件の一つとして、またそれと同時に新しい秩序を構成すべき眞の本質として、イエスは全くの改心、生活と有り觸れた生活評價との革命、感情、意見、意圖の更改を要求してゐる。彼はこの事をニコデモに告げて「再生」と呼んでゐる。彼は普通人間の靈がどんな風にすれば全く更改されるものか、その方法を少しづつ説明して行くのであつた。彼はその一生をこの教へのために、またその模範を示すために盡した。けれどもそれと同時に、彼は「福音を信ぜよ」といふ一つの結論を附け加へて満足した。

「福音」と云へば今日の人々は大抵、イエスの四通りの傳記を印刷した書物の事を云ふであらうが、イエスは書物も書かなければ、また書冊の事を考へもしなかつた。「福音」といふ言葉を彼は文

字通り、明瞭で而かも懐かしみのある「善き音づれ」といふ意味に解してゐる。イエスは善き音づれをもたらず使ひ(ギリシヤ語では「天使」)だ。病める者の癒やされ、醫者の見、貧しき者の朽ちざる富みを富まされ、哀しめる者の歡び、罪人の赦され、不潔なる者の淨められ、完からざる者が完くなり、動物が聖者になり、聖者が神の如き天使になる、歡ばしい使命を彼はもたらすのである。若しこの國が来るなら、若し有らゆる人間がその來ることに準備すべきなら、我々はその使命を信じ、その國の實現の可能と接近とを信じなければならぬ。若しこの約束に信念が置けないなら、誰一人この約束を満たすために爲さねばならぬ事も爲ないだらう。ただ此の善き音づれの眞であるといふ保證だけが、ただ此の國が探險家のつく偽りでもなければ、また悪靈に取憑かれた熱病者の見る幻覺でもないといふ信念だけが、ただ此の使命の眞面目で効力あるといふ確信だけが、人間をしてその大きな基礎工事に着手せしめんために彼等を起たすことが出来るのだ。あまり言葉数が寡くつて大多數の人々には判りにくい此等の言葉を以て、イエスはその教へを説き始めた。時の満ちたことを、直ぐ始めねばならぬことを！王國の將來を、物質に打克つ精神、惡に打克つ善、獸に打克つ聖者の勝利を。靈の完き更改である——「メタノイア」を。總てこれが眞であり、また永久に可能であるといふ愉快な確證を與へる——福音を。

カペナウム

イエスは、ガリラヤ人の見すほらしい小さな白い家の人口に起つて、ガリラヤの町々の狭い日陰の辻に出て、或ひはまた湖畔に曳き上げてある船に倚り懸りながら、その足を石の上に載せ、陽の西方に赫々と沈み行く夕暮どきにかけて、人々を懇ひにまで呼び集めながら、彼等を教へた。

多くの人々は彼に耳を傾け、彼に従つた。何故ならルカも云つてゐる通り「その言葉、權威ありたる」に因る。言葉は全然新しいとは云はれないが、人間が新らしく、彼の聲の温か味が新らしくかつた。その心から迸り出て、眞直ぐに他人の心に通ずる、その聲によつて爲された善行が、新らしかつたのだ。それらの言葉の抑揚が新らしかつた。表情の生き生きとしたその口から洩れる言葉の感じが新らしかつたのだ。

此處には人里離れた遠い寂しい荒野の中で、聴きたくば我に來れと他人に強い叫ぶ、山の預言者は居なかつた。此處には一個の人間として他人の間に住む預言者、己が敵まで友とする總ての人々の友達、誰とでも容易に仲好くなれる仲間が居た。家の中や忙がしい街頭に働く者の間に、その兄

弟を探し求め、彼等の食卓で共にパンを食ひ葡萄酒を飲み、漁師の網を曳くの手に手を貸し、哀しみを持つ者にも、病人にも、乞食にも、その他誰にでも善い言葉を語り聞かす預言者が居た。

動物や小兒のやうな無邪氣なものは、衝動的に自分等を愛してくる者を知り、彼を信じ、彼の來る時は幸福に感じ（そのために彼等のその顔が急に變つたりした）、彼の去る時は哀しむ。時には彼の許を去るに忍びず、死を以て彼に従ふ。

イエスは彼等と共に或る場所から他の場所に歩いたり、或ひはその友達の間で座して談じながら時を過ぎした。何時も彼の氣に入つた處は湖の日當りのいい沿岸で、荒野の風に浪立てられる事のない静かな澄んだ水の繞りに沿うて、二三の小舟が音もなく前後に揺れながら、點出されてゐるあたりであつた。湖水の西岸は彼の眞の王國であつた。其處には彼の最初の聴衆、最初の信者、最初の弟子たちを見出した。

ナザレに歸つても、彼は其處に一寸しか居なかつた。彼はその後十二人の弟子たちを伴ひ、奇蹟の評判を先觸れに歸り行くのであつた。さうして彼等はイエスを世界中の諸市が——溫雅を以て聞ゆるアテネやフィレンツエまでが、彼等を他よりも偉くした一部の市民をあしらふやうに遇するものであつた。彼を嘲り笑つた後（彼等は彼を子供として見てゐたので、その彼が大預言者になり得よ

うなどとは、以ての外(ほか)の事であると考へた、彼等は彼を崖(がき)から突き墜(おとし)さうとした。

何處(どこ)の都市(しよ)へ行つても、彼は長く滯(とど)まらなかつた。イエスは放浪者(はうらうしや)であつた。布袋(ぶくろ)つ腹(はら)で腰(こし)に根(ね)の生(は)えたやうに座(ま)りきりの市民(しやみん)から浮浪人(うらうじん)と呼ばれるやうな人であつた。彼の生涯(せいが)は永遠(とわい)の旅(りよ)行(ぎやう)である。自ら(みづか)を殺(ころ)して他のユダヤ人を永遠(とわい)に生(い)かした彼は、眞(まこと)の漂泊(へうはく)のユダヤ人である。懐(ふところ)に在(あ)る赤(あか)坊(ぼう)の時から已(すで)に、彼は日(ひ)に灼(や)け付(つ)く路(みち)をエジプトに運(は)され、エジプトからガリラヤの水(すい)草(そう)の地(ち)に歸(かへ)つて來(き)た。ナザレからは過(あ)越(こ)しの祭(まつ)りのために屢(しばしば)々(しばしば)エルサレムに赴(おもむ)いた。ヨハネの聲(こゑ)は彼(かれ)をヨルダン河(が)に呼(よ)び寄(よ)せた。内(うち)なる聲(こゑ)は彼(かれ)を荒(あ)野(の)に逐(お)ひ出(だ)した。さうした四十日(しじふにち)間の飢(う)餓(が)と誘(い)惑(わく)とに遭(あ)つた後(のち)、彼は町(まち)から町(まち)へ、村(むら)から村(むら)へ、山(やま)から山(やま)へとバレステナを横(よこ)切(き)つて、休(やす)みのない漂(へう)泊(はく)の生活(せいか)を始(は)めた。我(われ)々は最(も)多(た)く彼(かれ)をガリラヤに、コラジンに、カペナウムに、カナに、マグダラに、テベリヤに見(み)出(だ)すけれど、彼は時(とき)にシカルの井(い)戸(こ)の傍(かたわら)に座(ま)すためにサマリヤを越(こ)えて行くこともある。我(われ)々は屢(しばしば)々(しばしば)彼(かれ)を國(こく)守(しゆ)ビロポの領(りやう)分(ぶん)であるベツサイダに、ガダラに、カイザリヤに、またヘロデ・アントニパスの領(りやう)内(ない)ゲラサに見(み)出(だ)す。ユダでは彼は屢(しばしば)々(しばしば)エルサレムから數(すう)マイル離(はな)れたベタニヤ、若(わか)しくはエリコに足(あし)を停(とど)めたが、それと共に老(らう)國(こく)の國(こく)境(けい)を越(こ)へて遠(とほ)く國(こく)外(がい)へ旅(りよ)すること、または異(い)邦(ぱう)人(じん)の間(ま)に入(い)つて行く事(こと)も敢(あ)へて辭(こと)さなかつた。我(われ)々は彼(かれ)をフェニキヤに、ツロとシドンの地方(ちほう)に、

また若(わか)しキリストの變(へん)容(よう)がヘルモン山の頂(たか)きで現(あら)はれるとしたなら、シリヤにも見(み)出(だ)すのである。復活(ふくたつ)の後(のち)、彼はエマオに現(あら)はれて、テベリヤの湖(うみ)畔(ほと)に起(た)ち、終(つひ)にベタニヤなるラザロの家(うち)の近(ちか)くまで行(い)つて、その友(とも)人(じん)たちと永遠(とわい)に訣(わか)れるのだ。

彼は休(やす)みなき旅(たび)人(じん)、家(うち)なき放浪者(はうらうしや)、愛(あい)のための行脚者(あんぎやくしや)、自國(こく)に於(お)ける自發的(じはつてき)の追放者(ついほうしや)である。彼は自ら(みづか)枕(まくら)する石(いし)だになしと云(い)つてゐるが、彼(かれ)が夜(よ)に、寢(ね)る床(とこ)も持(も)たず、また己(おのれ)が部屋(べや)と呼(よ)ぶべき室(むろ)をも持(も)たなかつたのは、本統(ほんとう)の事(こと)である。彼は眞(まこと)の家庭(かてい)はその最初(さいしよ)の友(とも)達(だつ)を携(たづ)へて新(あら)らしい友(とも)達(だつ)を探(たづ)しに出(い)かける道(みち)路(ろ)がそれだ。彼の寢床(ねとこ)は圓(ま)の畝(あな)、舟(ふね)縁(べり)、オリブの樹(こ)蔭(かげ)である。時には彼(かれ)を愛(あい)する人(ひと)の家に眠(ね)ることもあるが、それは極(きま)めて短(みじ)かい時(とき)間(かん)に過ぎ(す)ぎない。

早い頃(ころ)我(われ)々は彼(かれ)を再三再四(さんさんざんしよ)カペナウムに見(み)出(だ)す。彼の旅(たび)は其處(そこ)に始(は)つて其處(そこ)に終(お)つた。マタイはそれを「彼の町」と呼(よ)んでゐる。ダマスコからイツリヤを横(よこ)切(き)つて海岸(かいがん)に向(む)ふ陸(りく)商(しやう)の通(つう)路(ろ)に衝(つ)つてゐるカペナウムは、次第(しだい)に榮(さか)えて幾(いく)分(ぶん)重(じゆう)要(やう)な商(しやう)業(ぎやう)上(じやう)の中心地(ちゆうしんち)に變(か)つて行く。職(しやく)人(じん)、取(と)引(い)人(じん)、仲(な)買(か)、店(みせ)持(もち)などが其處(そこ)に入(い)り込(こ)んで來(き)た。經(けい)濟(ぎ)方(ほう)面(めん)の人間(にんげん)たちも——腐(く)つた梨(なし)に集(あ)まる蠅(は)のやうに其處(そこ)に集(あ)まつて來(き)た。財(ざい)務(む)官(くわん)、收(しゆ)税(ぜい)人(じん)、其(そ)他(た)税(ぜい)官(くわん)の手(て)先(さき)など。半(はん)ば農(のう)村(そん)で半(はん)ば漁(りよ)村(そん)と云(い)つた其(その)の小(こ)さな居(い)留(りよう)地(ち)は、全(ぜん)く當(たう)時(じ)の社(しゃ)會(かい)を——兵(へい)士(し)や娼(せう)婦(ふ)に至(いた)るまで——代(だい)表(ひょう)する混(こん)成(せい)的(てき)、集(じ)團(だん)的(てき)の町(まち)になつた。

けれどまた、湖に沿ふて横たはり、近くの丘から来る風や、水の面を涉つて来る微風に、新鮮な氣持を與へられるカペナウムは、シリヤの諸市やエルサレムのやうに、沈滞と墮落の餌食にはならなかつた。其處には猶ほ、毎日圃へ稼ぎに出る農夫がゐた。毎日沖へ舟を出す漁師もゐた。善良で、貧乏で、無邪氣で、親切氣の多い人たち。彼等はいつても金錢や財産以外の話をした。彼等の間に在つてこそ、人は初めて自由に息を吸ふことが出来るといふものであらう。

安息日にイエスは會堂に行つた。誰れでもが其處に入つて、聲高く讀み上げ、また讀まれたものを説明する權利を持つてゐた。其處は完くがらんどりの空屋で、人々はその友達や兄弟たちと其處に這入り、互ひに論じ合つて、神を夢みる場所であつた。

イエスは起ち上つた。誰かが彼に聖書を巻物にした一卷（多くは律文よりも預言書）を渡す。イエスはそれを二節、三節、四節もしくはそれ以上を靜かな聲で朗讀する。然る後に彼は大胆にして力強い雄辯を振つて話を始める。さうしてパリサイ人を困惑せしめ、罪人に觸れ、貧乏人を惹き付け、女の心を奪ふのである。

忽ちにして古い聖句が變つて、時代に即した明瞭さを持つて来る。それは一つの新しい真理、彼等の成し遂げた一つの發見、初めて聽く議論のやうに思へる。古さに萎び繰返しに枯れ切つた言

葉も、活力を具へ彩色を帯んで来る。新らしい太陽はそれらの言葉を一言また一言、一音また一音と光らす。新鮮な言葉が、思ひ懸けない默示のやうに彼等の眼の前に輝く。

貧しき人々

カペナウムの人々は誰れ一人これまで此のやうなラビを聽いた覺えがなかつた。イエスの話す安息日には、會堂は滿員で群衆が路上にまで溢れ出た。來られるだけの者は悉く其處に集まつた。庭作りが來てゐる。彼は特にその日のために鋤を棄て、圃の青物に水を灌ぐために、水車を廻はすとすら止めて來たのだ。其處にはまた鍛冶屋、村の善い鍛冶屋も來てゐる。彼は毎日烟りと埃とで眞黒になつてゐるが、安息日のために其等を洗ひ落とし、小ざつぱりした着替の姿でやつて來てゐる。尤も顔はまだ少々燻ぶつてゐて、その手と同じく幾ら水で擦つても洗つても落ちないが、それでも髻には櫛を入れ、安い油さへ塗けてゐる（然かしそれは富者の髻のやうに佳い薫りをさせてゐる）。鍛冶屋は汗と埃だらけになつて、朝から晩まで火の前で暮すのだが、この安息日だけは會堂に來て、先祖の神なる上帝の古い言葉を聽くのである。彼は信心から來るのであるが、また一つの

理由には、彼の家族や友達や近所の人々が其處に来て、彼等と一緒に落合へるからでもある。それからまた彼の来るのは、日が永く（仕事もなく、鋤も手にせず、釘抜も持たぬ、日がな一日の休日）で、カペナウムでは安息日には會堂に行くより外に、時間の潰しやうがないからでもある。石工も來てゐる。彼は會堂のこの小さな家を建てるために働いた男で、長老——それは神を畏れる善良な人間だが、どうも吝嗇になりたがる癖がある——が金の懸け惜しみをした爲めに、その家を小さなものに拵へて終つたのだ。石工は六日間の労働からその腕はまだ少々萎え痺れてゐるやうにも思ふが、最早やその週間に彼の順序よく並べた石の事や、または石の間に投げ入れた漆食だらけの鍔の事などを考へてはゐない。今日は新しい着物を着けて、地面の上に腰を下ろしてゐる。これが常なら地面の上に眞直に立つて、仕事の旨く行くやうに、さうして庸ひ主の満足するやうに氣を配りながら、盛んに立ち働く彼なのだが。その善い石工はまた、彼にとつては半ば自分の家のやうに思へる此の家に來てゐるのだ。

漁師も來てゐる。若いのと年寄りと、兩人とも顔が眞赫に日に灼けて、眼は絶えず水に反射する光線の照りつ返して半ば閉ぢたやうになつてゐる。（年寄りの方が美しく見える。何故ならその白い頭髮と白い髭との、日に灼けた皺くちやの顔に對する映りがよいからだ。）漁師は舟を砂濱に覆せ、

また杭に繋ぎつばなしにし、網を屋根の上に擴ろけて、會堂にやつて來たのだ。尤も室内に居つけない彼等にしては、其處に來ても猶ほ軸を撲つ水のごみくした音が、耳について離れないかも知れないけれど。

近所の田舎の農夫たちも矢張り此處に來てゐる。彼等は仕合せな百姓たちと見えて、誰が着ても恥かしくない上衣をつけ、已に鎌の入るばかりの收穫に満足してゐる。彼等は頭に穀物を生らせ胸に葡萄の樹を作る神を忘れてはゐないのだ。その朝、町へ入つて來る羊飼ひがある。家畜の臭ひの體からまだ脱けやらぬ羊飼ひや山羊飼ひたち。人の子一人見ず、一つの言葉を交すでもなく、ただそのおとなしい動物と共に、平和に新らしい草を眺めながら、一週間を山の牧場に暮らして來た羊飼ひたちが。

僅かな財産を持つた者、小さな實業家、カペナウムの中産階級の人々なども、皆なやつて來た。彼等は眞面目臭つた顔をして、その眼を墜としながら前列に起つ。多分最近何週間かの仕事に満足してゐるのであらう。また律を完全に守り、その汚されてないのを見て、良心に満足を覺えてゐるのだらう。彼等の美裝した背中が列んで見える。首は下けてゐるが、肩幅の廣い、がつしりした背中、庸ひ主の背中、俗事にもまた神とも調和する人たちの背中、權威と宗教とに満ちた背中が。

稀れにはシリヤへ行つたり或ひはテベリヤから歸つて来る外國人や商人などの居ることもある。彼等はわざと自分たちを卑下するか、然もなければ習慣的に來てゐるのだ。おほかた得意でも取らうといふのであらう。さうして彼等は、金錢が貧乏に裏れた人間に與へる尊大さをもつて、誰でも顔を覗き込む。

室の後方には（その會堂は學校よりも宿屋よりも料理場よりも少し大きな、一棟の細長い野呂塗りの室だから）田舎の貧乏人が戸口の近所に犬のやうに押し合つてゐる、いつ何時逐出されるかも知れないのを懼れる人たちのやうに。彼等はやくざな仕事を頼りに、ありがたくもないお情けと、それからまた——おお貧乏！ゆるぎに——用心深い盗みとで生きてゐる、あらゆる人間の中で最も情けない人たちなのだ。縋縋を纏つた者、悪い蟲に憑かれた人間、臆病者や無頼漢なのだ。子供と遠く離れてゐる年とつた寡婦、まだ生活の資力を獲ることの出来ない年若かの孤兒、寄る邊のない傭の老人、氣力の失せた病人、不治の病ひに患む人たち、才智も何も最早や役立たなくなつて終つて、理解も持たなければ働く事も出来ない人たちなのだ。心の弱い人々、躰の弱い人間、破産者、世間の屑、棄てられ者なのだ。一日は食ひ、翌日は食はぬ人たち、何時だつて飢ゑを満たしたことがない人たち、他人の棄てるものならパンの破片でも、魚の頭でも、果物の核や皮でも拾ひ上げる

人たちなのだ。また今は此處に寝、次ぎは彼處に臥し、冬の寒さに惱みながら、毎年、夏の來るのを待つてゐる人たちなのだ。夏は貧乏人の樂園で、その頃になると路傍から果物を抱き取つて食ふことも出来るからだ。かれら乞食、卑劣者、無頼漢、病患者、弱蟲などもまた、安息日が來ると會堂へ聖書の話を聞きに出懸ける。彼等は決して逐ひ拂はるべきでない。何人とも同じく其處に列席する權利をもつてゐる、同じ父の子でありまた同じ主の僕なのだ。その日に限つて彼等は貧乏の中にも幾らか慰めを感じる。何故なら富者や強者の聽く言葉を、彼等も同じやうに聽けるからだ。此處では彼等は丁度、一家の主人が最後の美食を攝つてゐる時に、門口に立つ乞食が屑で以て満足しなければならぬ目に遭ふやうな、他人と違つた貧弱で不味い食物を宛てがはれる氣遣ひがない。此處では欺待が持てる者にも持たぬ者にも同じである。モーセの言葉は過越しの祭りに最も膏のかかつた家畜を持つ者にも又は小羊の足だけしか持たぬ者にも同じ事である。永久に同じである。けれども預言者たちの言葉は、彼等にはモーセの言葉より快く聞える。世間の偉い人たちには一層徹しく聞えるが、謙讓な者には一層親切に響くのである。貧乏裏れのした連中が會堂の裏手に押し寄せ、毎安息日、誰かがアモスの書またはイザヤ書の一章を讀むのを待ち構へる。それは預言者の書が貧乏人の肩を持つて、刑罰と新らしい世界とを宣言してゐるからだ。紫の衣を着けたるは、肥料

を汲むに至るべし。」

然かも視よ、その安息日には、特に彼等のために来て、彼等のために話した人がゐた。荒野から歸つて来て、貧乏人や病人のために福音を傳へた人がゐたのである。誰れ一人これまで彼等に就いて彼のやうに話した人は無かつた。誰れ一人彼等のためにそれ程の愛を示した者は無かつた。昔の預言者のやうに、彼は人々のために特別の愛情をもつてゐた。そのためにより幸福な人間たちを怒らせもしたけれども、一般人の心には十分慰めと望みとを與へた。

イエスが話し終つたとき、長老、有産階級者、主人、地主、パリサイ人等の、讀書も出來、殖財の方法も知つてゐる人たちが、豫感的にその頭を振り、浮かぬ顔をし乍ら、半ば侮蔑的に半ば腹立たしげに、互ひに背首き合ふのが、人々の眼に留つた。さうして彼等は表に出るや否や、その重々しい胡麻鬚の口から、抜目のない抗議の私語を呟いた。けれど誰れ一人笑ふ者とはなかつた。

商人たちも既に明日の事を考へながら、起ち上つて、彼等に續いて外へ出る。後に残るものは労働者、貧乏人、羊飼ひ、百姓、植木屋、鍛冶工、漁師、乞食の群、遺産を持たぬ孤兒、健康を持たぬ老人、家のない追放者、友達のない不幸者、錢のない人間、病人、不具者、倦み疲れた者、排斥された者等である。彼等はその眼をイエスから離すことが出來なかつたであらう。イエスに語り續

けて貰つて、新らしい國の時代を實現しようとして欲したのであらう。彼等もまた現在の見じめさに引換へて、報いの來らんことを望み、その報いの日を眼の當りに視ようと欲したのであらう。イエスの言葉は彼等の傷き弱つた心臓の鼓動を速めた。一道の光り、空と榮光との一瞥、繁榮、宴會、休息と餘裕との幻覺が、これらの偉大な言葉から、貧乏人の豊かな靈に全湧した。彼等は恐らく教師の言ふ意味を少しも理解しなかつたであらう。彼等によつて垣間見られた國といふのも、恐らくは何程か物質的な奢侈逸樂の國に似寄りのものであつたかも知れない。然しながらイエスを彼等ほど愛した者はなかつた。また平和と眞理とにあこがれるガリラヤの貧乏人ほど、彼を愛する者は何時になつても有るまい。それほど貧乏でない人たち、即ち日傭ひの労働者や漁師や職人たちでさへ、パンに飢ゑることが少いにも繋はらず、イエスがこれらの貧乏人を愛する故を以て彼を愛したのである。

イエスの會堂から出て來るとき、これらの人々は皆、もう一度彼を見ようと途に起つて待ち受けた。彼等は夢みるやうな心持でおづおづ彼に就き従つて行つた。彼が食事のために或る友人の家に入つたとき、彼等は殆んど嫉妬心さへ感じた、さうして或る者は彼の出て來るまで、戸の外に待つてゐた。それから追々大膽になつた彼等は、イエスに話し掛け、共々傍らにくつついて、湖畔まで出かけた。他の人々も途中から彼等に加はり、今は一人、次ぎはもう一人と（彼等は會堂を出て蒼

空の下に立つと急に勇敢になつた。次々に質問をはじめた。さうしてイエスは踏み止まつて此の得體の知れない群衆に、決して忘れることの出来ない言葉を以て答へた。

初めの四人

カペナウムの漁師の中に、イエスはその最初の四人の弟子たちを見出した。殆んど毎日彼は湖水の畔りに出た。時には幾艘もの舟が出て行き、また時にはそれらが帆を風に孕ませながら入つて来る。船からは洗足の人々が下り立つて、膝頭まで水に浸け乍ら、濡れて銀色に輝く死んだ魚を善いのも悪いのも一緒に一杯積込んだ籃と、滴の垂れる古々しい網とを携へてやつて来る。

彼等はまた時には月のある日暮に出かけて、翌朝早く、丁度月の入り日の出る前に歸つて来ることもある。イエスは屢々岸に彼等を待ち受けて、彼等に挨拶する最初の人となつた。けれども漁はいつも大漁と限らぬ。彼等も時には空手で、疲れ切つて、氣を落しながら歸つて来ることもある。イエスは彼等に言葉を掛けて氣を勵ました。而かも失望した人々は、たとへ眠りを取つてゐなくても、欣んで彼の言葉を聴くのである。或る朝、イエスが湖畔に起つて、その周圍に集つた人々に話

をしてゐるとき、カペナウムから二艘の舟が歸つて来た。船から下りた漁師たちは網を繕ひはじめた。イエスはその中の一艘の舟に打乗つて、群衆に押されまいたため陸から少し舟を出してくるやう、漁師たちに頼んだ。楷子段の近くに眞直ぐに立ち上つて、彼は陸に残つた人々を教へた、さうして話し終つたとき、彼はシモンに向つて言つた。「深處に乗りいだし、網を下して漁れ。」

そのとき舟の持主なるヨナの子シモンが答へた。「君よ、我等よもすがら勞したるに何をも獲ざりき。されど御言葉に隨ひて網を下さん。」

彼等が岸からまだ一寸しか行かないうちに、シモンとその兄弟のアンデレとは水の中に大きな網を打つた。曳き上げてみると魚が一杯で網が裂けかけてゐた。で、二人の兄弟は他の舟にゐる仲間を呼び、彼等にも手傳はさしてもう一度網を打つたところ、それもまた曳き上げてみたら一杯だつた。シモン、アンデレ、その他の連中は「奇蹟だ！」と云つて、彼等に幸運をもたらしたイエスに感謝した。感激性に富んだシモンは、彼等の客なるイエスの膝下にひれ伏して叫んだ。「主よ、我を去りたまへ。我は罪ある者なり。」

けれどイエスは笑つて云つた。「我に従ひきたれ。さらば汝等を人を漁る者となさん。」

岸に歸つてから彼等は舟を陸に曳き上げ、兩人の兄弟は網を棄ててイエスに従つた。この後ち數

日を経てイエスは、ゼベタイの子で、シモンとアンデレの仲間なる、他の兩人の兄弟ヤコブとヨハネとに逢つた。さうして彼等もまた、水夫等と共に舟に乗り込んでゐたその父に訣れを告げ、破れた網を半分繕つたままイエスに従つた。イエスは最早や單獨ではなかつた。この共通の信仰に於て一層親密な間柄になり得た四人二組の兄弟たちが今や彼に就き従つて、彼の往かんと欲する所に往き、彼と共にパンを割き、彼の言葉を繰返し、父の如く又寧ろそれ以上に彼に順はうとしてゐた。四人の貧しい漁師たち、四人の撲訥な湖上生活者、讀むことは勿論、完全に話す事すらも知らない人々、誰の眼にも他の人と違つた所の見出せない四人の賤しい人間が、イエスに召されて彼と共に全世界を占むべき王國を建設することになつた。彼のために彼等は、幾度か水に漕ぎ出し幾度か埠頭に繋いで來た所の忠實な舟を棄て、水から何萬匹といふ魚を捕つた古い網を残し、その父、その家族、その家庭をも見捨てた。金銭も土地も約束せず、ただ愛を説き貧乏と完成とを説いた此の人間に従ふために、彼等はそれらの一切を棄てたのだ。斯くて縦しんば彼等の精神が、その師を理解するのにも何時も餘りに低調に過ぎ、いつも少し粗雑過ぎ平凡過ぎたにもせよ、また時にはその眞理と譬へに疑ひを起して、確信を持たず、完全に理解し得ないで、終ひには彼を見棄てたにもせよ、凡てこれらの事は初めて召されて何の疑ひも懸けず、率直、敏活に彼に従つた彼等にとつて、十分許

さるべきであらう。

今日我々の間に於て、現在生きてゐる凡ての人々の間に於て、誰がこれら四人のカペナウムの貧しい人たちの眞似が出来るだらう。若し一人の預言者が出て來て、次ぎのやうな事を言つたとしたら、即ち商人には「汝らの銀行と汝らの會計とを棄てよ。」と、また教授には「汝らの椅子より下りて汝らの書物を投げ出せ。」と、また政治家には「人を捕ふる網の用のみをなす汝らの職責と汝らの虚偽とを捨て去れ。」と、また労働者には「汝らの道具を置け、さらば我なんぢらに他の仕事を與へん。」と、また農夫には「畝の中途にて止め、汝らの鋤を土塊の間に棄てよ。そは我汝らに一層驚くべき收穫を契ふべければなり。」と、また機械工には「汝らの機械を停めて我に來れ。そは人間の精神、金屬より貴重なるが故なり。」と、また富者には「汝らの持ち物を悉く棄て去れ。さらば汝ら我と共に計りがたき財寶を得ん。」と。……若し或る預言者が我々現代人に向つてこんな風に語るものとしたなら、一體どれだけの人間が昔のこれらの漁師のやうな無邪氣な自發的の意志を以て彼に従ふことであらう？ 然し乍らイエスは、町の廣場や店の中で商ひをしてゐる商人らとか、または律の瑣末な規定を克明に守つて、聖書の各節を暗誦することの出来るやうな人たちとか、土地や家畜に根を張つた農夫らとかに向つては、何の暗示も與へなかつた。つまり裕かな者、飽滿な者、満足

な者は勧誘しなかつたのである。何故なら彼等は已にその國が實現されたものとして、他のどんな國に就いても顧りみようとしなかつたからである。

イエスがその最初の侶を漁師たちの間から選んだといふことは、偶然事ではなかつた。一日の大部分を全く寂しい水上で暮らす漁師は、待つことを知る人間である。彼はその網を投げ下して餘は神に委せる忍耐強い辛棒氣な人間だ。水は移り氣のもので、湖は氣まぐれなものだ。一日だつて他の日と同じなことがない。彼は果して舟を一杯にして歸れるものか、それとも又食事に煮くべき一匹の魚すら獲ずに歸るか、出先の事は何事も判らないのだ。彼はその身を神の手に委ねて、神の與へる飽滿と飢餓とを待つのみである。運の悪い日には、曾てあつたさうして復た來ん幸運の日を憶うて自らを慰める。彼は急に富もうとは希はない。漁つて來たところのものを僅かのパンと葡萄酒とに替へることが出来ればそれで満足する。彼は魂も肉體も純潔だ。その手を水で洗ひ、その精神を幽寂で洗ふのだ。

カペナウムの片隅で近所の人以外には誰にも知られずに死んでしまふ此等の漁師たちから、イエスは人々が今日でも猶ほ憶ひ出しては扶けを求めるところの聖徒を作つた。偉大な人間は大きな人物を創るものだ。睡とほけた人民から預言者を擧げ、虛弱な人民から勇士を出し、無知な人民から教師を産む。火の點け手さへあれば、どんな天氣でも火は燃くものだ。ダビデが現はれると、彼は直ちに護衛兵を見出し、アガメンノンは英雄を、アーサーは武士を、シャルルマーンは騎士を、ナボレオンは將軍を見出す。イエスはガリラヤ人の間からその使徒を見出した。

イエスは武装した戦士、敵を降伏せしめる人間、地方の征服者などを求めなかつた。彼の使徒たちも戦はなければならなかつた。けれどもそれは墮落に對する完成の、罪惡に對する神聖の、病患に對する健康の、物質に對する精神の、過去に對する幸福な將來の激しい戦ひであつた。従つて難戦でもあつた。彼等はイエスを扶けて、彼の欣ばしい使命を陰鬱な人間に贈らなければならなかつた。彼等はイエスの行けなかつた處では彼の名に於て話し、またその死後、彼の名に於てその仕事を續けなければならなかつた。

山

山上の垂訓は、人間が永遠の宇宙に存在する權利を持つ、その權利の最も大きな證明である。それは我々の満足な釋明だ。我々の魂の價値を示す特權、我々が自ら向上して人間以上のものになれ

るといふ保證、さうした最高可能性の誓約、我々の職以上に向して行く希望なのだ。

もし天使が天界から我々の許に降つて来て、我々の最も貴重な所有物は何か、其力の最高潮時に於ける人間精神の傑作は何かと問ふならば、我々はそれらが物質的の過剰な必要に役立つ事物に過ぎぬにも繋はらず我々の莫迦らしく誇るところの、あの油を注した大きな驚くべき機械を彼に示すやうな事はしないだらう。けれど我々は彼に山上の垂訓を捧げ、さうして然る後、あらゆる國民のもつ詩人から萃めた數百ページの詩を捧げるだらう。然し乍らその垂訓は、何時も純粹な光りの透明な輝きを以て、エメラルドやサファイヤーの色づけられた美しい光澤を曇らす、一箇の燦爛たるダイヤモンドにも比すべきであらう。

もし人間が超人の法廷に呼び出されて、一切の解きがたい誤解や、毎日繰返される昔ながらの破廉恥や、千年間も續いてゐる虐殺や、兄弟間に於ける一切の流血事や、人の子に流された一切の涙や、我々の心の剛愎なことや、恐らくは唯我々の愚鈍にだけ匹敵するであらうところの我々の背徳行爲などに就いて、裁判官に釋明を與へなければならぬとしたら、我々はこの法廷の前に、幾ら博學を以て巧みに組織されてゐるやうとも哲學の理論を持ち出したり、また符號と方劑との一時的の組織を立てに過ぎない科學や、或ひはまた浮世と驚怖との眼先きの見えぬ妥協である法律などを持ち出す

べきであるまい。これほど多くの罪惡に對する還付として、頑迷にも債務の支拂ひを遅らした償ひとして、六千年間に亘る忌はしい歴史の謝罪として、これら一切の罪名を軽くする唯一最高の手段として、我々の示すべき唯一つのは山上の垂訓である。たとへ一度でもそれを讀んで、少くともそれを讀んだ瞬間に、爽快な柔味の戰慄を、涙にむせぶ咽喉の疼みを、愛情と悔恨との激動を、混亂は伴ふけれども實行しようとする熱意を、感じない者が何處に在らう？——随つてこれらの言葉は、單なる言葉ではない。この説教もまた單なる音や記號ではない。それどころか其等は逼迫した希望であり、現在生くる凡ての人々の中に生きて働く生命であり、また恒に萬人のために示された真理であらねばならぬ。唯一度でもそれを讀んで、以上の事を感じなかつた人は、他の人々以上に我々の愛を受ける必要のある人間だ。何故なら人間の凡ての愛を以てしても、決して彼の失つたものを回復してやることが出来ないからである。

イエスの訓へを垂れたといふ山の、サタンが彼に地上の諸々の國を示した山ほど高くなかつたことは、慥かだ。それによつて諸君はただ、日没の美しい光りに照らされた、靜かな平原——一方には銀碧に光る橢圓形の湖水を控へ、また一方はエリヤがバルの厨僕共を打破つたカルメルの長嶺を望む——を想像し得るだけだらう。然るに編年史家の誇張がそれを山と名づけてしまつたのである

が、イエスは此の貧弱な山から、平地から幾らも高くない此の小さな巖丘から、境界も分限もない王國を示し、エホバのやうに石板の上でなく、肉と血との心に、新人の歌を、頌め讃への歌を録したのであつた。

「よろこびの音づれをつたへ、平和をつけたまふものの足は、山の上にありて如何に美るはしきかな！」預言者イザヤは山に在つて、これらの言葉が彼の魂から迸し出る時ほど、彼にそぐうた時は無かつた。

幸福なるかな、貧しき者

イエスは最初の弟子たちの中央に加はつて、小さな丘の上にとつた。そのとき彼の眼を看守る幾百かの眼が彼を取巻いた。さうして其の中の誰かが、彼のこれまで幾度も話して来たこの天國は、一體、誰に向つて分配されるものかを訊ねた。イエスは九つの祝福の辭を以て答へた。

これらの祝福の辭は、今もつて猶ほ多くの人々にしばしば熟讀誦味されてゐるが、彼等はすでに意味を失ひ、誤り、毀ち、傷け、安くし、歪めてゐる。然かしそれにも繋はらず、それらの祝福は

キリストが教訓の第一日目を、その榮えある日を、簡潔に語るところのものである。

「幸福なるかな、心の貧しき者。天國はその人のものなり。」ルカはそれを單に「貧乏人」を意味する以外に何の意味もないことと思つて、「心の」といふ言葉を除いてゐる。以來、多くの人々が（その中には現代の意地の悪い人間も含まれてゐる）、それを無邪氣な人間、愚鈍な人間と解して來てゐる。彼等はその言葉を、破産者か魯鈍者か、いづれか以外に意味のないものだと思つてゐる。

イエスの語つた時、彼はその第一のも第二のも、どちらの意味をも考へてゐなかつたのだ。イエスは富者に友達が無かつた、さうして彼は富に對する貪慾を、本統に魂を富ます上の其の大きな妨げを心から嫌つてゐたのである。イエスは貧乏人と親しくして彼等を慰めた。それは彼等が他の人よりも慰めを持たなかつたからである。彼はまた貧乏人を己が身邊に引き寄せた。それは彼等が他の人々以上に優しい言葉を以て養はれる必要があつたからだ。然し乍ら彼は、貧乏であること、その言葉の世俗的な意味に於て、何等他の附帶條件もなく、物質的に貧乏することが、天國を樂しむ十分の資格であると考へるほど、馬鹿ではなかつた。

イエスは決して知力を稱賛するやうな暗示を與へた事が無かつた。知力とはこの場合單に抽象的の知識と辭句の記憶を云ふのである。純系統的の哲學者や、形而上學の詭辯家、自然の探索者、本

食ひ蟲などは、必らずイエスの眼に見出したことが無かつたに違ひない。然しながら知力すなはち未來の暗示と象徴の意義を理解する力——聰明な豫感的の知力、眞理を愛し、それをしつかりと掴み奪ふこと——は、イエスの眼にもまた一つの天稟と見做された。それ故彼は幾度か、その聽衆およびその弟子たちの、この力を缺いてゐることを歎いた。彼にとつては、知力だけでは十分でなく、幸福を獲るためには魂を悉く變へなければならなかつた。それを實現することが即ち最高の知力であつた。何故なら幸福は痴人の夢ではなくて、永遠に可能性を持つた現實だからである。それにしても彼は、この完き更改を行ふために知力が、我々を扶けねばならぬといふことを十分悟つてゐた。彼はそれ故神の國を満たすために愚人や鈍物を呼ぶことが出来なかつたのであらう。心の貧しき者とは、彼等自身の貧しさを、彼等自身の靈の缺點だらけなことを、我々の凡てが持つ善の少さ加減を、大多數の人間の寡徳を十分に覺り、それを惱む人々を云ふのだ。自分等の本當に貧しいことを實感する貧乏人だけが、貧乏に惱む、さうしてそれに惱めばこそ、それから逃れようとするのだ。これに反して、見掛けの立派な人々や、盲目的な傲慢な獨りよがりの人々は、彼等自身を神とも人とも仲の善い完全無缺な者のやうに信じ、彼等がすでに高い處に在るといふ考へで自らを瞞着してゐるが故に、なんら向上的の熱意を感じることもなく、自分等の底知れぬ貧しさを感ぜ

ないために、毫も己れを富ましめようといふ意志のない人々である。

この故に、彼等自身の貧しさを告白して、完成といふ本當の富みを獲得するために、苦惱を堪え忍ぶ人々は、神の聖いほど聖くなるだらう、さうして天國は彼等のものとなるであらう。けれども一方、自己満足に醜り付いて、彼等の虚誇の下に堆積され陰蔽された醜さを顧りみない人々は、天國に入れないだらう。

幸福なるかな、柔和なるもの、

その人は地を嗣がん

此處に約束された地とは、字義通り土地の圃を指すのでもなければ、また都市の築かれてある國を謂ふのでもない。メシヤの言葉で「地を嗣ぐ」といふのは、新しい國を頒け與へられることを謂ふのだ。地上の領土のために戦ふ兵卒は獐狂であらねばならぬ。けれども、新らしい地と天とを征服するため、己れ自らの衷に戦ふ者は、惡の助言者なる怒りや、または愛の反對の殘忍に、その身を委ねてはならない。惡人輩と親しく附合つて——それは中々堪えがたいものではあるが——そ

れに堪え得る人々や、物事が悪く行つても理性を缺いた憤りを發せず、靜かに忍耐強く衷なる敵を
征服して行く人々は、柔和な人々である。さうしてこれは無益な激怒よりもより以上に精神の力を
必要とする。柔和な者は水の如きものである。觸るるに堅からず、他の器物に従ふやうに見せかけ
て、その實、靜かに起ち、靜かに攻め、持久幾年かにして、あの最も堅い花崗石をも、靜かに磨り
滅らして行くのである。

幸福なるかな、悲しむ者

幸福なるかな、悲しむ者。その人は慰められん。窘しみ惱む者、泣き悲しむ者、自分等のために
は忌はしさを、世界のためには憐れみを感じる人々、毎日の生活を忘れて詰らなく送らない人々、
自分等の不幸と兄弟等のそれとを悲しむ人々、失敗を、光りの勝利を遅らす盲目を愁しむ人々――
何故なら人間の光りのは、彼等自身の眼がそれを反射しなければ、天から來ることの出來ない
ものだから――幾度も幾度も夢みられ、千度も約束され、而かも我々の過失と萬人の過失とのため
に、何時までも遠方に在る、正義の遠さを悲しむ人々、復讐によつて悪を増す代りに、自分等の受

けた怒りを愁しむ人々、彼等の爲した惡に就いて、彼等の爲すべくして爲さなかつた善に就いて泣
き悲しむ人々、眼に見える財寶の損失を氣に懸けず、眼に見えぬ財寶のために働く人々、此等の悲
しむ者は、彼等の涙を以て美はしい日の來るのを急ぎつつあるのだ、さうして彼等は當然、何時か
慰められるであらう。

幸福なるかな、義に飢ゑ渴く者、

その人は飽くことを得ん

イエスの謂ふ正義とは、人間の正義、すなはち人間の律に従順なこと、道徳に遵ふこと、人間の
慣習と既定の動作とを尊敬することではない。詩篇の作者、預言者、聖徒たちの言葉によれば、正
しき者とは神の意に従つて生きる人を云ふ。何故なら神は凡ての完成の最高模範だからである。學
者たちによつて聖書の中に記録され、ユダヤ律の胡魔化しによつて薄らけられ、パリサイ人の精巧
によつて呆やかされた律に據らず、イエスが一つの誠に縮めてゐる唯一條の簡單な律に従つて、
「遠きも近きも一切の人間を愛せ、汝の同胞をも外國人をも、他人をも仇敵をも。」この正義に飢ゑ

渴く者こそ、天國に入れらるべきである。たとへ彼等が凡ての事に完全であることが出来なくともその永い謹慎を堪え忍ぶ事によつて、多くの責が許されるだらう。

幸福なるかな、憐憫ある者、

その人は憐憫を得ん

愛する者は愛され、助ける者は助けられやう。報復の律は悪には無効だけれども、善には何時も有効である。我々は心に對して絶えず罪を犯してゐるが、それらの罪は我々が自分等に對して犯された罪を許す時だけ、我々を許してくれるだらう。キリストはあらゆる人間の中に居る、さうして他に向つて爲ることは、我々に向つて爲もされるだらう。「わが兄弟なる此等のいと小き者の一人に爲したるは、即ち我に爲したるなり。」もし我々が他人に憐れみをかけるならば、自分等も憐れみを受けらるだらう、神は我々が自分たちに向つて爲る悪をも許す、ただ、我々が他人から爲れる悪を許さへすれば。

幸福なるかな、心の清き者、

その人は神を見ん

心の清き者とは、完成以外に何事も望まぬ人、我々を四方八方から追ひ詰める悪に對して打克つこと以外に、何の喜びも持たぬ人を云ふ。その心を激しい欲望で、世間的の野心で、世俗的の矜持で、地上のこの蟻垤を騒がす總ての慾望で詰め込んでゐる人は、決して神と面を合はすことが出来ない。必らず神の宏大な幸福の樂しさを知らずに終らう。

幸福なるかな、平和ならしむる者、

その人は神の子と稱へられん

これらの平和主義者は祝福の辭の第二番目にある柔和なる者とは違ふ。柔和なる者は惡に報いるに惡を以てすることを避ける。平和主義者はそれ以上に出でて、惡に報いるに善を以てする。彼等

は戦争の燃え上つてゐる處に平和を持ち來らす。イエスは彼が平和をもたらしただけでなく、戦ひをもたらしだすために來たのだと言つたが、それは惡に對し、サタンに對し、世の中に對する戦ひ、不正なる惡に對し、死に外ならぬサタンに對し、永久の闘ひなる世の中に對する戦ひを意味するのだ。約言すれば、戦ひに對する戦ひの意である。平和主義者とは、戦ひの上に戦ひを賭け、和解の勞を執り、平和をもたらし人々を云ふ。あらゆる戦争の原因は利己心から出てゐる。それは富みを愛する心となり、所有を誇る心となり、富貴者に對する嫉みとなり、競争者に對する憎みとなる。然るに新らしい律は、己れを憎み、限りある財産を盡み、總ての人間を、たとへ自分等を憎む者までをも、愛するやうに教へてゐる。この愛を説き且つ實行する平和主義者たちは、すべての戦ひを根柢から根絶しにしてしまふ。あらゆる人間が己れ以上にその兄弟を愛するならば、人と人との間に、階級と階級との間に、國民と國民との間には、最早や大小雜多の、内亂もしくは皇國のための、言葉もしくは打擲の戦ひが、起らなくなるだらう。平和主義者たちは世の中を征服してしまつて、眞に神の子と呼ばれ、神の國に入る最初の人々に伍して、彼等もまた其處に入るであらう。

14. 12. 29

幸福なるかな、義のために責められ

たる者、天國はその人のものなり

我はこの國すなはち天國を建てんがために、汝等を送り出すのである。其處には愛といふより高い正義が住み、神と呼ぶ父徳が其處を支配してゐる。我はその故に、汝等を不正を支持する者、物質主義の奴隸、惡魔への變節者たちと戦はしめんがために、送り出すのである。彼等は攻められるば自ら衛るだらう、さうして自らを衛るために汝等を攻めるだらう。汝等は肉體の苦しみを受け、精神を釘付けにされ、自由も時には命さへも奪はれるだらう。然しながら汝等が、その汝等を苦しめる正義を他人に傳へるために、欣んで此の苦しみを受けるならば、この迫害は汝等のために、汝等の力の及ばん限りその建設に努力した天國に入るべき、確實なる資格となるであらう。

我がために人、汝らを罵り、また責め、詐りて

様々の悪しきことを言ふ時は、汝ら幸福なり、

喜び喜べ、天にて汝らの報いは大なり、汝らよ
り前にありし預言者らをも、かく責めたりき

迫害とは肉體上、法律上、また政治上の手段を以て行はれる物質的の攻撃を云ふ。迫害者は汝らのパンをも、太陽の明るい光をも、神聖なる自由をも奪ひ取ることが出来る。彼等は汝らの骨を碎くかも知れない、けれども汝らはその單なる迫害以上に堪え忍ばなければならない。汝らは侮辱と誹謗とを覺悟しなければならぬ。彼等は汝らを非難するであらう。それは汝らが獸のやうな人間を聖者に變へようとするからだ。野獸性の汚穢の中に轉輾としてゐる彼等は、その不汚から免れようとする思想を憎む。然し、彼等は汝らの肉體だけを撲つて満足する者ではなく、汝らの精神をも撲つてであらう。あらゆる罪を作つて汝らを責め、悪口と辱しめとを加へて汝らに石を擲つてであらう。豚は汝らを不潔だと云ひ、驢馬は汝らを愚物だと罵しり、鴉は腐肉を食ふとて汝らを責め、牡羊は悪臭を放つとて汝らを斥け、放蕩者は汝らの墮落を惡しざまに言ひ觸らし、泥棒は竊盜罪として汝らを告訴するだらう。然し乍ら汝らは恒に喜ぶべきである、何故なら惡人から侮辱されることは、

汝ら自身の徳を獻けることであり、不純な者に擲け付けられる泥は、汝らの純潔を保證するものだからである。聖フランシスが謂ふところの「完き喜び」は即ちこれだ。己れに克ち、傷害、汚名、苦痛、不快等を喜んで堪え忍ぶ美質は、キリストがその友達に與へた凡ての美しい特質にも優るところのものである。その他の神の天稟は一切、我々の誇るべきものでない、何故なら其等は我等に我々から來ず神から來るが故である。けれども災難と苦惱とだけに就いては、我々は誇ることが出来る。それは我々のものだからである。これまで地上で話して來た總ての預言者たちは人々から侮辱された、さうして人々は來るべき預言者たちをも侮辱するだらう。泥を塗られも、辱しめを浴びても、彼等は明るい顔をし乍ら人々の間を通り、心に在ることを話す。これに由つて我々は、預言者を認めることが出来るのだ。いくら泥を塗つても、話さねばならぬ者の唇をふさぐことは出來ない。たとへ強情な預言者を殺すとしても、彼を沈黙さすことは出來ない。その死の反響によつて増加する彼の聲は、あらゆる國語、あらゆる時代を通じて聞ゆることであらう。

この約束を以て祝福の辭が終つてゐる。

この祝福の辭によつて、キリストは誰が彼の新しい國の市民たるに適合してゐるかを十分に説明してゐる。それらの市民は、此の時以來、見出されて十字架の標しを附けられてゐる。誰でもが彼

等の特性を認めることが出来る。厭がる者は警しめられ、確信のない者は勵まされる。富める者、傲慢な者、満足する者、癡癡性の者、不正な者、戦ひを好む者、嘲ける者、完成にあこがれぬ者、迫害を加へ憤りを發する者などは、決して天國に入ることが出来ない。彼等は全く自分に打克つてその性質を變へ、今と全く正反對の者になるのでなければ、其處に入ることが出来ないのである。世間的に幸福に暮らしてゐる人々、世間が羨やみ、摸倣し、稱賛する人々は、世間が罵り憎む人々に較べて、眞の幸福から絶對に遠い處に置かれてあるのだ。この欣ばしい説教の門出に於て、イエスは人間の階級組織を轉覆してしまつた。今や彼は尙ほ進んで、人生の價値をも覆へさうとしてゐるのであるが、凡そ世の中に彼の再評價ほど靈妙な逆説的のものは他にあるまい。

靈妙な逆説

虚勢された赤脚仙たちや憂鬱な人間たちの或る卑怯な一派は——彼等は生眞面目な人間で、事實の明白なことだけは判るのだが、それらの事實を解くことが出来ずに、其等を捏ね廻して反つて事實を傾ねてしまふ人々である——これまで始終、逆説的といはれるものを敬視して來た。神聖な

逆説と單なる娛樂のためのそれとを區別する繁雜を避けるために、彼等は手つ取り早く、何でも彼でも古い眞理を覆へすものでさへあれば、皆それが逆説であると判斷してしまふ。この故にそれらは嘘つばつちの——それにまた彼等が人の虚勢を殺ぐために餘計な事をするので——まるで出鱈目なものになつてしまふ。人は想ふであらう、彼等にとつては已に敷かれてある道を歩いたり、または慥かに彼等のやうに卑怯な稟質を持合せない人々によつて彼等の生まれる前から書かれてゐたものを字句通り讀んだりすることは、普通の人より一層むづかしい事であらうと。

然しながら、若し上述の僧侶たちが、現代の思想のそれによつて生きてゐると云ふよりは、寧ろそれによつて死にかけてゐるところの二三の大思想を省りみるならば、彼等はそれらがすべて轉覆であり、謂ふところの逆説であることを發見するであらう。ルッソーが人はもと善に生まれ付いたものだが、社會がそれを悪くするのだと言へば、彼はそれによつて從來認められてきた罪惡説を内側から覆へすことになる。これと同様に、進歩説の學徒はより悪いものからより善いものの現はれることを確言し、進化論者は複雑が單純から生れることを是認してゐる。また一元論者は總ての差別相が一元の現はれに過ぎぬことを主張し、マルクス論者は經濟史觀が精神的發展の基礎であることとを論じてゐる。若しそれ現代の數理學的哲學者が、人間は會て信じられたやうに宇宙の中心を形

づくるものでなく、無窮の中に撒在する無数の球状體の一つに住む下らない動物の一種だと確言する場合、キリスト教の新教徒が、「ローマ法王などは問題でない、聖書さへあれば澤山だ」と呼ぶ場合、フランスの革命家たちが「第三帝國は何でもないが、我々にとつてはそれが萬事である」と言ふ場合、これら總ての人々は、昔から普遍的に保障されて來た説を覆へす以外に、何を爲て來てると云ふのか？

けれどもイエスは最も偉大なる轉覆者であり、急進的なさうして懼れを知らぬ最高の逆説製造家である。これこそ彼の偉大さであり、彼の永久に澄澗たる若々さであり、また早晚あらゆる大きな心を彼の福音に牽きつける秘訣でもある。

彼は誤ちと惡との中に沈んだ人間の心氣を更へるために生れ變つて來たのである。彼は已に世の中の誤ちと惡とを見出した。その彼にしてどうして世の中の規準を覆へさすにゐられるものか。山上の垂訓を読み返してみるがいい。一足毎にイエスの欲求を宣言してゐる。則ち低きもの高く認められんことを、終りなるものの初めにならんことを、看落さるるものの認められんことを、叱らるるものの敬はれんことを、さうして最後に、古い眞理が誤ちとして普通の生活が死および墮落として反省されんことを。彼は感覺を失つてその死の苦痛を知らぬ過去に對し、あまり易々と従は

れる人間の本性に對し、人類萬有的の共通説に對して、世界の歴史中に於ける最も決定的な「否定」を斷言した。

この點ではイエスは、その民族の精神に忠實である。それは實際、滅亡の中に在りながらも、猶ほ恒により大なる希望を意圖して止まなかつたところの精神である。——束縛された人民が、ダビデの子の力を藉りて、他の國民を支配することを夢想した。最も輕蔑された種族が、榮光を彼等今まで約束されたものと感じた。神によつて最も多く罰せられた人民が、自ら最も多く愛されたものと信じた。最も罪深い人民が、自分等だけが救はれるものだと言信した。このヘブライ人の良心の可笑しな反動が、キリストに於ては價値の修正となり、また彼が超人的の生れであるために、人類の遵奉しつづつある總ての主義綱領を、神力によつて更新することとなつたのである。

キリストの最初の發見は、佛陀のそれと同じく、「人間は不幸なもの、——幸福さうに見える人たちでも、その實、皆な不幸な人たちののだ。」といふ事であつた。悉多太子は苦患を絶つために生活そのものの抑制を圖つた。イエスはそれとは違つて、その馬鹿らしく見えるものの中にも、猶ほより以上に崇高な希望を懷いた。彼は人間の不幸なのは、眞の生活を見出さないからだと言へた。彼等をして現在あるがままの反對のものたらしめよ、彼等をしてその爲す所の反對を爲さしめよ、さ

らば地上に幸福の饗宴が始まるだらうと。

これまで彼等は本然に従つて来た。彼等の受け入れる本能に自分たちを托し、そのほんに皮相な一時的の不十分な律法で導かれて来た。偽りの神を拜んで来た。酒や、肉や、金や、權力や、残忍や、技藝や、學問に幸福が見出せるものだと思つて来た。さうしてその結果はただ彼等の苦惱が一層緊張の度合ひを加へたに過ぎなかつた。その説明はかうである。彼等は道を踏み過つたのだ。彼等は全く向き直つて、これまで善く思はれたものを斥け、棄てられたものを拾ひ上げ、焼かれたものを崇め、崇められたものを焼き、彼等を満足さしてきた動物的本能を征服し、彼等の本然を肯定せずにと戦ひ、精神の中に一つの新しい律を定め、それに忠實に生きなければならぬのだ。若しもこれまで彼等がその期待するところのものを獲なかつたとすれば、それを矯正する唯一の法は、現在の生活を轉覆すること、即ち魂を更改することではなければならぬ。

我々の何時までも不幸であることは、舊世界の實驗が失敗に終つたこと、本然の合はないこと、過去の誤つて来たこと、動物の原質的本能を人間性で少しばかり錆を落し磨きをかけ、それによつて動物のやうな生活を営むことが、結局、悲惨と絶望とに終るものであることを證明してゐる。人間の窮りない悲惨を笑ひ若しくはそれに就いて泣いて来た人々は、いづれも達觀の士である。

厭世家は正しい。我々の傲慢を罵る人々、我々の無力を責める人々、我々の醜行を諷む人々、彼等は如何に駭撃さるべきであらうか。

誰もが地上の微生物を喰ひながら、蛆蟲の塊りの中のだうち廻るために、満足して生きてゐる者はない。一つの胃囊と二本の手を持つただけでなく、魂と心を持つてゐる彼、その魂がさまざまの試練に遭つて来たがために、天性の磨かれた彼は、人類に對して恐怖を感じるやうに運命づけられてゐる。頑迷、焦燥な性質の者には、この恐怖が嫌忌と憎惡とに變るし、他のより豊かな、より寛大な者には、それが憐れみと愛とに代る。

我々がレオバルデーを讀んで、如何にして彼がそのキリストに對する青年時の愛を失つたか。(恐らくそれは不完全なキリスト教徒が彼の周圍を取巻いてゐた爲めであつたらう)、また如何なればその心を推理的の絶望に消耗し盡し、竟ひに「人生は煩くて苦し、それ以外に何の價値もなし。」といふ絶望的の辭句を以て終つたかを考へる時、我々のうち誰が次のやうな洞察を以てそれに答へるであらう? 「氣を静めるがいい、氣の毒な人よ! 君が苦み以外に何の味もないといふのは、君の食つてゐる艾の味から來るのだ。君が人生を煩く思ふのは、缺點が君の方に在る。それは君が君の生活を愉快にし、少くとも堪え得るものにしてきた其等の感情を灼くために、君自身、地獄の石

を使つて、徒勞な推理を行つて来たからだ。」と。

否な、レオバルディーは過つてゐなかつた。諸君が人間を有るがままに視て、彼等を救ひまた彼等を變へる望みの持てない時、さうして諸君が彼等と餘りに違ふために一緒に住めない時、また諸君の彼等を永久の不幸と悲惨とに罰せられたものと信するが故に、彼等を愛し切ることの出来ない時、獸は永久に獸、卑怯者は永久に卑怯者、汚れた者は永久に汚穢の中に沈溺して行くものと、諸君の感じる時、諸君の心に沈黙を守らしめ死を希望する以外に、何が出来やう？ けれども質問が一つある。人間は不變のものか更改されざるべきものか、より良くなることの出來ないものか？ またもう一つには、人間は向上して自分を聖くすることの出來るものか？ その答へは實に重大なものである。我々のすべての運命はその質問の中に在る。優れた人々の中でも、多くの人は、このデイレンマを十分意識して居なかつた。多くの人は、次ぎのやうに信じて來、また未だにさう信じてゐる。生活の様式は變へることが出来るけれども、本質は變へることが出来ない。人間にはあらゆるものが許されてゐるけれども、魂の性質を變へることだけは難かしい。人間はもつと發達して世界を支配することも出来、またもつと富み、もつと學識を得ることすらも出来るが、その徳性だけは變へがたいと。人間の感情、人間の原始的本能は何時も變らずに、彼等が野蠻な穴居人と一緒の時のやうに、湖上都市の建設者と一緒の時のやうに、最初の蠻民や太古の國民と一緒の時のやうに續くであらう。

他の人々は人間の過去及び現在を顧りみて、やはり同じやうに恐怖心を感じる。けれども彼等は絶望に陥つて道徳上の虚無を感じる前に、先づ人間の將來がどうあるべきものかを注意する。彼等は人間の魂の完全になり得べきことに堅い信念を持つ、さうして彼等の兄弟のために幸福を備へる神聖ではあるが難かしい仕事に幸福を見出す。

本統に人間らしい人間には、これ以外に選擇の途がない。輒ち最も暗愴たる苦惱を嘗めるか、但しは最も大膽なる信念を持つか、死を選ぶか、但しは救ひを求めらるかである。過去は怖ろしく現在は不愉快だ、より良き明日の日を來たらしめんがため、また未來を幸福ならしめんがため、我々をしてそれに至生活を傾注し、愛と理解との全力を擧げしめよ。もし今日まで我々が誤つてゐたならば、さうしてその駭撃さるべき證據が我々の通つて來た暗黒な過去であるならば、新人と新生涯とを生むべく更めて我々を働かしめよ。可能性は唯二つあるだけだ。幸福は決して人間に許されぬものか、それもとまたどうかである。さうしてイエスは此の事を堅く信じた。もし幸福が我々が一般にまた永久に持つ事の出来るものであらうなら、それを獲るためには、我々の行狀を變へ、我々の

魂を更め、新しい價値を創り、古い價値を否定し、世間の偽りの「然り」に對して神聖な「否」を以て答へる以外に、拂ふべき値ひがない。若しキリストが誤つてゐたならば、絶対に宇宙を否定すること以外に何ももの残らない。何物にも絶対の信が置けなくなる。完全なさうして嚴肅な無神論——今日の片輪にされた、偽善的な、卑怯な無神論者の一派のやうなものでなく、——に入るか、但しはその愛によつて我々を救ひ更生せしめるキリストの生きた信仰に入るか、孰れかである。

汝ら聞けり

最初の預言者、初期の立法者、若い國々の嚮導者、諸々の王、都市の建設者と正義の制定者、賢い教師、聖徒たちは、獸を支配し始めた。口づからまたは刻された言葉をもち、彼等は狼のやうな人間を馴らし、森の人間を手なづけ、蠻民を制御し、それらの鬚のある小兒を教へ、悍猛な執心深い残忍な人間たちの心を和らげた。温かい言葉をかけたり、刑罰の怖しさを以て嚇したり（オルフェウス又はドラコ）、上天の神や地下の神の名に於て懸したり脅かしたりしながら、彼等は切つてもまた直ぐ伸びてくる爪を剪んでやつた。鋭い牙のある口に口網を嵌めてやつた。さうして抵抗力

のない者、犠牲者、禮巡者、婦女子などを保護してやつた。インド婆羅門教の經典「摩納婆法論」や、舊約聖書の最初の五卷「ペンタトウク」や、「大學」や、ベルシャ・ゾロアスター教の經典「アール・エスタ」や、ソロン、ヌーマの傳説や、ヘシオッド、支那七聖賢の寸鐵殺人的の金言に現れてゐる古い律は、いづれも皆な同じ處から出て、大同小異の模様替へをしただけのものに過ぎないが、要するに動物を人間の寫生に、始まりに、類似のものに摸さうとした、最初の、粗々しい、不完全、不適當の企てであらねばならぬ。

この律は、竊ます、殺さず、偽らず、姦淫を行はず、弱き者を窘しめず、必要以上に他人や奴隸を虐待せず、といつたやうに、僅かな根本的の規則に縮まつた。これらは全く共存生活に必要な、總ての人々に有用な社會道徳である。立法者は最少限度の禁止に必要な最も有り觸れた罪を指摘するだけで満足した。彼の理想は平凡な正義の觀念以上に出てゐなかつた。けれども律は惡の優越を本能の主權を認めた。さうしてそれらは律より前に現はれたもので、しかも今尙ほ存在しつつあるものである。あらゆる戒律は違犯を意味し、あらゆる法規は違反者の實行を伴ふ。この故に、最初の人々の作つた律は、永遠に勝ち誇る獸性の力を絶つべく不十分な企てに過ぎない。それは習慣と正義と、本然と推理と、手に負へぬ戦ひと神聖なモデルとの間に於ける妥協と姑息的な手段との寄

せ集めである。

昔の人間は元氣旺盛で、體力強く、剛健で、活潑で、筋肉逞しく、血氣盛んな、がつしりした、丈夫な人間ばかりだ。さうした赭顔の毛むくじやらの人間、生肉を食ふ連中や、強姦を何とも思はぬ手合や、牛盗人や、トロイ人のヘクトルのやうに、敵の體をバラバラに切斷して、「人間屠殺者」と呼ばれるのに適はしい荒武者たちや、殺した敵手の脚くびを掴んで曳き摺りながら、巨きな艦で葡萄酒を飲み干したり、牡牛や羊の太腿を啖つて喜ぶ、食ひつ氣の多い戰士たちを、これらの律に服さうともせず、また従はうともしない人々を、我々はインドの長篇叙事詩「摩訶婆羅多」の中に、また「イリヤット」の中に、イズバルの詩に、またエホバの軍記に見るのであるが、もしも彼等にして神の刑罰を怖れることが無かつたならば、彼等はこの上どんなにか放埒で悍猛だつたことか知れたものではない。眼のために頭が、指のために腕が、人間一人の生命のために百人の生命が、要求された時代にあつて、眼のためには眼を、人間一人の生命には一人だけの生命を、要求する報復の律の現はれたといふことは、一見イエスの教訓を眞似たやうにも見えるが、實は驚くべき寛大性の目醒ましい勝利であつたのだ。

然しながら律は守られるよりも背かれる方が多かつた。強者はしぶしぶ我慢した。それを保護す

べき善の権力者は、巧みに法網をくぐつた。兇者は公然それを破つた。弱者はそれを誤魔化した。

随つてたとへそれが有らゆる人間によつて毎日嚴守されて來たにしても、それは單に一時的の鎮壓を加へるだけで、絶えず煮え立つてる惡を征服するには十分で無かつたらう、敢へて不可能ではないが、定めるのに段々困難になり且つ廢されるよりも設けられる方が多くなつて來て。それは人間生れつきの残忍性を減らすことで、それを全く根絶することではなかつた。拘束されながらも反抗的の生活を送つて來た人間は表面、從順を裝ふことを覺えた。蔭に廻つてもつと惡事を働らく自由を獲んがために、衆人の見る前では僅かばかりの善事を行つた。律の基礎と精神とをより巧みに裏切るため、表面、戒律を嚴守するやうな風を見せびらかした。

イエスが山上で話した時、彼等はこの點まで達してゐたのだ。イエスは舊い律の已に破れて、形式主義の不汚な泥沼に溺れてゐるのを覺つた。人間種族の果てしのない教育事業が、もう一度新たに始められなければならなかつた。灰は掃ひ落されねばならぬ。もとの感激の焰がその中に吹き込まれなければならぬ。それは恒に心的であり魂の更改であるところの初めからの目的地にまで達成されなければならぬ。さうしてそれには舊い律を、乾枯らびた灼け切つた舊い律を斷ち切る必要であつた。

それ故、新しい律はイエスと共に始まる。同時に古い律は廢され、その不完全な事を表明した。彼は一例毎に「……と云へることあるを汝ら聞けり」といふ言葉で始める——さうして彼は直ちに古い律をその逆説で淨化するか、或ひは實際に覆へすかして、然るのちに新しい律を置き換へる。「されど我は汝らに告ぐ……」と云つて。

これらの「然れど」を以て、人間教育の新しい相が始まる。もし我々が未だに本統の黎明の薄闇がりの中を捜し廻つて歩いてゐるなら、それはイエスの答ではない。

されど我は汝らに告ぐ

「古への人に、殺すなかれ、と云へることあるを汝ら聞けり。……されど我は汝らに告ぐ、すべて兄弟を怒る者は……審判にあふべし。また兄弟に對ひて、愚か者よといふ者は、衆議にあふべし。また痴者よといふ者は、ゲヘナの火にあふべし。」イエスはまつしぐらに極端まで行く。彼は兄弟が殺せるなどとは勿論、撲てようと思はない。彼は殺す希望、さうした意志すらも考へたことがない。怒りの一瞬間、罵詈の一言、悪口の一口も、彼にとつては暗殺にも等しい。想像力に乏しい

平凡な人々はこれを「誇張」と呼ぶ。熱情のない處に偉力のありやう筈がない。しかも熱情は誇張だ。イエスは彼自身の論理を持つてゐて誤りを作らない。殺人は感情の最後の捌け口に過ぎぬ。怒りから悪口が出て、悪口から悪行が生じる。打撲から殺人が生ずる。随つて最後の行爲、有形的、表面的の行爲を禁めるだけでは十分でない。それは單にそれを避けがたくした内部的過程の結果に外ならぬのである。正しい事は惡の根元を斷ち切ること、毒のある果物を生む惡い憎みの樹を刈ほすことである。

ペレウスの子のアキレス、妾を奪はれて憤り、その死んだ敵の肉を噛み切る事の出来るやうに、食人種にならしめ給へと、神に願ひを掛けたアキレス、銀脚の母から生れたアキレスは云ふ。「神よ、り來るにもせよ、また人より來るにせよ、争ひは忌はしきものなり。怒りは賢き人すらも憤らせ、憤りの味はひは口に蜜よりも甘く、人の心の中にて成長す。」と。アキレスはその友を殺してから、その親友が死んでから、初めて、一度火が點いて燃え立つたが最後、血の河でさへも消し止めることの出来ない怒りの果してどんなものであるかを知る。憤怒の英雄は憤りのどんなに悪いものであるかを知る、けれども彼は心を革めない。彼はただ人間の王が死んだヘクトルの屍の上に復讐するその怒りを避けんがためにだけ、彼に向つてその憤りを慎しむ。

怒りは火の如きものである。はじめ火花を發した時だけは消すことも出来るが、それ以外は已に遅すぎる。イエスがその初めの怒りの言葉に對して、殺人罪に對すると同等の刑を課したのは、深い眞理を語るものである。總ての人々が憤恚の勃發するその抑々の出發點に於てそれを食ひ止め、それらの呪ひの言葉を押へることを知るならば、人間とその兄弟人との間には最早や言葉もしくは行爲の争ひが燃え上らないだらう、さうして殺人はただ我々の過去、野獸時代の陰鬱な記憶となるであらう。

「姦淫するなかれ、と云へることあるを汝ら聞けり。されど我は汝らに告ぐ、すべて色情を懷きて女を見るものは、すでに心のうちに姦淫したるなり。」此處でもまたイエスは、有形的の事が感覺の鈍い人間から重大視されてゐることを語つてゐる。彼は恒に、肉體から靈魂に、肉から意志に、見えるものから見えざるものに、高翔しつつある。樹はその果によつて見分けられ、種はその樹によつて見分けられる。惡が見ての人々の眼に付く時はすでに遅すぎる時だ。熱した頃には最早や止めやうがない。罪は出し抜けに現はれてくる膿疱だ。もしその毒液を前以て洗滌して血を淨めて置いたら、恐らくそれは出ないで済むだらう。一人の男と他の男の妻とが互ひに想ふ時、それだけで已に十分裏切つた事になる。彼等は罪の行爲をしてゐるにも爲てゐないにもせよ、姦淫を犯したも

のである。男はその妻の體にだけなしに、その心 結婚するのだ。もし其の心が彼を離れてゐるならば、彼は大部分のものを失つたことになる。少部分を失ふことでも堪えがたい苦痛かも知れないが、それは生命には關らない。自分の愛さない見知らぬ男から、暴力を以て無理強ひにへんな眞似をされ、それに抵抗し得なかつた女は、姦淫を犯したものではない。それは意志に由り感情に由ることだ。自分を純潔に保たうと欲する者は、單に黙つてその欲望をちらりと顔に表はすことさへも避けなければならぬ。何故なら欲望の表情は、抑へられなければ必らず繰返へされる、さうして表情は言葉となり、接吻となり、終ひにはどんな相手に對しても遠慮のない變愛に變つて行くからだ。想ふことでも、想像することでも、欲求することでも、裏切りは既に裏切りに違ひない。最初は流し目に始まつて終ひには死を以てしても斷ち切ることの出来なくなる、大きな片意地の網から己れを救ひ得る者は、初めの糸を裁ち切る人に限られてゐる。さうしてイエスは其の事を、惡もし眼より來らば、その眼を扶り出して棄てよ、惡もし手より來らば、その手を切りて棄てよと云つて忠告してゐる——それは臆病者は勿論のこと、強い者でも吃驚するほどの忠告である。けれどもたとへどんな臆病者でも、いよいよ癪だと判れば、その腕でも脚でも切らせる。また腫物が内臓に出來れば、その體を切開さして生命を救はうとする。人間は肉體を救ふことには氣を使ふ、けれども

靈魂の健康を保つためには、それに必要などんな犠牲をも拂ふことを好まない。靈がなければ、肉體は單に肉と血との無感覺な機械に過ぎないのに。

「また古への人に、偽り誓ふなかれ、汝の誓ひは主に果すべし、と云へる事あるを汝ら聞けり。

「されど我は汝らに告ぐ、天を指して誓ふな、神の御座なればなり。

「地を指して誓ふな、神の足臺なればなり。エルサレムを指して誓ふな、大君の都なればなり。

「己が頭を指して誓ふな、なんぢ頭髮一筋だに白くし、また黒くし能はねばなり。

「ただ然り然り、否な否たと云へ、これに過ぐるは惡より出づるなり。」

眞理に向つて誓ふ者は臆病者、偽りに向つて誓ふ者は裏切者である。前者はその呼び出された力が彼に罰を當て得ると信じ、後者は他の信仰によつて直ちに彼等を欺き、自分を利しようとする詐欺師である。孰れの場合に於ても誓ひを立てることは悪い。我々に在つては、利害關係を異にした下らない喧嘩に、證しを立てたり裁きを求めたりするために、より偉大なる力を呼び出さうとしたり、またはその體のどんな些細な部分の相貌をでも變へることの出来ない癖に、我々の頭や或ひは子供の頭で誓つたりすることは、無能な人間のする事で、それは莫迦けた挑戦であり、神に對する冒瀆である。眞理を語るのに、刑罰に對する懼れからでなしに、常に靈の自然の欲求から語る者は

誓ひの必要を認めない。誓ひは、大抵の場合、正確が疑はれる、それに満足してゐる人々にとつてさへ、必ずしも完全な保證には役立たない。世界の歴史を見てみると、誓ひの守られたことよりも、誓ひの破られたことの方が多し。さうして誓ひのために最も多くの言葉を用ひる者は、きつと既にその誓ひを破らうといふ考への人に違ひない。

「汝らの父母を敬ふべし、と云へることあるを汝ら聞けり。されど我は汝らに告ぐ、我よりも父または母を愛する者は、我に適はしからず。」また曰く、「人もし我に來りて、その父母、妻子、兄弟、姉妹、己が生命までも憎まずば、わが弟子となるを得ず。」此處でもまた、新しい律と舊い律とを繋ぎ合はす敬虔の誠めが、素氣なくも轉覆されてゐる。

イエスは子たる者の愛を責めない。たゞそれを適當の地位に置いて、古人の考へたやうに第一位に置いてないだけのことだ。彼にとつては、最も大きな、最も純潔な愛は、父の愛である。父は子に於て未來を愛し、新しいものを愛す。子は父に於て過去を愛し、古いものを愛す。けれども、イエスは過去を變へ、古いものを滅ぼすために來たのだ。兩親に尊敬を拂ふことは、自己を傳統と家族との中に閉ぢ縮めることで、世界の革新には障礙となる。すべての人間を愛すことは、我々のために生命を投げ出してくれた人々を愛するよりも大きな仕事だ。總ての人間を救ふことは、一家族を成す少數の人々に仕へることよりも永

久に大切なことだ。大事を成すためには、小事を捨てなければならぬ。たゞ我々の家族の者ばかりを愛して、この愛（往々にして己むを得ざる愛であり、また見せかけの愛であるところの）を以て他の誰とも親しめない口實にすることは、随分都合の好いことであらう。然しながら、己れに優る或る仕事に生命を捧げる者は、その大きな企てに對してその仕事の最後の瞬間まで全力を傾注する。大きな心を以て全人類に奉仕しようとする者は、普通の愛情を棄てなければならぬ。またそれで足りない場合は、それを否定しなければならぬ。たとひ肉體的の父性を具へずとも、その言葉の聖い意味に於て、「父」たらんと欲する者は、單に息子の氣持であつてはならない。「死にたる者にその死にたる者を葬らせよ。」舊い律の中には、また固苦しい傳統の中にはそれ以上、何百といふ肉體の淨めに關する誠めがあつた。それらは現世的にもまた天國から見ても何んら根柢を持たない、細かな、退屈な、面倒臭い誠めであつた。パリサイ人は宗教の大部分はそれらの傳統を守ることになつた。それは魂を洗ふよりコップを洗ふ方がどれだけ手数でないか知れないからだ。コップのやうな器物を洗ふのには僅かの水とタオルだけで事が足りる、魂を洗ふのには愛の涙と欲求の火が無ければならぬ。「口に入るものは人を汚さず、されど口より出づるものは、これ人を汚すなり。すべて口に入るものは腹にゆき、竟に剛に棄てらるゝことを悟らぬか。されど口より出づるものは心より出づ、これ人を汚すなり。それ口より悪き念いつ、即ち殺人、姦淫、淫行

竊盜、偽證、誹謗、これらは人を汚すものなり。されど洗はぬ手にて食することは人を汚さず。」

井戸や泉の水で體を洗ふこと、儀式のために水を使ふことは、根本的に内部を淨める事にはならない。さうして三度水を替へてその手を洗ひながら、猶ほ且つ飢ゑた兄弟を逐ひ出すよりも、汗に汚れた手で食事を取る方が、遙に優しである。汚れは體から出で、下水に失せて畑や田を肥やす。然るに、立派な服装をしながら別な汚れを咽喉もとまで一杯詰め込んでゐる紳士が澤山ゐる。その悪臭は言葉と一緒に彼等の口から出て來るので、幾ら洗つても漱いでも追ひ付かない。さうしてこの汚れは下水には失せないで、その代りあらゆる人間の生命を汚し、空氣を毒し、小兒の心さへも穢す。これらの剛くさい人々から我々は遠去からねばならぬ。たとひ彼等が一日に十二回づゝ沐浴しようとも。もしその心が穢らばしい考へを起すなら、皮膚をシャボンで洗つたところで何の役にも立たない。何事も邪惡なことを考へない泥溝浚ひは、大理石の浴槽に香水を垂らしてその中に飛び込み、何か新しい淫行や詐欺に想ひを回らしてゐる金持より健にきれいだ。

無抵抗

然しながら、イエスはその革命的な教訓の中で最も昏迷的な處までは未だ達してゐなかつた。「目には目を、齒には齒を」と云へることあるを汝ら聞けり。されど我は汝らに告ぐ、悪き者に手向ふな。人もし汝の右の頬を打たば、左をも向けよ。汝を訴へて下着を取らんとする者には、上着をも取らせよ。人もし汝に一里ゆくことを強ひなば共に二里ゆけ。」

報いに關する舊い律をこれほどはつきり否定したものは恐らく他にあるまい。自らキリスト教徒と呼ぶ者の大多數は單にこの新しい誠めを守つてゐないばかりか、その誠めを欣んで承認する風さへなかつた。數限りのない信者にとつて、この惡に抵抗せぬ主義は到底堪えがたいまた享け容れがたい、キリスト教の汚辱であつた。

人間が暴行に對してなし得る應へは三つある。復讐と、回避と、他の頬を向ける事とだ。第一のものは報復の野蠻な原則で、今では法律の規定で既はれ去勢されてゐるが、それにも繋はらず能く用ひられる。惡のために惡が報いられる、個人的に或は世の中が幾ら文明になつても昔の野蠻時代の遺風を脱し切れなるところの、裁判官とか刑吏とかいつた調停者もしくは代表者たちによつて。初めの怒り手の行つた惡に法官らの行ふ惡が加へられる。刑罰は屢々罰する者の上に回り來つて、暴力の怖ろしい鎖が、一つの復讐から他の復讐へと、際限なく延びて行く。惡徳は兩刃の刃である。たとひ一方に、善事をなす欲求がある

にしても、それは無効だ、國家に於ても、家族に於ても、また個人の場合に於ても。最初の罪惡は直ぐその後の一連りの贖罪と刑罰とをもたらし、それがまた怒る者と怒らしめた者との間に意地の悪い公平さを以て分配される。報復の律は最初ぶつかつた者に獸性の安心を與へることが出来る。けれども、それは惡を減らす代りにそれを殖やす。

回避は報復に比して些度も良いことがない。己れを隠す者は敵の勇氣を倍にする。報復を怖れる者は稀に腕力を引つ込めることも出来るが、逃げる者は追跡を招く。隠れる者は敵手を誘つて己れを突き止めます。彼の弱さが反つて他の者に亂暴を働かせる。このやうにして、惡がまた惡を生む。

見かけは變でもどつでも、唯一つの解決の方法は、イエスの誠めに従ふことだ。他人がひとつ諸君を打ち、諸君がそれを打ち返すなら、その人は拳骨で來るだらう。それを今度は蹴返すと、刃物が抜かれて、諸君の中の一人が生命を失ふことにもならう。而もそれが屢下らない喧嘩の種から。諸君が逃げれば敵手は追ひかけ、最初の度胸試しから急に強くなつて、君等を打ち倒すだらう。他の頬を向けるといふのは第二の打撃を受けることではない。逃げがたい惡行の鎖を最初のひと鎖で斷ち切つてしまふことを曰ふのだ。抵抗するか逃げるだらうと思つてゐた敵手は、期待が外れて諸君の前にまた彼自身の前に屈伏する。彼も此事ばかりは思ひ懸けなかつた、どうして好いか判らなくなる、殆ど恥にも近い當惑を感じる。やが

て自分に立ち還る。諸君の不動性が彼の怒りを冷し、彼に反省の時間を與へる。彼は諸君を臆病者として責めることが出来ない。何故なら已に第一の打撃を受ける覺悟で、相手にその打ち處まで教へてゐるのだから。あらゆる人間は他人の勇氣に對して幾らかの尊敬を拂つてゐる。それが勇敢な行爲の中でも稀にしかない、また最もむづかしい道徳的の勇氣なら猶ほ更のことである。傷つけられても無念にも思はず、また逃出もしない人は、憤りに眼が眩んで相手の所へ押掛け、その受けた惡を倍にして仕返しをする人より、更に多く靈の力を持つた、更によく自己を統御することの出来る、更に多く眞の英雄魂を具へた人であらねばならぬ。温厚、もし愚昧ならされば、寛裕、もし臆病ならされば、それらは凡ての不思議が人を驚かすと同じく一般人の靈を驚かす。それらはその眞から獸的な人間に、この人間が一個の人間以上に値しないものであることを訓へる。動物性の人間は、口汚い返事や臆病な逃走によつて刺激されなければその怒りが自然に麻痺して、大抵この新しい、知られざる、謎のやうな力に、怖れを感じるものである。その愈々激しい理由は、打つ者の感奮の動因が、怒つて撲る、抵抗される、續いて争闘が起る、といったところに、快感を豫想して掛かつてゐるからだ。人間は戦ひの好きな動物だ。けれど抵抗を受けないと快感が失くなる、熱が冷めてしまふ。敵手の影は已に立ち消え、代りに偉い人が現れて靜かに云ふ。「それでもまだ足らぬか？ 今度は別の頬を遣らう、思ふ存分打つがよい。俺にとつては魂を苦しめられるよ

り頬を打たれる方が樂だ。お前は望み次第俺を窘しめることが出来るよ、けれども俺に氣狂ひじみか癡癡の仲間入りをさせようたつて、それは出来ない相談だ。人が俺に惡事を働いたからと云つて、その事が俺に惡事を働かすことは出来ない。」

字義通りイエスの此の誠めに従ふには、血や神経や、その他我々の體の卑しい部分のあらゆる衝動を抑制する必要がある。而もそれは、常人の輕々に能ふところではない。それは苦い反撥的の誠めである。けれどもイエスは未だ會て従ふことの易きを言はかつた。辛酷な自制心なしに、嚴しい不斷の内なる闘ひなしに、古いアダムを否定する事なしに、新人として生れ出づる事なしに、彼に従ひ得ようとは未だ會て言はなかつた。然しながら無抵抗の結果は、たとひそれが常に完全であるとは言へない迄も、抵抗や逃避のそれらよりは隨に完全だ。普通の人間には不可能でもありまた考へも及ばない、この驚くべき精神的訓練の手法、云はゞ偉大なる超人的の力に魅されて普通の習慣、傳統、感激などは全く正反對に出るその行爲、この力の模範、現はれ、凡ての奇蹟のやうに期待の外に立ち、凡ての怪奇のやうに腑に落ちぬ、この謎のやうな奇蹟、外貌だけ他の人間に似てゐるけれども、その行爲にかけては殆んど神のやうな、人間以上の存在物のやうな、他の人間を動かす動機以上の事を行ふ、この強い健かな人間の見本——この手法がもし一度以上繰返へされるなら、もしそれが愚鈍な心から怠慢に附せられなければ、もしそれが、他を傷

つけるためではなく、欣んで自ら忍ぶために肉體上の勇氣が必要とされ、さうした勇氣を示した證據を伴ふなら——この手本の持つ効果はたとひ我々が復讐と報復の念に驅り付いてゐやうとも十分に想像が付く。けれども我々にそれを想像することがむづかしい、それを證據立てることが出来ない、といふのは我々がこれまで、かゝる手本を持つことが餘りに少く、またそのために我々の直覺力の證據として、局部的の實感さへも引合に出すことが出来ないからだ。

然しながら、イエスの此の誠めが未だ會て服されなかつた、或ひは服されることが餘りに少なかつたといへ、それに従ふことの出来ないといふ證據は勿論、それを拒否しなければならぬといふ理窟はさらに無い。それは人間の本性に悖ることだが、凡て眞の道徳的勝利は我々の本性に對する反抗である。それは健康のために我々の魂の一部分を切斷することだ——我々の或る者のためには、魂の最も活氣に富んだ部分を——さうして切斷と聞いて我々の身震ひするのは當然の事だ。けれども我々はそれを欣ぶにせよ、また欣ばないにせよ、キリストの此の誠めを受け容れなければ、暴力の問題を解決することが出来ない。それは惡に惡を加へず、惡を百倍しないやうに、傷口の傳染を防ぎ、惡性の腫物を小さな膿疱の間に切り取つてしまふ、唯一の處置である。打撲に應じるに打撲を以てし、惡行に應じるに惡行を以てするとは、得意な攻撃に遭つて、己れもまた彼ほど卑しい人間である。宣言することだ。逃亡を以て報いるこ

とは、己れを人の前に低くし、人をして追撃せしめることだ。激しく怒る者に道理ある言葉をもつて答へることは無駄な努力だ。けれども單に先方の氣持を受け容れた様子を示すこと、諸君に一時間と云つて過る厄介者を三日間も辛棒すること、肩を撲つた者に胸をも向けてやること、百兩の金子を盗んだ者に千兩も呉れてやること、これらは英雄的に傑れた行爲である。一見、因循に見えても、その實、聖者の犯し難い威嚴を以て悍猛な暴漢に打克つ驚くべき行爲だ。たゞ己れに打克つてきた者だけが、彼の敵を征服することを得、また聖者だけが、狼をおとなしくさせ得るものだ。たゞ己れの魂を變へた者だけが、その兄弟の魂を變へ、世界を總ての人々のために悲しみのより少い場所に變へ得るのだ。

本然に反抗して

惡に對する無抵抗は、これ全く我々の本然に反抗することであるが、キリストの教へに従へば、我々の本然は現在我々を喜ばすところのものに嫌惡を感じ、今我々を驚怖で満たしてゐるところのものに幸福を見出すやうにならなければならぬのだ。彼の一切の言葉は人間精神の全革新を假定してゐる。彼は我々の最も通常の好尚や最も強い本能に矛盾した事を平氣で言つてゐる。萬人の嫌がる事を彼は稱賛してゐる。

萬人の求めるものを彼は非難してゐる。人々の教へる事を（彼等は屢々自分らの考へや行ひと全く違つた事を教へてゐる）嘘だと云つて責めるばかりでなく、彼は人々の毎日考へたり行つたりする事にも反對してゐる。

イエスは本然的の魂いは、原始的の魂の完成を信じてはゐない。彼は魂の現在の本然を全く覆へすことによつてのみ達し得られる其れの未來の完成を信じてゐるものだ。新しい種族は彼と共に始まる。彼はそのモデルであり、原型であり、型を取り直して鑄返された人類のアダムである。ソクラテスは心の改革を、モーセは律の改革を圖つた。他の者の改革事業も、儀禮、法典、體系、科學以上には出なかつた。然るにイエスは人間の一部分を變へることを目的とせず、凡ての事物と世界の言葉との原動力でありまたその根元である人間の内性を變へて、人間全體を頭から爪先まで變へることを目的とした。それ故我は彼に妥協や機買ひを期待する必要がない。彼は悪い不完全な本然に對して何ら讓歩する所がないだらう。哲學者らのやうにそれに尤もらしい理窟を附けて肯定する必要を見出さないだらう。諸君はイエスと本然と同時に仕へることが出来ない。イエスに與する者は古い動物性と斷つてそれに打克つために、より高尚な本然に向つて働くべきである。その他の總ては冗辯に類し、埃煤にも等しい。富に對する憧憬ほど人間に共通なものはない。何ら手段を擇ぶことなく、時には最も忌はしい手段によ

つてさへ金を積むことが、これまで最も愉快な最も尊敬すべき職業とされて來た。然しながらイエスは言ふ、我と共に來る者は持てるものを賣りて貧しき者に施せ、さらばその人は天の財寶を得べしと。貧乏は神の國の市民たるべき最初の要件である。

すべての人々は明日の事を思ひ煩ふ。彼等はいつともその土地が足下から崩壊しやしないか、またその食ひ扶持が次の收穫まで絶えやしないかと氣遣つてゐる。着物を着てもそれが自分たちの體や子供たちの體にまで満足に行き亘るかどうかを心配してゐる。けれどもイエスは我々にかう教へてゐる。「この故に明日のことを思ひ煩ふな。一日の苦勞は一日にて足れり。」

あらゆる人間はその同等の者の間に於てさへも頭角を現はしたがるものらしい。彼は己れを取り巻く人より優れたものであらうことを欲し、人に命令を下し、人を支配し、人より偉大に、裕福に、美しく、賢さうに見えんことを望んでゐる。人間の全歴史はたゞ第二位に起つことの恐怖を語るものに過ぎない。けれどもイエスは我等を教へて言ふ、「されど汝らの中に頭たらんと思ふ者は、凡ての者の僕となるべし」と。最も大きな者は最も小さな者である。最も強い者は最も弱い者に使はれるだらう。驕ぶる者は謙り下され、謙り下る者は崇められよう。

虚榮心はまた人類一般の呪ひである。それは善い行爲さへも毒する。何故なら人々はその數ならぬ善行

を大抵いつも人に見られんがために行つてゐるからだ。彼等は悪は陰でこつそりし、善は大つばらに行ふ。「さらば汝は施しをなすとき、右の手をなすことを左の手に知らすな。……汝ら祈るとき、偽善者の如くあらざれ。彼等は人に顯さんとて、會堂や大路の角に立ちて祈ることを好む。……汝は祈るとき、己が部屋に入りて祈れ。……また汝ら斷食するとき偽善者の如く悲しき面容をすな。彼等は斷食することを人に顯さんとて、その顔色を害ふなり。……汝は斷食するとき、頭に油をぬり、顔をあらへ。」

自己保存の本能は吾人を支配する本能の中で最も力強い本能である。この一握りの生きた泥の安全を期するためには、我々はどんな破廉恥でもどんな残忍でもどんな卑劣でも平氣で行つて、而も猶ほ足りないことを怖れてゐる。けれどイエスは我々にかう教へる、「己が生命を救はんと思ふ者はこれを失ひ、我がために己が生命を失ふ者はこれを得べし」と。何故なら我々が生命と呼ぶところのものは眞の生命ではなく、またその魂を失ふ者は、魂の容器である肉體をも滅ぼすものだからだ。

人は誰でもその同類を裁きたがるものだ。裁断を下す者は誰でも裁かれる者より上に在るものだと思得てゐる。より優れ、より正しく、より罪の無い者だと思つてゐる。他人を責めるのは「俺達はそんなものぢやない」と云ふのと同じ事である。然るに事實に於ては、他人の肩が少しばかり曲つてゐると云つて最初に叫ぶ者は、何時も佝僂にきまつてゐる。けれどイエスは言ふ、「人を審くは、さらば汝らも審かるゝ事

あらじ。人を罪に定むな、さらば汝らも罪に定めらるゝ事あらじ。人を赦せ、さらば汝らも赦されん。」

誰でも大人らしくある事を誇りとする。それは嚴肅で、物事に注意が行き届き、何事にかけても理解が早く、すべての問題を取り裁き、それに就いて一見識を具へた、賢い、實質的な、有用の人間を指す。餘り生眞面目な話をする、子供達にしてみたいだと云はれる。無邪氣な人間は子供らしいと云つて嗤はれる。けれども弟子たちがイエスに天國で最も大いなる者は誰かと訊ねた時に彼は答へた、「誠に汝らに告ぐ、凡そ幼兒の如くに神の國をうくる者ならずば、これに入ることは能はず。」

心の眞面目な者、敬虔の念に富む者、純潔な人間、パリサイ人等は、出来れば罪人や零落者や汚れた者などを避けて、正しい人とだけ一緒に附き合はうとする。けれどもイエスは、彼の正しい人のために來たのでなくて罪人のために來たのであることを、善人のために來たのでなくて悪人のために來たのであることを、絶えず公言してゐる。さうして彼は税吏の家へ馳走に招かれて行つて、一娼婦からその足に油を塗られても、一向恥ぢとも何とも思つてゐない。眞から潔白な人間は朱に交つても赤くなるものではない。彼はその着物に穢す心配からそれを汚い儘に放擲つて置かねばならぬとは思はない。

人間の貪慾といふものは實に大きなもので、あらゆる人間が他人から奪る時は出來るだけ澤山とつて、與へるときは出來るだけ少く遣らうとしてゐる。萬人が所有を求めてゐる。人の豪氣を賞めるのは、偽り

の假面で本職の乞食根性を隠す一つの試みに過ぎない。けれどもイエスは斷言する。「與ふるは受くるよりも幸なり。」

我々はすべて大抵の知人を憎む。何のために憎むかといふに、それは彼等が我々よりも餘計ものを持つてゐるからだ。我々の持ちたいと思ふものを彼等が呉れないからだ。彼等の目の掛けやうが足りないからだ。彼等の暮し方が我々と違ふからだ。一言にして云へば、彼等の存在してゐる事が憎らしいのだ。我々は終ひには自分らの友達までも、自分らの恩人までも憎むやうになる。而もイエスは我々に命じて云ふ、人々を愛せ、彼等をすべて愛せ、我々を憎む人々までも愛せと。

この誠めに背く者は誰も自分をキリスト信者を呼ぶことが出来ない。たとひ死の刹那に臨んでも、その殺し手を愛す位でなければ、その人は自分をキリスト信者と呼ぶ權利がない。

我々自身を愛すことは、自分らのために他を憎むことの根元で、同時に凡ての他の情癖や感情を含んでゐる。自愛と他に對する憎みに打克つ者は、己に全く更まつた人間である。その他のものは自然の結果としてこれから流れ出て来る。己れに對する憎みと敵のための愛とは、キリスト教の始まりでありまた終りである。古代の残忍な盲目的な獸性の人間に對する最も大きな勝利は即ちこれだ、さうしてこれ以外の何物でもない。人間は自分らに對して怒る者をも愛すやうにならなければ、到底再び平和な幸福の中に生れ

出づることが出来ないだらう。汝の敵を愛するは、一人の敵をも地上に残さない唯一の方法である。

愛 以 前

キリストを拒む人々は、彼を享け容れまいために、幾らも澤山腑に落ち易い理窟を持つてゐる。自分らの古い人格を棄てなければならぬと思つても、それが彼等にはそれを棄てたところで別段、大した利益がありさうにも思へない、さうして彼等はこの世の塵埃を非常に尊いものゝやうに考へて、それを失ふことを恐れてゐるのだ。キリストを否認する人々は彼の教へに従はない言譯に、後からまた別の理窟を考へ出した。それはキリストが格別何も新しい事を言つてゐないと云ふ如何にも知つたか振りの理窟である。彼の言ふことは己に何世紀か前に東洋にも西洋にも有つたことだ。彼はそれらを盗むか、或ひは無意識に剽竊したものに違ひない。もし何も新しい事を言つてゐなければ、彼は偉くない。偉くなければその説に耳を傾ける必要がない。彼を稱讚するのは底能兒に、彼に従ふのは愚者に、彼を尊敬するのは白痴に任して置け！と云ふのである。

けれども此等の思想系統の専門家は、新古の別は兎に角として、キリストの理想が承認さるべきもの

か、それとも忌避さるべきものかを明言してゐない。キリストがその死を以て一つの大きな眞理を、今では全く忘れられた不用の眞理を顕現した際に、彼等はキリストがそれによつて全く價値のない事をしたとかこつけるほど大膽ではない。彼等はその意味や精神上に於てイエスの思想と他の古代思想との間に本統の一致があるかどうか、或ひはまた單に音の上の似寄りとぼんやりした口頭上の類似とがあるだけのものかどうか、注意して視てはゐないのだ。それと同時に彼等はさうした物事の迷ひを避けるために、キリストの教へと彼等がキリストの先蹤だとかこつける哲學者たちのそれとを回避して、事勿れ的に彼等の汚れた生活を送りつゞけてゐるのだ。宛かもキリストの福音が彼等のためではなく、誰か他の人たちに向つて話されてゐるものであるかのやうに。

古代、律の發布された後には、血族の間に親睦が結ばれた。さうして都會の市民は互に耐え忍んで他人を害さなかつた。けれどもそれが見知らぬ他人で、客でなかつた場合は、彼等はその人々を憎み、且つ鑿殺しにしないで置かなかつた。家族の内には僅かばかりの愛があつた。都市の内には凡その正義があつた。けれど城壁と國境との外には消えざる憎みがあるだけだつた。それが漸く隣人に對しても、同じ家内の人々だけでなく、同じ國家の人々に對しても幾らかの愛を預ち、他人に對してだけでなく、敵のために幾らかの正義を認めるやうに、との要求の聲の起つたのは、それから數世紀後の事であつた。これは驚

くべき進歩であつたに違ひない。けれども此等の聲は——餘りに僅かで、餘りに弱く、餘りに遠音だつた爲めに——聞えなかつた、或ひは聞えても注意されなかつた。

キリストに先立つこと四百年、支那の聖賢墨子は人間の相互愛を説くために「各相愛」(譯者註、墨子の「兼愛」篇を指す)と題する書物を一卷ぐるみ書いた。其に彼はかう書いてゐる。「聖人は天下を治むるを以て事と爲す者なり、必ず亂の自つて起る所を知つて能く之を治む。亂の自つて起る所を知らざれば則ち治むること能はず。……嘗に亂は何に自つて起るかを察するに、相愛せざるに起る。臣子の君父に孝ならざるは所謂亂なり。子自ら愛して父を愛せず、故に父を虧いで自ら利す。弟自ら愛して兄を愛せず、故に兄を虧いで自ら利す。臣自ら愛して君を愛せず、故に君を虧いで自ら利す。此れ所謂亂なり。父の子を慈ます、兄の弟を慈ます、君の臣を慈ますと雖も、之れ亦天下の所謂亂なり、父自ら愛して子愛せず、故に子を虧いで自ら利す、是何ぞや、皆相愛せざるに起る。……天下の盜賊を爲すものに至ると雖も亦然り、盜其室を愛して異室を愛せず、故に異室に竊んで以て其室を利す、賊其身を愛して人の身を愛せず、故に人の身を賊して以て其身を利す、是何ぞや、皆相愛せざるに起る。人の身を視ると其身の如くんば誰か賊せん、故に盜賊もあることなけん。……若し天下をして兼ねて相愛せしめ、國と國と相攻めず、家と家と相亂らず、盜賊あることなく、君臣父子も皆能く孝慈、此の如くば則ち天下治まらん。」

聖福にとつては、愛は、或ひはそれを更に精確に譯せば、尊敬と恩澤とから成る愛博は、市民と國家とをより緊密に結合さすべきセメントなのである。それは共存生活の惡に對する適藥であり、社會を救済する靈草である。

「怨に報ゆるに徳を以てす」と、面妖な老子が消極的に暗示してゐる。けれども、徳は思慮もしくば温和の謂ひで、愛ではない。彼と同時代の人であつた老孔子は、その弟子曾子の記すところに據れば、仁愛の訓へ、即ち隣人を己れの如く愛すること（その愛人たるや、遠方の人や見知らぬ人や仇敵などは、一切含まぬのである）、己れの如くそれも己れ以上でなく愛することを訓へたと云ふ。孔子は國の秩序を保つ上に必要な子たる者の愛や一般の仁慈を説いたけれども、憎惡を責めることを夢想しなかつた。曾子の言の載つてゐる同じ「論語」の中に、我々は儒教の最も古い經書である「大學」から拔萃された次ぎのやうな句を見出す。「惟、仁者のみ、能く人を好し、能く人を惡む。」

彼と同時代の喬答摩は、人間を愛すること、凡ての人間を、どんなやくさな輕蔑された者までも、愛すことを薦めてゐる。さうして其の愛は、動物のためにも、動物のうちで最も小さなものにも、すべての生物にも感じられなければならぬと言つてゐる。佛教に於て人間が人間を愛すのは、たゞ人生第一のまた最も鞏固な支柱である自愛の全射出を有効に費ふことに過ぎない。佛陀は苦惱を抑制しようとして欲してゐる。さ

うして苦惱を抑制するには、小我と大我とを涅槃——即ち虛無の中に沈澗さすより外に方法がないとしてゐる。佛教徒がその兄弟を愛するのは、眞の友情から愛するのではなくて自愛から愛するのだ。——つまり苦惱を避け、我慾に克ち、人生流轉の吸引に近付かうとするのである。佛教徒の人類愛は冷たくて同時に主我的な利己心であり、また悲しみも喜びも共に色に現はさぬ、冷淡な形式一片のものである。

エジプトでは死んだ者が皆その墓に死者の本といふものを一冊づゝ携へて行く。それは死人が古代エジプトの主神オーシリスの裁判にかけられる前に、前以て自分の魂の申し開きを記入したものである。死者は自分の正しかつたこと、不自由な者に施したことなどを書き込んで自分を賞讃する。「余は何人をも飢ゑしめたる事なし。何人をも泣かしめたる事なし。人を殺したる事なく、叛逆的の殺人を行へる試しなし。何人をも騙り取りたる事なし。余は飢ゑたる者にはパンを、渴ける者には水を、裸なる者には衣類を河止めに遣へる旅人には舟を、神々には生贄を、死者には葬ひの宴を興へたり。」これは正しい事である。さうして此等は仁慈の行ひである（もしも彼等が事實上すべてその聲明どほり實行したものとすれば）。が然し我等は此處に愛なるものを見出さない。況んや敵を愛することに至つては猶ほ更見出しかねる。エジプト人が如何に其敵を遇したかを知るには、かの大王ピオプス第一世ミリの碑文を讀んでみるがいい。「本軍は無事に進んで、豫定の如くヒルスハイト人の國に入りぬ。本軍は無事に進んで、ヒルスハイト人

の國を荒しぬ。本軍は無事に進んで、彼等の無花果の樹と葡萄の樹を悉く切り倒せり。本軍は無事に進んで、彼等の家を悉く焼き拂へり。本軍は無事に進んで、數萬の敵軍を屠殺せり。本軍は無事に進んでその男、女、また嬰兒を無數掠奪せり。されば上帝は此の事を他の何ものにも増して嘉したまへり。」

ツアラトウストラもオイヤ人のために律を残した。この律はアウラ・マツダの信仰者に向つて同信の友に親切ならんことを命じたものである。それには裸なる者には衣類を與へ、飢ゑたる労働者にはパンを拒ぶな、と命じてある。此處でも我々は未だに、我々に屬し、我々に仕へる、我々の隣人に向つての物質的恩恵にこだはつてゐる。愛の話などは何も無い。

イエスはモーセの律に何物をも加へず、唯その古い誠めを繰返したに過ぎないと言はれてゐる。「目には目を償ひ、齒には齒を償ひ、手には手を償ひ、足には足を償ひ、烙にて烙を償ひ、傷にて傷を償ひ、打傷にて打傷を償ふべし。」モーセは「申命記」の中でかう言つてゐる。「汝は汝の神エホバの汝に付したまはんとする民を悉く滅し盡くすべし。彼等を憐れ見るべからず。」「出エジプト記」の中にはまた斯うも書かれてある。それは一歩進んで、我々が愛に近付いたところのものである。「他國の人を虐ぐべからず。汝らはエジプトの國に在る時は他國の人にてありたれば、他國の人の心を知るなり。」「汝らの他國に在りし時のことを想ひ回らして、他國人に惡を行ふな、これが則ち愛の始まりである。けれども我々と共に住む

他國人は敵ではないのだ。隨つて彼に惡事を働くことを償むのは、彼に善事を爲すことを意味しない。「出エジプト記」は彼に惡を行ふなと誠めてゐるが、「レビ記」は一層寛大な心持を表はしてゐる。他國の人汝らの國に寄留して汝らと共に在らば、これを虐ぐるなかれ。汝らと共に在る他國の人をば汝らの中に生れたる者の如くし、己れの如くこれを愛すべし。」「汝らと共に住む他國人はいつも汝らと同じ市民の如く、從つて友人の一人の如く遇さなければならぬ。同じ書物にはまたかうも書いてある。「なんぢ仇を返すべからず、汝の民の子孫に對ひて怨みを懷くべからず。」「これは更に一段の進歩である。汝に怒りを買ふ者には、たとひそれが汝の國の人でなくとも、危害を加へるな。此處に至つて我々は、許すことでなくとも寛やかに忘れるところまで來たのである。たとひそれが隣人に對してだけであつても。

「己の如く汝の隣りを愛すべし。」隣人や同市民は諸君の種族的兄弟である、諸君の助けとなる人間だ。けれど敵の場合には？ その敵の扱ひ方に就いても矢張り一つの誠めがある。「汝もし汝の敵の牛或ひは驢馬の迷ひ去るに遭はば、必ずこれを牽きて其人に返すべし。汝もし汝を惡む者の驢馬のその荷の下に仆れ臥すを見れば、償みてこれを棄て去るべからず。」「おお、古代ユダヤ人のそれは何といふ大きな親切であらう！ 主人が驢馬を探すのに困るやうに、その驢馬をもつと遠くへ逐ひやることは、かなり痛快な事であらう。また荷鞍の下に仆れ臥す驢馬に遭つたとき、ふふうんとせうら笑つて通り過ぎることは、どんなにか面白

い事であらう。けれども古代のユダヤ人の心はその程度までには剛愎にされてなかつた。驢馬は當時の生活状態から云へば餘りに貴重のものであつた。誰にしたところがその既に少くとも一頭の驢馬を持たずには生活が出来なかつたであらう。即ち人あれば驢馬ありだつたのである。けふ君のが逃げ去つたとすれば明日は自分のが逃げ出すかも知れない。たとひ主人が獸のやうな男であらうとも、我々をして動物にまで意趣返しをさせるな。何故なら自分がその男の敵なら先方は自分の敵に當るからだ。それよりも我々は彼の前に善い手本、それによつて先方の利益になるやうな手本を示したいものである。驢馬の荷鞍を直すために彼に手を貸すがいい。他人に爲れたいと念ふ事を他人にも爲てやるがいい。さうして驢馬の尻と耳の上に、憐み深い人間として一切の悪念を棄てしまふがいい。

然しこれは餘りに僅かすぎる事だ。古代のユダヤ人はその敵の動物を勞はることに於て既に非常な努力をして來たのである。けれどもその埋合せをするために、「詩篇」は一步が一步、敵に對する叫喊と、彼等を窘しめ滅ぼすための主に對する激しい要求とを鳴り響かしてゐる。「我を圍む者の首は己れの唇の殘害に蔽はるべし。燃えたる炭は彼らの上に落ち、彼らは火に投入られ、深き穴に投入られて、再び起き出づること能はざるべし。……願はくば彼らが思ひ寄らぬ間に滅び來り、己が伏せたる繩に捕へられ、自らその滅びに陥らんことを。然るとき我が靈魂はエホバによりて喜ばん。」

斯くの如き世界に在つては、サウルがその敵ダビデに殺されなかつたことに駭き、ヨブが敵の不幸に欣ばなかつたことを誇りとするのも、極めて自然の事である。イエスの言葉を豫想さす文句は、後の「箴言」に至らなければ見出すことが出来ない。「われ惡に報いんと言ふなかれ。エホバを待て、彼なんぢを救はん。」敵は罰せらるべきものであるが、それは汝の手でなくもつと力ある者の手によつて爲さるべきだと言つてゐる。然る後に舊約聖書の匿名道德家は、遂々仁愛にまで漕ぎ付ける。「汝の仇もし飢ゑなばこれに糧をくらはせ、もし渴かばこれに水を飲ませよ。」これは進歩だ。憐みは牡牛に止まらずして、その持主にまで延長してゐる。けれども山上の垂訓に顯はれた驚くべき愛は、聖書の一隅に隠されたこれらの箴言から發生することの出来るものではなかつた。

然しながら世人は云ふ、ヒレルが居る、ガマリエルの教師であつた博士ヒレル、大ヒレル、パピロシ人のヒレル・ハバブリが居ると。この有名なパリサイ人はイエスより少く早く生れて、のちにイエスの訓へた通りのことを教へたと、彼等が言つてゐる。彼は自由主義のユダヤ人、理性的なパリサイ人、知識に富んだ博士である。然し、それかと云つて、彼はキリスト者であつたか。彼が「汝の忌み嫌ふところを他人にすな。これ律の凡てにして、他はその説明に過ぎざるなり。」と言つたことは眞である。これらは古い法律の教師にとつては美しい言葉である、けれども其等の言葉と古い律を覆したキリストの言葉とを比

較してみる時、その差果して幾何であらう！「するな」とは消極的の命令である。彼は「汝らに仇なす者に善を行へ」と云はずに「汝らの悪しと惟ふ事を他人に（さうして此等の他人とは、確かに朋輩、同じ市民、家族や友達の連中を指す）すな」と言つてゐる。彼は穩かに有害事を禁じてゐるだけで、愛せよといふ絶対的の命令を下してゐるわけではない。論より證據、ヒレルの子孫はその律を詭辯の泥沼に陥し入れたユダヤ律法の編纂者たちであり、イエスの後裔はその迫害者の幸福を祈つた殉教者たちであつた。

それからまた、イエスより廿歳も年上のフィロンは、アレキサンドリヤ生れのユダヤ人で、プラトン系の純正哲學者であるが、彼もまた人間の愛に就いての論文を遺した。然しながらその才能を、その神秘的メシヤ的の思索を悉く發揮したフィロンは、やはりヒレルと同じく一個の理論家、パンとインキ壺との學者、書物と系統と抽象と類別の人間に過ぎなかつた。彼はその議論を立てる上に於て幾萬言を惜みもなく書き列ねてゐるけれども、一言にして立ち所に凡ての過去を灼き滅ぼすやうな、また一語にして心と心とを結びつけるやうな言葉は、終に彼の心頭に湧いて來なかつた。彼は愛を語る上に於てキリストより遙に多くの言葉を費してゐるけれども、キリストが山上でその無知な友人たちに語つたところの事を、彼は未だ曾て云へもしなかつたし、また理解することも出來なかつたであらう。

アキレスとブリヤム

ギリシヤは總ての者が水を給與されて來た水源地であるが、其處に敵に對する愛の無かつたといふのは本統であらうか。「パレスチナの迷信」の敵である現代の似而非異教徒は、ギリシヤの思想には何事でも含まれてゐないものが無いと主張する。泰西の精神生活におけるギリシヤは、支那の東洋におけると同様、あらゆる創作物の母であると云ふ。

ソフオクレスの悲劇「アイヤス」では、有名なオデイシウスが災禍に陥つた敗戦の友を見て憐憫の情に動かされる。其處へギリシヤの智慧の神であるアテネが、神聖なる梟の形をして現れて來て、「人生最大の快樂は敵に向つて嗤ふことである」と、其の事を彼に思ひ出させようとしたが、アテネの力を以てしてもそれは徒勞であつた。ウリツセスが頑として應じない。「予は彼を憐む。彼はわが敵なれども、その惡運に縛られし不幸なる彼を見るが故なり。彼を見ると、予は自らを憶ふ。そは我等の、凡て生きとし生くる者の、幽靈、物の化に外ならざるを知らばなり。……たとひ其の者を憎むとも、瀕死の者に惡をなすは宜しからざるなり。」我等は此處でも未だ愛より顧る遠く置かれてあることを感じる。狡猾なウリツセ

スは彼の不自然な教化の動機を隠すほど悪智慧が廻つてゐない。彼がその敵を憐む所以は、彼自身の事を憶へばこそであり、また悪が何時かは彼の身にも降り罹つて来るであらうことを憶ふからである。また彼がその敵を許す所以は、單に彼が敵の運つたなく斃れかけてゐるのを見だ爲めに過ぎないのだ。

ソフロニスキスの息子で、ウリツセスよりは賢い、石工を職とする男が、多くの他の質問の中で、正しい人間が如何にその敵を遇すべきかを自ら問うてゐる。けれども原文を読んで我々は驚くべきことに、それれ違つた説を吐いてゐる二人のソクラテスを發見する。「メモラビリヤ」のソクラテスは、明かに普通の感情を享け容れてゐる。友達は善遇さるべきものだが仇敵は虐待さるべきものである。この故に悪事をなすには敵手の先を越すがよいと。彼れ乃ちケロクラテに曰ふ、「それ最も多く稱賛さるべき者は、傷害に於てその敵に先んじ、救助に於てその友に先んずる人なり。」然しながらプラトンのソクラテスは普通の説を享け容れてゐない。彼れクリトロンに曰ふ、「それ何人に向つても不義に報いるに不義を以てすべからず。汝の受けたる非行の如何に繋ばらず、惡に報いるに惡を以てすな。」さうして彼は共和國の主義綱領にも、たゞそれに惡の復讐によつて善化しない事を補足しただけで、やはり同じ意見を確認してゐる。けれどもソクラテスの頭を支配する思想は正義の思想で愛の感情ではない。如何なる場合でも正しい人間はその敵に對する愛情からでなしに、自尊心から（此の點、注意を要す）惡を行ふべきでない。惡人は自ら罰を受ける筈、さもなくば下界の閻魔が死後に於て彼を罰するであらうと語つてゐる。プラトンの弟子のアリストテレスは、秘かに古い思想に逆轉してゐる。則ち彼はその「倫理學」に於てニコマクスに言ふ、「他人の攻撃に憤りを發せざるは、激しい奴隸的な人間の標である」と。

ギリシヤではそれ故、キリスト教の先行者を探す人々の目的にそぐべきものが少い。然しながら、キリスト教がキリスト以前に存在してゐた事を我々に信じさせうがために、イエスを否定する人々は歴々ローマまで出かけて行つて、カイザル等の宮廷の中からイエスの敵手を探し當てゝきた。セネカ、青年紳士たちの良心の指導者である、目下流行の改造された堅忍主義崇拜の先驅者である彼れセネカは、未だ會て實際に貧困のために動かされたことのない、理論一點張りの貴族主義者である。富みを輕蔑しながらそれを固く握つて放さない、自由人と奴隸との平等を是認しながら自分で奴隸を飼ふ持主である。良心の咎め、邪惡、活動的な罪惡、満足な德行等の優れた解剖家である。流れは緩いが水の澄んだクリシツプスの古い教義に運河を掘つて、綿密の極度に達する河口まで綺麗に掘り上げた彼、その道徳家のセネカを、彼等は、キリストが生存中その教へを知らずに過したキリスト者であると主張するのである。彼の著作を熱心に讀みみて（多くはキリストが死ぬ前に書かれたものである。何故ならセネカは其等を書くに、彼が自殺を遂げる前、即ち六十五歳まで待つてゐたからだ。）彼等は次ぎのやうな文句を見

—166—

出した。曰く「賢き者は復讐せず、戻つて侮辱を忘る。」また曰く「神々を模倣せんには忘恩者にも善を行ふに如かず。それは太陽は邪悪なる者をも平等に照し、海は海賊船をも浮かぶればなり。」最後に曰く「我々は己が敵をも親しき手もて援助せざるべからず。」けれど哲人の謂ふ「忘れること」は「許すこと」でない。また「援助」は慈善に相當するかも知れないが愛ではない。權柄づくの人間や、堅忍主義の男や、パリサイ人や、また自己の哲理を誇る哲人や、自己の正義に満足し切つてゐる義人ならば、小さな者から與へられる侮辱や敵の刺棒を輕蔑も出來やう、またその度量の大きさを誇るためと、嘆稱を博すために、身を屈して飢ゑたる敵に一塊のパンを與へ、完璧の高所から意ならずもその身を譲り下すことさへ出來やう。けれども虚榮心の醉母で作られたパンや似て非なる親しい手は、決して涙を乾かしたり或ひはまた傷を纏帶したりする事が出來なかつたであらう。

古代の世界は愛を知らなかつた。女のための熱情、朋だちのための友誼、市民のための正義、他國人のための優遇は知つてゐたけれども、愛は知らなかつた。ギリシヤの主神ゼウスは巡禮者と他國人とを保護した。ギリシヤの家の戸を敲く者は、食事と葡萄酒一杯と寢床とだけは必ず恵まれたものである。また貧乏人は着せられ、弱者は扶けられ、哀しむ者は温かい言葉を以て慰められた。けれども古代の人々は愛を知らなかつた、憐れ愛、他人の哀しみを願つ愛を。總ての苦しみ忘れらるゝ者のための愛を、貧乏人や卑

下する者や法破りの悪性者や踏みにじられた者や棄てられた者のための愛を、總ての者のための愛を、同じ市民であらうと他國人であらうと、美しからうと醜くからうと、犯罪者であらうと哲人であらうと、兄弟であらうと、仇敵であらうと、その間に何等の區別をも知らぬ愛を。

「イリヤツド」の終ひの篇に我々は、一人の老人が、一人の服喪者が、一人の父が、彼の息子を殺し而も近くはその中でも彼が最愛の息子を殺したばかりの、その最も怖ろしい敵の手に接吻する所の、書かれてあるのを見る。老王プリヤムは有富な城市の首であり、五十人からの子を持つた父であるが、最も大なる英雄でありながら、ギリシヤ人の中では最も不幸なアケレスの足下に跪づく。アケレスは海の女神の子で、パトロクロスの仇を打ち、ヘクトルを殺した者である。跪ついた老人は勝利を誇る若者の前にその眞白な頭を垂れ下げる、さうしてプリヤムは斬り殺された全部の五十人の子供らの中でも最も強く、最も美しい、最愛の子のために泣き衰しんで、その殺害者の手に接吻をするのだ。彼は言ふ。「君とてもまた頭髪に霜を頂き、體の衰弱せる、頼り少なな父親を、遠く離れて持ち給ふ。その父親を愛する名の下に、せめて我が息子の屍なりと返し賜はれ。」

癡惡、狂暴の殺戮者であるアケレスは、歎願者を優しく一方に引き寄せ泣き出す。しかも其の兩人ともが、二人の敵同志、征服者と被征服者と、子を奪はれた父と最早再び父を見ることのあるまい子と、白

髪かみの老人らうじんと金髪きんぱつの青年せうねんとが両方りやうほうとも、初めて哀あはしみのために惹ひき寄せられて泣なくのである。周囲しゅういの人々ひとはたゞ打驚うちおどろいて無言むげんのまま、彼等かれらを看守くわんしゆするばかりである。三千年さんせんねん後の我々われらとても、やはり彼等かれらの悲歎ひたんに打顔うちかほはされずにはゐない。

けれどもブリヤムの接吻せつぶんには、赦ゆるしが無い、愛あいがない。この王おうは獲とがたい並外なみがいれた恩恵おんけいを獲とんがために身みを譲ゆり下くだして來てゐるのだ。若わしも或あるる神かみが彼かれに靈感こんがんを與あたへなかつたなら、彼は態たい々々イリウムから此處こゝまで出て來なかつたであらう。又アキレスは死しんだヘクトルのためや、泣なき哀あはしむブリヤムのためや、身みを譲ゆり下くだして來た彌力者やうりきしやのためや、殺害者ころがいしやの手に接吻せつぶんをもたらした敵てきのためなどに泣なくのでない。彼は失あはれた友ともを憶おもひ、彼かれには他の凡たゞての人々ひとより懐なつしいパトロクレスを憶おもひ、フティヤに残のこされたベレウスを憶おもひ、また己おのが青春期せいしゆんきの餘あますところ幾いくばく何なんもないのを知しり、彼かれのものは再び抱擁だうようすることの無なからう父ちちを憶おもうて泣なくのだ。さうして彼は父ちちにその子この屍體しんたいを引渡ひきわたす。——而しかも其そのの屍體しんたいたるや、彼かれが何日なんじつも何日なんじつも埃あひの中なかを曳ひき摺ずつて來たところのもの——それは彼の復讐ふくしやうに對する飢うゑが鎮しづまつたからではなく、ギリシヤの主神しゆじんゼウスの意志いしに基もとづくものである。その兩人ふたりが銘々めいめい自分のために泣なくのだ。ブリヤムの接吻せつぶんが必要ひつやうに迫せまられた意いにもない仕打しうちなら、アキレスの返還へんげんはたゞ神々かみに對して從順じゆんを示しすものに過ぎない。古代こだいの最もも高尚こうしやうな英雄いゆうゆうの世界せかいには、憎にくみを討うち滅めぼして憎にくみに取とつて代かる愛あいのために、憎にくみの力ちからより更に強つよく、

更に熱烈ねつれつで、更に假借かりかするところのない、更に忠實しゆじつな愛あいのために、惡あくを忘わすれることなく、惡あくを愛あいする愛あいのために——何故なら惡あくはその被害者ひがいしやにとつてよりも寧ろその加害者かがいしやにとつて不幸ふこうな事ことだから——取り殘のこされた餘地あまがない。古代こだいの世界せかいには敵てきに對する愛あいのために取り殘のこされた餘地あまがないのだ。

イエスは斯かくの如ごとき愛あいを語る、斯かくの如ごとき愛あいを考かんへ出す第一人者だいにんしやであつた。この愛あいは山上やまの上の垂訓すいこんの行なはれるまで知られなかつた。これはイエスの思想しゆしやうの中で最もも偉大ゑいだいなまた最もも獨創的どくじゆうてきのものである。彼の凡たゞての教きよへの中で、これは人々ひとにとつて最もも新あらたしいものであつた。さうして今いまに至いたるも彼の最もも偉大ゑいだいな革新かくしんとされる所ところのものである。それは我々われらにとつてさへ新あらたしい。何が故ゆゑに新あらたしいかと云いふに、それが未だに理解りかいされず、模倣もばうされず、服從ふくじゆうされずにあるからだ。眞理まことと同じく窮きゆうりなく永遠とこえんのものだからである。

愛すべし

「汝なんぢの隣となりを愛あいし、汝なんぢの仇あひだを憎にくむべし、と云いへる事ことあるを汝なんぢら聞きけり。されど我われは汝なんぢに告つぐ、汝なんぢらの仇あひだを愛あいし、汝なんぢらを詛のろふ者を祝ゆひ、汝なんぢらを憎にくむ者を善よくし、汝なんぢらを辱はぢしめ、責せむる者もののために祈いのれ。これ天てんにいます汝なんぢらの父ちちとならん爲ためなり。天てんの父ちちはその日ひを惡にくまき者ものの上うへにも善よき者ものの上うへにも昇のぼらせ、雨あめを正ただしき者もの

にも正しからぬ者にも降らせ給ふなり。汝ら己れを愛する者を愛すとも、何の報いをか得べき。取税人も然かするにあらすや。兄弟にのみ挨拶すとも、何の勝ることかある、異邦人も然かするにあらすや。さらば汝らの天の父の全きが如く、汝らも全かれ。實に言葉数が少くて、その辭、極めてはつきりした物の言ひ方である。然しこれが即ち、新しい種族、第三種族、未だ生れざる人々の「大憲章」なのだ。第一の種族は律をもたぬ動物のそれであつた、さうして其の名を「戦ひ」と稱した。第二の種族は「神の律」によつて馴致され、最高の完成を正義に置いたところの野蠻人らであつた。これは現存の民族で、正義は未だ「戦ひ」を征服せず、「神の律」は未だ獸性を排除してをらぬ。第三は舊に正しくあるばかりでなく、聖くして、獸に似ず神に似た、眞の人間の種族であらねばならぬ。

イエスは正に一つの目的を持つてゐた。それは人間を愛の力によつて獸から聖者に變へる事であつた。サタンの妻として古い神話の中に出て来る妖女キルケは、淫樂の力によつて英雄を獸に變らしめた。イエスは反サタン者、反キルケ者である。淫樂以上の強い力を以て動物性から救ふ人である。辛うじて動物性から浮び上つたばかりの總ての動物や、又は今將に木統の人類の生活を始めようとしてゐる人々に取つては、殆ど絶望的に思はれる此の計劃も、神を模倣することを基礎とすれば必ず成就するに違ひないのだ。聖い生活に接近しようためには、人間は神性を目指して進まなければならぬ。「神の聖きが故に聖かれ。」

神の完きが故に完かれ。」

この事の人の心に訴へられたのは、これが初めてではない。サタンは花園に於て「なんぢ神の如くなるべし」と云ひ、エホバはその裁き手に向つて「神たれ、神の義しきが如く義しかれ」と云つた。然しながら此處では、神のやうに聰明であることが問題にはされてゐない。また神のやうに正しくあると云つてもその正しさがまだ徹底してゐない。神は今や智慧や正義以上のものである。イエスと共に神は我々の父となり、また愛となる。神の土は殺人者にすらパンと花とを與へる。神の名を濫用する者と雖も毎朝立派な太陽を見るが、その同じ太陽の光りは野に祈る労働者の合掌した手を温めるところのそれである。眞の父は彼を探し求める子を愛すと同じやうに、彼に叛く子をも愛す。父は家に在つて彼に従ふ子でも、また酒の反吐で彼を吐き出す子でも同じやうに可愛がつて育てる。父は哀しまされることも出来、惱むことも出来、歎くことも出来るが、罪を犯す者はどんな者でも父を自分のやうな者にする力がない。誰でも父に復讐を勧めるわけには行かない。

處で神よりすつと低い、憐れな限りある動物の我々、昨日の事さへ憶ひ出す能力だになく、又明日の事さへ碌々知らぬ、不幸な劣等動物の我々、その我々は神が我々に感じる見じめさを更に幾層倍加して、我々の兄弟のために感ずべき動機を持つてゐるではないか。神は我々の理想の最も優れた實質である。神から

遠去かること、神よ、共に在れと祈るその祈りに叛くことは、これこそ我等の単一の目的地から遠去かることではないか。我等がそのために創られ、我々の生活の目的がそれであると信じ、我等の想像し夢見て来たところの、まが就中、眞に神のものでない有らゆる偽りの幸福のために、たゞ徒らに請ひ、願ひ、従つて来たところの其の幸福を、永久に絶望的に我等の手の届かぬ範圍外に押しやることではないか。「我をして神たらしめよ」と、ボスエは叫んでゐる。「我々をして神たらしめよ。神は我々をして神の聖さを摸倣せしめんがために其の事を許させ給ふ。」

誰か神に似ることを拒む者があらう？「デイイ・エステイス」。神性は我等の中に在り。動物性はそれを阻害し壓迫して我等の生長を妨げようとする。誰か神たるを欲しない者があるだらう？ おお、人々よ、諸君は眞にたゞ人間であることに満足なのか。諸君のやうな今日の人間は半人半獸ではないか。靈力のない人、馬、魅力のない妖魔、牧羊の口鼻と山羊の脚部とを具へた鬼神ではないか。諸君はその野生の不完全な人間性に、たゞ神の聖さを望むだけで、それを獲るために一歩も踏出してゐない、些度も締のない動物性に、それほど満足なのか。人間の生活が過去でもさうあつた如く現在でもさうあるべきで、しかもそれがこれまでとは全く違つた、現在とは全く反對の、何の事はない丁度、我々が未來と天とに向つて千年間も想像して来たところのもの、やうに、それを轉換せしめる努力も何も要らないと思ふ程、それは

ど諸君は現在の生活に幸福を感じ、それに満足してゐるのか。この生活から他の生活をつくり、この世界をより聖い世界に變へ、少くとも天と天の律とを地上に曳き下ろすことが、果して出来ないものか。

この新らしい生活、この地上の清淨な世界こそ、天國なのである、さうしてその國をもたらすためには我々は我々自身の容を變へて神のごとく潔くし、神のやうになり、神を摸倣しなければならぬ。神を摸倣する秘訣は愛である、確實に容を變へる方法は愛である、人間が人間を愛す愛、友達をも愛す愛である。もし此の愛が不可能ならば、我々の救ひは不可能である。もしそれが適合しないならば、それは幸福が我々に適合しない徴である。もしそれが馬鹿らしければ、我々の贈罪に對する望みは愚の骨頂である。常識に従へば己れの敵を愛することは氣違ひじみてもあやう、またそんな愛を救ひの必要條件とする。これは狂氣の沙汰とも考へられるだらう。敵を愛すことは己れを憎むやうなものだ。従つて我等が幸福を得る唯一の道は、自分らを憎むに在るといふことになるのだ。

この結論が何人をも駭かす筈はあるまい。何故ならそれは既にこれまで試験を経て来たものであり、又あらゆる實驗が試みられて来たものだからである。これまでそれを試す時間がなかつたと云ふのは嘘だ。何千年となく我々はそれに就いて繰返し試験に試験を重ねてきたのである。我々は残忍性の實驗も試みてきた、さうしてその結果は血が血に應へた。我々は色慾の實驗も試みてきた、さうしてその結果は色慾が

口中に腐敗の臭氣と一層激しい熱とを残した。我々は最も精巧に巧まれた邪曲な快樂の中に肉體を押しやつてきた、さうしてその結果は自分達の疲れ果て、陰惨な氣持となり、不潔の上に横はつてゐるのを見出した。我々は神の律の實驗も試みてきた、さうしてその律に従はずにきた。我々はそれを變へてもみだがそれにもまた従はなかつた。正義は我等の心を満足させなかつたのである。我々は知力の實驗も試みてきた。創造物の調査を行ひ、量を數へ、植物を圖解し、死んだものや生きものを記録した。それらを一緒に抽象的な思想の細い糸で束ねてもみた。形而上學の不可思議な雲の中でそれらの容を變へてもみた。しかも其の最後へ行つて、總てのものには何の變りもなかつた、永久に同じ事であつた。それでは我々が満たされない、何とかして其等が新しくされ得なければならぬのである。その名稱もその數も我々の飢ゑを減じてくれなかつた、さうして最も優れた學者が最後には疲れ果て、無知を表白して死んで行つた。我々は藝術の實驗も試みてきた、さうしてその結果、我々の無力が殆んど絶望の外ないことを知つた、何故なら宇宙は如何なる形にも定着することが出来ないからだ。多くのものが一つのものから溢れ出る。どんなに入念に作られた藝術品でも、刻々に變る生命を捉へることが出来ない。我々は富を増すことの實驗も試みてきた、さうしてその結果は我々自身の前より一層貧しくなつたことを覺つた。力を振ふるふことの實驗も試みてきた、さうしてその結果は前より一層弱くなつたことを覺つた。何ものにも我々の靈魂は安靜を

見出して來なかつた。我々は喜んで我々を迎へ、我々の體を横へ、憩ひに就かしてくる唯一ヶ處の木陰さへ見出しかねてきた。絶へず求めて絶へず失望しつゝある我々の心は、前よりも一層老い、一層衰へ、一層虚しくなりかけてゐる。その理由は我々が何ものにも平和を見出さず、どんな快樂からも歡びを與へられず、どんな征服からも幸福を贏ち得ず來たからである。

最後の實驗

イエスは彼の實驗を、残された唯一つの可能性を、愛の實驗を提案する。その實驗は今まで何人も成就した者がなく、企てた者（それも生涯のうち極く僅かの間に過ぎない）さへ少かつたところのもの、我々の本能とは正反對のもので、到達するのに至難の道ではあるが、然し約束したものを與へ得る唯一つのものである。

自然の手から來る時、人間は自分の事だけを考へて、自分以外に何ものをも愛さない。非常に骨の折れる然し進歩の遅い努力を以て少しづつ、彼は暫くその女と子供らを愛すことに、また狩獵や暗殺や闘争に仲間を誘き入れることに成功する。彼が友を愛し得るなどいふことは滅多にない。彼はそれよりも寧ろ

容易く自分を愛してくる人間を憎む。己れを憎む人間を愛すことなど夢にも考へてゐない。

これは總て、イエスが何のために我々に敵を愛せよと命じたか、その理由を説明するものである。全人を改造し、新人を創造せんがためには、古い人間に固着してゐる主要な部分を破壊しなければならぬ。利己心からは世界のあらゆる不幸や虐殺や惨事が生れて来る。古いアダムを馴らすには、人間から利己心を剥取らなければならぬ。さうしてその代りに現在のものとは全く性質の異つた愛、即ち敵のための愛を植付けなければならぬ。人間の完き更改とは斯かる卓絶した逆説をいふのであるから、それに達するには幻想の力に據るほか方法がない。それは暴つばい非自然的な驚くべき企てである。しかもそれを成就するには非常手段を講じて、自然に叛いて自己を高めるよりほか仕方がないのだ。

人間はこれまで自分自身を愛し、自分を憎む者を憎んできた。未来の人間、天國の住民は、自分自身を憎んで、自分を憎む者を愛さなければならぬ。己れの如く隣人を愛すといふことは、生活信条としても不十分のものであり、普遍的な我愛を主とした誤歩である。何故なら己れを愛する者は他人を完全に愛すことが出来ないために、止むを得ず他人と衝突を免れなくなるからだ。我々が自分自身を憎めばさうした憂ひはなくなる。もし我々が己れを愛する場合には、我々はあまりに自分らを賛仰し、あまりに自分らに媚るやうになる。この盲目的な愛に打克つために、我々は自分らの無價値、卑劣、醜さ加減をはつきりと

見通す必要がある。自分自身を憎むことは謙遜な氣持になることで、それこそ進歩の始まり、完成の第一歩である。しかもさうした謙遜な者だけが天國に入るべきであらう、何故なら自分らの其處からどれほど遠く離れてゐるかを感じる者は彼等の他にないからだ。我々が他人に對して怒るのは、我々の愛する自我が不法に傷けられたり、または他人から満足に遇されなためである。我々が兄弟を殺すのは、その兄弟が自分らの利福に邪魔になるからだ。我々が物を盗むのは自分らの體を愛するからだ。我々が姦淫を行ふのは、自分らの體に快樂を與へんがためである。競争心や戰鬥氣分の母である嫉妬心は、單に他人が自分らより餘分に物を持つてゐるとか、或ひは自分らの持たぬものを持つてゐるといふ悲しみの心に外ならない。誇りは自分たちが他人よりも有爲なものであるとか、又は他人より餘分に物を持つてゐるとか、他人より餘計ものを知つてゐるとかいふ確信の現れである。宗教、道徳、法律などで罪惡、不道徳、罪過などと呼ぶところのものは、總て利己心、即ち一つの孤獨な病的の愛から湧き出るところの他人を憎む心持に始まるものである。

我々各自がそれによつて當然彼等を憎んでもいと考へる、その同じ罪過を犯してきてゐる場合、我々自身が己に他人を憎むだけの罪を犯してきてゐる場合、何の權利があつて我々は敵を憎むのか。たとひ彼等が悪い事をしてきたにもせよ、又たとひ我々が彼等を惡人と信じるにもせよ、我々とても自分自身が既

にそれと同じ悪行を始終はたらいて來、また同じ程度に墮落してきてゐる場合、何の權利があつて我々は敵を憎むのか。彼等の憎みに對して責任のあるものは、彼等ではなくして殆んど始終我々である場合、自分の惡魔的な利己心の限らない誤りから、我々が彼等に自分らを憎ませるやうに強制的に仕向けて來てゐる場合、何の權利があつて我々は敵を憎むのか。しかも憎む者は不幸だ、最初に憎みを感じなければならぬからである。我々は此の憎みに愛を以て應じ、その惡意地に優情を以て接しなければならぬ、それは直接にまれ間接にまれ、我々が屢々實際的原因となつてゐる其の苦惱を償はんがためである。

我々の敵はまた我々の救ひ主でもある。我々は毎日自分の敵に對して感謝しなければならぬ。彼等だけが我等の内につて氣の付かぬものを明瞭に見透して公然と言つてくれる。彼等は我々に道德的の貧しさを意識させてくれる、さうして其の意識を實現することが再生のための唯一の出發點なのだ。この努めのために我等は彼等に愛を負ふ。何故なら我等の敵は愛される必要がある、我々から愛される必要があるからだ。我等を愛する者は既にその歡びを得て、自分自身に報いられてゐる、彼は我々から報酬を得る必要がない。けれども憎む者は不幸である、不幸なればこそ憎みもするのだ。彼が憎むのはその苦惱の辛い捌け口なのだ。我々は其の苦惱のために一部の罪を負ふ義務がある。たとひ我々の潔白を過信して、自分に責任を感じないとしたところが、我々はとにかく愛を以て憎みを持つ人の不幸を慰め、彼の氣持を取り

鎮め 彼をより善くし、彼もまた愛する事の幸福を感じるやうに改心せしめなければならぬ。彼を愛すれば、我々は彼を一層よく知ることが出来るであらうし、一層よく知ることが出来れば、我々は彼を尙ほ一層愛すやうになるだらう。我々は我々のよく知るものを心から愛す。我々が自分の敵を愛すならば、その魂がはつきり我々の眼に映つて來るだらう、そしてそれを更に奥まで見透す場合、我々はそれが尙ほ一層我々の憐みと愛とを誘ふことを發見するであらう。何故なら敵は一人残らず、氣付かれない兄弟だからである。我々は屢々自分の性質に似たものが敵にあるために、彼を憎むことがある。大方自分にも氣の付かない我々自身の或るものが敵の中に在つて、それが屢々敵對の原因になることがある。我々が己れの敵を愛する場合、我々はその理解力によつて己れの魂を淨め、相手の魂を向上せしめる。斯くの如くにして憎みは、人間を離れ離れに遊ひやる代りに、人間の魂を解放する光りを放つかも知れない。惡の最も極端なものが反つて最高の善をもたらすかも知れない。

この故にイエスは我々に、人間の普通、在り來りの關係を逆轉するやうに命じるのである。人が今憎むことを愛し、今愛することを憎めば、彼は今日の彼とは正反對のものにならう。さうして今の生活が罪惡と絶望とから出來てをるなら、新たな變へられた生活は今日のものとは反對に總て善行と慰めだけのものになるだらう。その時我々は初めて幸福を知り、天國が地上に始まるであらう。我々は最初の人間が善惡

の差別を知りたがつた許りに失つた所の永遠の樂園を見出すことであらう、父なる神の愛のやうな絶対的の愛には、善もなければ悪もない筈。悪は善に厭倒されてしまふのだ。樂園は愛であつた、人間と神との愛、男と女との愛であつた。新しい地上の樂園、再獲された樂園では、銘々の人間が總ての人間を愛すやうになるだらう。アダムを花園の門口に連戻つて来て、どうすれば彼が其處に入ることが出来るか、またどうすれば其處に何時までも住むことが出来るかを教へるものが、即ちキリストなのである。

アダムの後裔はキリストを信じてゐない。彼等はキリストの言葉を繰返して來たけれども、それに従はなかつた。さうして彼等の心が剛愎であるために、人間は未だに地上の地獄に呻吟してゐる、しかもそれが世紀から世紀へと一層激しくなつて行くのである。その苦痛が終に堪へられなくなると、今度は地獄に墮された者が急に憎しみを憎む心になるだらう。瀕死の叛逆者が絶望の極に達して刑吏を愛す心になるだらう。やがて終には悲歎にくれる憂愁の底から靈妙な春のすがすがしい光彩が輝き出すであらう。

我等の父よ

キリストの弟子たちはイエスに祈りを求めた。イエスは彼等に人の居る處にて簡單に祈るやうに告

げた。けれども彼等は徹底的で術學的な會堂の祭司たちの勸める祈りには少しも満足しなかつた、彼等はキリストの仲間の機語となるやうな彼等自身の祈りを欲したのである。イエスは山上に於て初めて「主の祈り」を、彼のこれまで教へた唯一つの祈りを教へた。それは世界中に於ける最も簡單な祈りの一つだ、人間の家庭から神の許にまで上つて行く最も深遠なものだ、言葉の飾りもなければ理窟も捏ねず、大膽でもなければ卑屈でもない祈り、總ての祈りの中で最も美しいものだ。然しながら主の祈りは簡單であるにも關はらず、いつも理解されなかつた。何世紀となく古い、舌と唇との機械的な繰返しが、形式的な儀禮の繰返しが、その根本的の意義を没却してしまつて、それを殆んど字句の繋がりだけのものにしてしまつた。それを今日我々が初めて讀む新しい原文のやうに、一語一語讀んで行くと、そのうちに儀禮的の平凡さが失くなつて、最初の本義が鮮かに現れて來る。

「我等の父よ」。何故なら我等は汝から生れ出で、子の父に對する如く汝を愛し、汝から何の虐待をも受けぬであらうから。

「天にいます」——地と反對の處に、物質から反對の區域に、精神の中に、我々の魂である精神の、小さいけれども恒久的な部分の中にいます。

「顯はくば、御名の崇められんことを」。言葉で汝を崇めるだけでなく、より大なる愛を以て我々を汝の

側近くに引寄せ、汝に有用の者とならしめ給へ、それは汝が最早復讐の神、軍の神でなく、平和の喜びを教へる父であるから。

「御國の來らんことを」——天國、愛を精神とする國、福音の國。

「御意の天の如く、地にも行はれんことを」——汝の善行と完成との律が、靈魂をも物質をも、見える世界をも、見えざる世界をも、共に治めんことを。

「我等の日用の糧を今日も與へ給へ」。精神を支へるために必要な我等の物質的な肉體は、その生命を續ぐために毎日少量の物質的な食物を必要とするから。我等は汝に危険な重荷である富を求めるものではない、たゞその代りに、約束された生活に我等を一層役立つ者たらしめんがため、我等を生かすところの少量の食物を乞ふものである。人はパンのみにて生きるものではない、けれども一片のパンだに無ければ靈魂は肉體の中に宿りながらパン以上に尊い別なものを養ふことが出来ぬであらう。

「我等に負債ある者を我等の免したる如く我等の負債をも免し給へ」。我等が他人を免すが故に、我等をも免し給へ。汝は我等にとつて永遠無窮の責権者である。我等は決して汝に對する負債を拂ひ得るものではない、然しながら我等の弱きが故に、我等の債務者の唯一人の唯一つの負債を免すことも、我等にとつては汝が我等の汝に負ふところの總ての負債を帳消しにする以上に、絶大の努力を要するものであること

を憶ふものである。

「我等を嘗訊に遇はせず」。我等は弱くして、未だにこの俗世間の肉慾に捕へられてをる、さうしてそれが時としては非常に美しく見えて、我等を背信の歡びにまで誘ふことがある。この苦惱多き更改のあまりに困難ならざるやう、また天國に入る日のあまりに遅れないやうに、我等を助け給へ。

「惡より救ひ出し給へ」——天にいます靈にして、到る處に我等を取捨き、それより我等の脱るゝことの困難なる惡、頑強に抵抗する物質に對して力を持つところの汝、なんぢサタンに對して、物質を否定するところの者よ、我等を助け給へ。我等の眞に大なる所以は、この惡を征服し切ることに在るのである。しかもその惡は絶えず起つて來るので、それを總て徹底的に征服し切るまでは眞に征服したとは云へぬのである。然しながらこの決勝も、もし汝が汝の盟約を以て我等を助けるならば、一層その時機を速めることであらう。

この救助を訴へる言葉を以て主の祈りは終つてゐる。その中には何ら東洋風の祈禱にあるやうな退屈な媚び諂ひがない。犬の發明したやうな、といふ譯はその主人から生かして食はして置いて貰ふが故に、その犬の心で主人を崇める追従と誇張との冗辯も、その中には見出されない。又それには詩篇の作者のやうに、あらゆる種類の援助を神に願つて、精神的な救ひよりは世俗的な救ひに重きを置き、收穫が良くなか